
wish

結里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wish

【Nコード】

N3471N

【作者名】

結里

【あらすじ】

ある日、飲み仲間だった友人が死んだ。謎を残す死に方だった。朔良は友人の望みを叶えようと立ち上がる。果たしてその望みは、願いは叶えられるだろうか。

プロローグ

街の雑踏の中、彼女は人混みをすり抜けるように歩いていた。

黒くスリムなロングコートに黒いブーツ。肩まであるストリートヘアーは茶色く染めてあったが、明るい派手な色ではなく落ち着いたものだった。

歳は二十代前半くらい。

表情はなく、ただ足早にヒールの音を響かせながら歩を進める。

街ではつい先刻から雪がちらついていた。

今年一番の寒さになると、今朝気象予報士がテレビで言っていたことが薄い記憶のなかから呼び起こされる。

彼女はもうどれくらいそうしていただろうか。

とくに目的地が無いのか、同じ道を通ったり駅の反対側に行つては戻ったりしていたのだ。

まるで、何かから逃れるかのように。

しかし、振り向くことは無かった。まるでその様は動いてないと落ち着かないように見える。

夕方の退勤時間になったせいで、かなりの人々が行き交っていた。ある時、彼女はサラリーマン風の男性に避けきれず、肩がぶつかった。何時間もヒールのあるブーツで歩き、疲れきっていた足は、その衝撃に耐えられず彼女は少しよろけた。

それをきっかけに立ち止まる。

すぐ後ろを歩いていた、これまたサラリーマン風の男性が、いきなり現れた障害物に軽く舌打ちをして避けて行った。

彼女は比較的邪魔にならないよう、道の端に寄り天を仰ぐ。

そのままパラパラと落ちる雪を見つめた。

この街で雪は珍しい。年に一、二回降るか降らないかだ。

夕方とはいえ既に冬の空は暗い。しかし街のネオンのせいや雪のおかげか、空は闇色にならず少し明るい。

どこか幻想的だった。

それからどれだけそこに立ち尽くしていただろうか。

「あの……」

ふと声が聞こえてきた。あまりに小さく空耳かと思うほどの声。

どの方向から聞こえたのかすぐには把握できなかった。

ゆっくり下を向くと目の前にいつの間にか少年が立っていた。

声に反してしっかりと目で彼女を見つめている。そして申し訳

なさそうに少年は言った。

「大丈夫…ですか？」

彼女はまじまじとその少年を見つめ返した。

ヒールを履いた彼女より少しだけ背が低く、見た目は高校生くら

いだった。ダツフルコートにジーンズというラフな格好。

恐らくずっと立っていたから心配したのだろう。彼女が口を開き

かけたとき、ふと別の目線を感じて新たな存在に気づく。

少年の後ろからその主は徐々に近づいてきていた。ロック好きそ

うな黒い服で、髪は金髪。少年より二つか三つくらい歳上にみえた。

その彼は近くまで来ると少年に言った。

「勝手に先行くなよ」

「あ、ごめん……でも……」

少年はサラッと彼に一言だけ謝ると彼女に向き直った。

「あの、変なこと言うようですけど……」

そこで一旦間を置く。

そして次に少年が発した言葉は、その後しばらく彼女の忘れられ

ない一言となった。

「悲しかったら素直に泣いた方が良いと思います」

「！」

彼女は驚いた。ここへきて初となる表情の変化だったかもしれな

い。

しかしそれは一瞬のことで、彼女はすぐに笑顔を作り、先ほど言

おうとしていた言葉をそのまま言う。

「ありがとうございます。でも大丈夫です」

これがこの不思議な二人と、彼女との初めての出会いだった。

さかきはらさくら
榊原朔良

ニュース

「大変！朔良さくりょう！大変だよ！」

この世の終わりとでも言うかのように、青ざめた顔で沙織里さおりは叫んでいた。いや、実際には携帯電話から通した声のみの情報だったが、おそらくそんな表情をしているのだろう。

朔良には容易に想像出来た。長い付き合いだ。沙織里とは原田沙織里はらだといって、大学から一緒によく遊んだ親友だった。

「二日酔いで会社に遅刻したとか？」

朔良は一番ありがちな沙織里の「大変なことを予想してみた。沙織里とは飲み仲間でもあり、今でもよく一緒に飲む。」

しかし沙織里はすぐに返してこない。もう少し深刻な話しだな、と朔良は気づいた。

「テレビ見てないの？」

沙織里から案の定恨めしげな声が聞こえてくる。

「テレビ？」

まったく予測しなかった単語に、朔良は小首を傾げた。

そしてテレビにまつわる沙織里の「大変なことを考えようとした。」

直後、それを制するかのようについに沙織里がまた叫ぶ。つい、携帯を耳から離れた。

「何でも良いからテレビ！テレビつけて見て！」

「いま外なんだよね」

右手に携帯、そして乳白色のコートのポケットに左手を突っ込みながら、朔良は歩いていった。

今日は祝日で今は昼間だ。この前の雪の日とは同じ季節だと考えられないほど温かい。

朔良は陽気な気候に誘われて、一人でブラブラとショッピングを楽しんでいたのだ。給料日前で、ほとんどウィンドウショッピングになってしまっているのが悲しいところだが。

そんな呑気な温度差に苛々しているのだろう。沙織里は容赦が無かった。

「ワンセグでも電気屋でも良いから！早くテレビ見る！」
ブツリと通話が一方向的に途切れた。ご丁寧にワンセグを使うように気を使ってくれたらしい。

朔良はため息をついて辺りを見渡した。

ちょうど道を挟んで向かい側のカフェに目が止まった。普段なら通り過ぎてしまいそうな小さな店。休憩がてらそのカフェに入ることにした。

中に入っても少し寂しい客数だった。奥に二人用の小さいテーブルを見つけて、そこに腰を落ち着かせると、メニューの一番初めに書いてあったコーヒーを注文する。

夢中で店をまわり気づかなかつたが、足はかなり疲れていたようだ。パンパンに張った脚を思いきり伸ばした。

ああそうだ、と声には出さずに呟き携帯を開く。ワンセグを起動させた。

沙織里はテレビ、と何回言っただろうか。その間に何が大変か言えたのではないか。朔良は少々不満そうに映像が映し出されるのを待った。

頬杖をつきながら、何チャンネルに合わせたら良いんだろう、と思う。しかし映像が移るとその疑問は消えた。

緊急ニュースという文字が右上の辺りに出ていたのだ。恐らくこの時間帯ならワイドショーや情報番組が多いから、どこの局もこのニュースを伝えているのだろう。

朔良は水を飲みながら、しばらくその内容を見つめた。もちろん音声は消している。いくら空いてる店内でもマナーは大事だ。静かなこの場では逆に目立つだろう。

しかしそれで充分だった。画面のテロップから、どうやら銃を持って犯人が立てこもりをしているということが分かった。

深刻そうな表情をさせたアナウンサーが二人、何やら喋っている。

徐々に見入っていたそのとき、注文したコーヒーが置かれた。口に運ぶものが水からコーヒーに変わる。朔良はブラック派だったので、視線を外す時間が省かれた。

画面の中では二人のアナウンサーから、その現場だと思われる映像に切り替わった。

「っ……！」

朔良はその場所に思わず目を瞠みはった。

あまりの驚きに、コーヒーを口から噴き出してしまいそうな衝動が襲う。必死にそれと戦い、喉に押し込めることに成功した。

「こほ！けほっ！」

しかし防ぎきれなかった僅かな量が気管に入る。慌てて紙ナプキンで口を覆った。鼻にまでダメージがある。

「な………」

痛みを感じながらも、やっと落ち着くとニュースを見直した。遠慮がちに音量を少し上げる。

「犯人達は未だ人質を取り、立て籠こもっています。銃声が一発聞こえた、という近隣住民の情報を先ほどお伝えしましたが、その後、動きは見られません」

生中継というテロップと共に映し出されたその建物は、朔良のよく知る場所だった。

その前でスーツを着た男性が一人、実況中継している。

そこは朔良が沙織里とよく行っている、ダイニングバーが入っているビルだったのだ。

しばらくするとスタジオに移り、そして次に犯人の顔写真が二枚並べて映し出された。

「え、えー……」

つい変な声が出た。

「犯人は黒江亮くろえひやう容よう疑ぎ者と冬馬ふゆま崇たかし史し容よう疑ぎ者、どちらも二十七歳です。

「……………」

まだアナウンサーの情報は続いていたが、朔良の耳までは届かな

かった。その写真の一人を穴が空くほど見つめる。

一人…知っている顔、だったのだ。

しばらくニュースを見ると朔良はチャンネルを変える。やはりどこの局もこのニュースで持ちきりだった。それを実際に確認するとワンセグを閉じて、慌ててコーヒーを飲み干し店を出た。

あまりに静かで電話をするのも気を遣う。それに、これからするだろう会話の内容も聞かれなくなかった。

外に出るとすぐに着信履歴の一番上を呼び出す。

沙織里は待っていたようで、コールもしない内にいきなり叫んだ。

「朔良！見た？」

「…見たよ、びっくりだねえ。コーヒー嘖くかと思った」

歩きながらも、朔良はやはりどこか呑気な声を出した。

「なに悠長なこと言ってるの？あの冬馬さんがまさかこんなことを

…」

それに反して沙織里はショックを受けているようだ。途中から不自然に言葉が途切れる。

そう、二人の共通の知り合いである冬馬崇史が犯人の一人だったのだ。

「多分志保のことだよ。冬馬さんが警察に要求してること」

「え？そんな情報あった？」

沙織里の言葉に朔良は歩きながら訊いた。

「まだ公表されてないみたいだけど、俊くんが言ってたの。冬馬さん昨日、警察の不満が溜まってて、店で酔って暴れていたって」

俊とは河口俊と言って、二人の飲み仲間の一人だ。最近特に沙織里と仲が良い。

「志保のこと？」

志保も飲み仲間だった一人だ。

笠原志保は、半月前にその短い人生を終えてしまった。朔良や沙織里と同じ年だった。

あのダイニングバーで知り合い、仲良くなった友人。彼女は自分

のマンションからその身を投げたのだ。遺書などは見つかってない。だが警察は事件性がなく、自殺だと判断してしまった。

まだこの話しになると、そこに黒い影がよぎる。沙織里は落ちた声で教えてくれた。

「そう。志保のこと、警察は自殺で片づけたでしょう？だから凄く荒れてたみたい。絶対ちゃんと思査させてやるって」

崇史は志保と婚約していた。そう、もうすぐ結婚する予定だったのだ。日取りも決まっていた。

そんな時に自殺なんてあり得ないと、よく飲みの席で崇史は不満を漏らしている。朔良もその光景は目にしたことがあった。崇史の丸くなった背中が思い出される。

「じゃあやっぱり、いま立てこもってるのってMIYOSHI？」

MIYOSHIはその飲み仲間が集まるダイニングバーの名前だ。先ほどのビルの六階にある。

「うん。一度、帰って行ったって俊くんが言ってたから…多分、閉店間際にまた来たんだろうね」

なるほど。朔良は心の中だけで納得した。

追い詰められていた崇史は、それから仲間を引き連れて戻って来たのか。どこから銃なんてものを手に入れて。

「本当にどうしちゃったんだろう。あんなに優しい人だったのに…」

……あんな人と一緒にいるから、抑えられなかったのかなあ？」

「一緒にいる犯人、知ってる人？」

心配そうな沙織里の口から出た言葉に、朔良はふと疑問を投げ掛ける。

駅前まで歩いてきていた朔良は、ベンチを見つけると注意深く眼を動かした。最新新しくできたベンチで、汚れは見つからない。それを確認すると、携帯を耳にしたまま腰掛ける。

「本当にニュース見たの？」

「見たけど…あんまり音声だしてなかったから」

沙織里から出た不満気な声に、軽く笑って朔良は誤魔化した。電

話の向こうでため息が聞こえる。

「黒江亮って人、暴力団にいるんだって。ニュースで言ってたよ。なんでそんな人と知り合いなんだろっ」

「ふうん。それで銃なんて手に入っちゃったんだ」

「どうしよう朔良！あの中に三吉みよしさんいるんだよね？他にも最後までいたお客さんも残されてるみたいだし。知ってる人、他にもいるかも」

沙織里は泣きそうな声になった。

三吉というのは言わずと知れたMIYOSHIの店長だ。不思議な魅力を持った人だった。笑顔がいつも爽やかで、なにより、万人に好かれているのが雰囲気からにじみ出ていた。

同じ空間にいるとそれは伝染するようで、MIYOSHIはそのおかげで常連客が多かった。最初はもちろん、知らないお客同士だったのが気づいたら仲良くなっていく。そういう仲間が何人か朔良達にもいたのだ。

「どうしようって…どうにも出来ないでしょう。警察いっぱい入れてないし、なんたって銃あるし？冬馬さんがこれ以上アホなことしないように祈るだけじゃん？」

どこか間延びした口調で朔良はぼやく。

「朔良って意外と冷たいんだね。知らなかったよ」

低い声でそう言うともまた沙織里から通話を切った。怒らせてしまったようだ。

(…私は、知ってたよ……)

朔良は一息吐くと、携帯をバッグにしまってベンチから立ち上がった。

癖の一貫で数回汚れを気にしてお尻をはたく。乳白色のコートでは、もし汚れがあったとしてもそれでは落ちなかっただろうが。

温かいと言ってもまだ冬だ。風が吹き抜けるとその身は反射的に震えた。コートの胸元を手で抑えながら、朔良の足は目的地を持って動き出した。

せつかく外にいたることだし、現場まで行ってみようと思ったのだ。朔良は行き慣れた道歩く。

そして辿り着くと、そこは先ほどニュースで見た光景とほぼ同じだった。違ったのは、想像したよりも警察やマスコミ、そして野次馬がたくさんいたことだ。

「すご……」

あまりの人に、つい本音が口からこぼれた。

これでは本当に近づけない。何より規制が張られていているようだ。人混みをかき分けたところで、警察が睨みを利かせているため入れない。

MIYOSHIのあるビルは十五階建てで交差点の角に建っている。今はこの道に車が一台も通れないようにされている。

朔良はどこかに隙がないかビルの周りを移動してみた。

携帯をもう一度取り出しワンセグに繋げる。今度は音量を大きくした。携帯のスピーカー部分を耳に当てて、画面を見ずに音声だけで情報を得ようとする。

目線はまっすぐ前を見ていた。足は止めないままだ。

その中では亮と崇史の生い立ちを簡単に紹介していた。二人はなんと同じ高校の友達だとアナウンサーが伝えた。

（ああ。それで……）

妙に腑に落ちた。本当にマスコミの情報は早い。一日も経たずにかなりのことを調べているようだ。現在進行形で。

これでは志保のことまで繋がってしまうだろう。そう朔良が思った時だった。不自然な流れで二人の紹介のVTRが止まり、スタジオに移された事が音声のみでも分かった。

『只今、新しい情報が入りました』

つい朔良は足を止め、画面に見入る。

『冬馬崇史容疑者には結婚を約束した恋人がいたということが分かりました。先月、その女性が謎の死を遂げてしまったということです。その為、冬馬容疑者は最近荒れた生活をしていて、という証言

「が得られました……」

「やっぱりか。朔良はげんなりした。」

「まだ志保の名前までは言わなかったが、いずれ写真付きで紹介されるのだろう。そしてアナウンサーは、警察への要求内容も新情報として発表した。沙織里が語った予想と、相違は無かった。」

「志保の件の再捜査。」

「見たこともないコメンテーターが崇史の心情を語っていた。マスコミが食いつきそうなネタだ。」

「嫌気がさして携帯をしまつと、朔良は再び周囲を観察しながら歩き出した。」

「やはりどこも人だらけだ。警察の規制も完璧だった。中に入るのと以前に、近づくことさえ出来ない。沙織里に投げやりに答えた割に、だんだんと必死になってきている自分に気づいた。」

「どうやって、中に入るのか。」

「僅かに眼光が鋭くなる。」

「入りたいんですか？」

「中は確かに気になる。」

「入りたいなら力貸してやってもいいけど」

「いや、入ったところで力もない自分に来ることなんてあるのだろうか。」

「あの……」

「おい……無視かよ」

「考え込みながら歩くのに集中しすぎた為か、朔良は声を掛けられた事に数秒気づくのが遅れた。」

「ん？」

「咄嗟に立ち止まり、朔良は振り返る。」

「おっと！いきなり止まるなよ」

「うわっ！」

「そこには男の子が二人。目標が突如止まった為に、慌てて動きを制止しなければならなくなっていた。」

前に、金髪のガラの悪そうな男の子。その後ろには、止まりきれず金髪の子の背中に鼻をぶつけていた少年。

「あっ」

そこには一ヶ月前、雪の降った日に見たことのある顔が二つ、並んでいた。

「よ！久しぶり！」

金髪が手を上げて、まるで友人に対する挨拶のように言った。するとダツフルコートはやくの少年が鼻を押さえて隣を睨む。

「軽すぎるよ隼人」

「良いだろ、別に。ケイは大人しすぎ」

な？と金髪の隼人は朔良に笑いかけた。

「いやいや、な？って言われても……」

知らないし。

朔良は苦笑してぼそつと呟いた。

「良いからお茶しよ、お茶。ここ寒い」

隼人は朔良右腕を掴んで強引に歩き出した。

確かに、ロック系な黒い革のジャケットを着ているだけで薄着だった。じゃらじゃらと無駄につけすぎているアクセサリーがうるさい。

「ちよつと！」

慌てて怒りの声を発したのは、ケイの方だった。隼人の左手は朔良を掴んでいたが、右手はケイの腕を捕とらえていたからだ。

「いきなり失礼だろ！隼人！」

「良いだろ？どうせこんなところじゃ話も出来ないし」

「私はいいよ」

あっさり朔良は頷く。あんどりと隼人越しにケイが口を開けたのを見逃さなかった。

普段だったらナンパみたいなのは毛嫌いするのだが、不思議と隼人に嫌な感じがしなかった。何より先ほどの言葉が気になる。中に入りたいたいなら力を貸してくれるらしい。

そして近くにあった某有名なチェーン店のカフェに入った。先ほど入った所とは比べ物にならないくらい、そこは賑わっていた。席を先に確保しないと座れない状況だ。

「俺、カフェラテ」

幸運にも一番奥の窓際の席を見つけると、隼人は陣取りながらそう言つと席に座つた。そのまま動かないつもりのようなのだ。

必然的に彼がそこに留まり、朔良とケイがレジに並ぶことになった。なかなかマイペースなようだ。

「すみません。隼人が強引で……」

ケイは俯きながら小声で謝る。

「気にしないで」

朔良が笑いかけるとケイはホツとした顔をした。

「確かにかなりびっくりしたけど」

「あああ。ごめんなさい」

わざとため息を試してみたら、慌ててケイは再び謝る。

「ふふ。良いつて」

意地悪な心で少し遊んでしまった。ケイは隼人とは正反対なタイプのようなのだ。

「私も聞きたいこと、あつたし」

え？とケイが聞き返す前にレジの順番がまわってきた。

朔良はアイステイにした。さすがにコーヒを一気飲みした後、再びコーヒを飲む気はしなかったのだ。

ケイはコーヒート、隼人の分のカフェラテを買っていた。ケイが奢るのだろうか。どうでも良いことを考えながら、ケイの注文したものが揃うのを待つ。

「ごめんなさい」

遅れてきた彼はまた謝つた。つい朔良は口に出す。

「それ癖？」

「え？」

「謝っちゃうの」

「あ……」

ばつが悪そうに、ケイは目線を逸らしてしまった。朔良は空気を切り換えるように微笑む。

「行こっか」

「あ……はい」

ケイも何とか笑っていた。何事も無かったように朔良は隼人のいるテーブルに向かう。ケイがそれに続く形となったため、その後の表情は分らない。

「悪いな、サンキュ」

ケイからカフェラテを受け取る隼人の前に朔良は座った。ケイは隼人の横に腰を落着かせる。

カフェラテを一気に半分まで飲むと隼人がまず口を開いた。

「で？」

一瞬、間が空く。

「いやいやいや……それ、私のセリフだと思っただけ」

アイステイをかけ混ぜながら、朔良は苦笑して言った。

「ああ、そっか。ケイ！」

隼人はケイに話をするように促した。自分じゃないのかと、朔良は少々突っ込みたくなる。

ケイが緊張した面持ちで話し出した。

「あの……すみません、突然。この間もいきなり話しかけちゃって……。俺何かほっとけなくて……。って余計なお世話でしたよね、すみません」

やはりケイは謝罪から入った。話の内容も要領を得ない。

だが朔良は口を挟まずじっと聞いていた。きつと、何かを言ったら彼は更に焦ってしまうだろう。

「それでさつきも見かけて……、すぐ入りたそうにしてたから、何とか中に入れてあげられたらと思って」

見て判るくらい、そんなに入りたそうにしてただろうか。

「こいつ勘が異様に鋭いから」

隼人が助け船をだした。

勘が鋭い……。
なるほど。

それで朔良の気持ちを読み取っていたのか。

あの日も？

どこまで読み取ったのかは不明だが。

「ふうん」

朔良はアイステイのストローを吸いながら相槌あいつちだけ打った。

「それだけ？」

不満そうに隼人が頬杖をついた。

「うん。いまいち良く分かんないや」

「何がですか？」

今度はケイが訊いた。

「うーん」

なぜか朔良の方が唸る。

何か気になるのだが、どこを追及するべきか迷ったのだ。 釈然
としない。そういう言葉が一番ピッタリなのだけは分かった。

「まあいいや。じゃあ私をあの中に入れてくれるっていう手を教え
て」

朔良は右手を顔の横でグーとパーを作り、にぎにぎさせて言った。
それを見て隼人が嫌な顔をする。

「単純だな」

少しだけカチンときたが、朔良はそう？とだけ返した。

「納得すんの早えもん」

隼人はそう言いながら窓の外を見た。朔良もつられて視線を移す。
この場所からは例のビルが見える。

「あの中に入ったら、何がしたいですか？」

ケイは朔良を見て訊いた。

何気なくケイを見返すと、ケイは真剣な目をしていた。先ほどの
すぐに謝ってしまう気弱な彼はそこにはいなかった。

朔良はドキリとした。何かを見抜かれているんじゃないか、と思わせる視線だったから。その気持ちを隠して、もう一度窓の外のビルを見た。

分からない…と答えるつもりで口を開く。

だが、次に出た言葉には自分自身でも思わず驚いた。

「うーん。…冬馬さんを止めたい、かな？」

作戦

それからそのまま三人で作戦会議を開いた。

その前にずっと自己紹介をしていなかったのを思い出して、やっと名前を伝え合う。

ケイは高橋圭介。たかはしけいすけ 隼人は本城隼人。ほんじょう という名前で、二人とも幼なじみで二十歳だと言った。

二人が同い年には見えなかった。確かにお互いタメ口で話していたけど…。

ちよつと歳上の自分にもタメ口だったが、それは隼人のみだ。それよりケイが幼く見えるのが一番の原因だと思えた。

「ほら、やっぱりびっくりされてる」

隼人がケイをからかっていた。

「うるさい」

ケイが一喝したことでこの話はここで終わった。

隼人は分かり易いほどさっさと本題に話しを戻す。もしかしたら、いざというときはケイの方が強いのもかもしれない。

「作戦つーか、簡単な話。俺たちがあの前で暴れるから、その隙に朔良が中に入るんだ。それだけ」

「ええっ?」

隼人の大胆な発言に、朔良は思わず大きな声をあげた。二人が必死にそれを止める。

「うるせえ!」

「しっ! 静かに」

店内の視線がこちらに集中した。恥ずかしくなって、ごめんと声を潜めた。ひそ

「でもそんなに上手くいくかな?」

「あの人混み相手に、ちよつとやそつとの騒ぎじゃ無理だろうな。

だからと言って入る前に捕まったら意味がない」

「だから夜にやるんだよ」

ケイがそつと後に続けた。

「ふうん。夜に…ねえ……………」

でも、そんなに待てない。逸はる気持ちを朔良は抑えた。

「大丈夫です。榊原さん」

「え？」

「きっと大丈夫です。間に合います」

ケイを見ると彼は安心させるような笑顔を向けていた。

異様に勘が鋭い。

隼人が言った言葉が蘇る。こういうことか、と朔良は実感した。

「まあな。こういう立て籠りは長期戦になるだろうな。特に犯人側にしつかりとした狙いがあるから」

ケイの言葉を聞いた隼人もその意味を読み取ったようだった。

そのフォローにまわっている。中々良いコンビのようだ。

「分かった。ありがとう」

朔良はとりあえず微笑してそう答えた。

複雑な心境を必死に隠す。隠しても無駄かもしれない、とも思っ

たが。

* * *

それから打ち合わせは続き、一旦別れて再び夜に落ち合うことになった。

「いろいろ準備あるだろ？」

と隼人が言っていたが。

(準備ねえ)

朔良は殺風景な自分の部屋の中で、腕を腰に当てて立ち尽くしていた。

特に思い当たらない。

朔良はただ崇史に会って伝えたいことがあるだけだ。それから止

めたいと二人には語ったが……。

(止める…?)

自分でも意外な想いだった。だが、一度口に出した言葉は言霊となつて朔良を捉えて離さない。それは確かに心の根底に存在していた想い、だった。

どこかで蓋をきつくして閉まったものが、ここへきて湧き上がっていく。

これがパンドラの箱ではないことを祈る。

いつもならこんな無謀なこととはしない。恐怖と億劫で、きっと何もしない。

(でも……………)

今回、朔良には思うところがあった。

(志保…)

今はもうどこにもいない自分の友人を想う。

(違う。ただの友達、じゃない…志保は)

ケイには、ばれているのだろうか。そのことが内心気になっていた。

準備か…。

もう一度改めて考慮した。しかし自分には、銃やら防弾チョッキなどというものは持っていないし、手に入らない。

だからと言ってナイフや包丁なんて持っていく訳にもいかなかった。

おそらくそういうことではないのだ。そんなもの持っていったところで、崇史を止められない。

それどころか余計に流れが悪くなる可能性が高い。

必要なのは自分の覚悟。

なんとなく、の気持ちではあらゆる面で負ける。

ケイに少し見透かされたぐらいで動揺する、そんなブレた心では行動にも迷いが生じるのだ。

それは最悪の結果を生み出すだろう。

(私は……本当は、何をしたいのかな……)

朔良は残された時間でじっくり自分の心に問いかけた。

* * *

夜が深まり、朔良は約束した時間に合わせて待ち合わせ場所に向かった。

時間は夜の十時。場所は交通規制された区間から、少し離れた場所にあるダーツバー。

隼人が良く行く店らしい。

行ってみると、そこは賑わう通りを一本外れた所で、暗がりの路地裏にあった。

(怪しい……)

明らかに怪しくて、女性が1人で入るには勇気がいるビルだった。地下へ続く階段がある。朔良は迷わず下って行った。

これまで充分迷った。今さら躊躇うつもりはない。

それにすでに隼人と打ち合わせはしてある。ガラは悪いけど良い奴らだから、と無垢な笑顔で言っていた。

彼を信じれば、の話したが、なぜか猜疑心さいぎしんは最初から無かった。

階段を下りきると、突き当たりの扉には手書きのスプレーで店の名がアルファベットで書かれてある。

(だーくきる……)

朔良は首を傾げて扉をさっさと開いた。

センスを疑う。深くは考えないようにしようと思っただけだった。

店内に入ると、そこは暗くどこか埃っぽい。

一斉にその中にいた十五人くらいの視線を集めて、朔良は一瞬そのまま帰ろうかと本気で思う。

「朔良！」

その中から隼人が声を掛けてくれたので、何とか思いとどまったのだが。

隼人が朔良の元まで駆け寄ると、視線は朔良から外された。ほっとして改めて辺りを見直す。客層は皆、隼人のような格好をしており、三割が女性だった。

大きめのシヨルダーバッグを肩に掛け、動きやすい格好を選んでダウンコートとジーンズで来ていた朔良は確実に浮いていた。

全員が愉たのしそうな顔をしている。しかし誰もアルコールは飲んでいないようだった。

ダーツは遠慮がちに奥の方に設けてあった。誰も今はやってる者がおらず、寂しい空間と化している。まるでおまけのようだな、と朔良は思った。ダーツバーなのに。

「時間ぴったりだな」

そんな思考をしているとは知らない隼人が、笑顔で迎えてくれた。

「うん。ケイクンは？」

「あいつはこういふとこ来ねえから」

「…………… だろうね」

「あ、てめえいま、偏見もったろ？」

隼人のふてくされた顔に朔良は軽く笑った。

「そんなことないよ…それより…本題なんだけど」

「ああ」

隼人は頷くと、カウンターの奥にいる店員らしき男の人のところまで、朔良を連れて行った。

歳は朔良より少し上のようだ。

客と同様の雰囲気を持つていたが、どこか落ち着いた感じがした。店員らしいと思うのは、制服などは特にないようで、明らかに私服と思われる黒いジャケットを着ていたからだだった。インナーの白いシャツがよく映えていた。

「一樹かずきさん。朔良です」

隼人がその店員に自分を紹介した。

そういえば隼人は最初から自分を呼び捨てだな、と朔良は今頃認識した。気にしなかったのは朔良も同じだが。

その隼人が敬語を話すということは、この一樹という人をかなり尊敬しているのだろう。

「朔良、この人が鈴木一樹さん。このマスターで」
それから、と隼人は続けた。

「今回、協力してくれる人だ」

* * *

一樹とお互い挨拶を交わして、朔良と隼人は並んでカウンターに座った。

昼間隼人が話した計画には、この一樹が必要不可欠だった。当然その時には、一樹が協力してくれるか否か分からない。しかし隼人には自信があったようだ。

実際に朔良と別れたあと話をしたとき、一樹がそれを承諾したことを隼人は説明した。

「本当に良いんですか？」

朔良は注文したカクテルを手にして改めて尋ねる。すると一樹は驚く新事実をさらりと言った。

「俺は、崇史や亮と友人だろ？」

「えっ！そうなんですか？」

朔良が驚愕きょわくの声をあげると、一樹は隼人をちらりと見た。

「言ってなかったのか？隼人」

「言ってなかったっけ？俺」

「聞いてません」

思い切り冷たく言う朔良に、視線を逸らしてそうだけ？と隼人は誤魔化ごまかしていた。

「クラスメートだったんだ。今でも付き合いがあつて、二人が何やら不穏な動きをしていたのは知っていた。だけど、こんな事態になるまで止められなかった。…崇史が、追い詰められているのには気づいていたのに」

一樹は淡々と話していたが、時折見せる顔が辛そうに歪む。

「悔やんでいたところに、隼人の話がきたんだ。乗らない手はないだろ？」

一樹はそこで朔良を見た。

「君は崇史を止めたいと言ったそうだね」

「はい」

朔良にもう迷いは無かった。力強く頷く。

「それは笠原さんが関係してるのか？」

そこで初めて志保の名が出た。

隼人とケイとの会話では、なぜ朔良が崇史を止めたいのか…というところを突っ込んで訊いてこなかった。それはケイが何かを感じ取ったせいなのか、たまたまの流れなのか朔良には分からない。

「そうですね。私は冬馬さんのこと、正直あまり知りません。だから私が動くのは志保のためだけです。こんなこと…志保が望んでいないって、私には分かりますから」

そう、すべてはそういうことなのだ。

一樹はきっぱりと言う朔良に優しく微笑みかけた。

「うん。十分な答えだ。安心して俺の仲間を貸すことが出来る」

「へ？」

間抜けな声を出してしまった朔良に、隼人がとんでもないことを言った。

「ここにいるみんなで、あそこにいる警察の前で暴れるんだぜ」

「……………それは、すごそうだね」

目をキラキラとさせて語る隼人をよそに、朔良はそつとカクテルを飲んだ。

どうなることやら。目がそう語っていた。

「俺も行くよ」

後ろから声が聞こえて朔良と隼人は振り返る。

そこには昼間と同じダブルコートを着たケイが立っていた。

「ケイ！何で来たんだ？」

真つ先に反応したのは隼人だった。立ち上がったケイに詰め寄る。

「気になって。俺だって何か出来ること無いかなんて思ったんだ」

「馬鹿！親御さんがまた心配するぞ」

ケイは親という言葉でピクリと反応したが、それには触れず素っ気なく答えた。

「大丈夫だよ。隼人だって行くんだろ？」

「俺とお前は違うだろ！」

何故か隼人は真剣に止めたがっているようだ。確かにケイには危険なことは似合わない。

「そうやって隼人はすぐ差別するんだね」

「差別って…違うだろ？区別だ！」

「同じだよ。いつも偏見の目で見られること嫌がるくせに…、いま俺に対して言ってるの、それと同じだからな！」

「な……………」

一瞬だけ隼人が絶句した。

「何てこと言うんだ？俺は心配して言っただぞ！」

しかし隼人は止まらない。

突然始まった二人の喧嘩に、朔良は呆気にとられて見ていた。

周りで飲んでいた皆も注目し出している。

「別に頼んでないよ！いつも隼人は過保護すぎるよ！」

「お前なあ！人の気も知らないで！」

「何だよ！榊原さん見つけたの俺だよ！」

「！」

突然自分の名前が出てきてドキリとした。

「そういうことじゃねえだろ！」

「どうということなんだよ！」

まだ喧嘩を続けようとする二人に朔良はちらりと一樹を見る。別に止めるつもりはなさそうだ。

それを確認すると、そつとため息をついて朔良も立ち上がった。

「とにかくダメだ。ケイはすぐ帰れ！」

「嫌だ！止めたかったら止めてみるよ」

断固として突っぱねるケイにとうとう隼人は頭に血が登ったようだ。

「ケイ！」

叫ぶのと同時に隼人は右腕を振り上げる。ケイは咄嗟に目をつむった。

隼人の拳は容赦なくケイを捉える。

バキツという鈍い音が店内に鳴り響いた。

「痛っ…」

「え？」

小さく隼人は呟いて、目を見開いた。

自分とケイの間に朔良がいたからだ。朔良は痛みに顔をしかめていた。

「榊原さん？」

ケイも驚きの声を上げた。周りも一樹も、事の成り行きを静かに見つめていた。

朔良は痛みにしばらく耐えると、顔を上げてまっすぐ隼人を見た。

「痛い」

どこか恨めしげにそれだけ言う。隼人は見るからに戸惑っていた。

「な、何やってんだよお前」

「榊原さん、どうして…」

ケイも訳が分からないようだ。

(こついつところは読めないのか…)

すべてに勘が働くようではないようだ。それだけで少し安心してしまっ。

「あのね、二人ともうるさいの。いまは時間が惜しいの。それで、やっぱり痛いよ」

そこでわざとらしく朔良は左頬を押さえた。痛いのは確かだったが、あまり深刻にならないように明るく言う。

二人の事情なんて知らないから、口を挟むつもりは無かった。ケ

イが参加することが、良いことか悪いことかなんて分からない。おそらく一樹もそれで見守ったのだろう。

しかし隼人は、いくら朔良に明るく言われても困惑していた。どう答えれば良いのか迷っているようだ。

「あれ？もしかして女を殴ったの初めて、とか？」

朔良はつい、そんな隼人にからかうような声で言った。

「朔良……」

隼人は苦しそうに顔を歪めた。朔良の想像する以上に、薬が効いてしまったようだ。

「榊原さん大丈夫？」

「大丈夫だよ」

心配そうにいうケイに、苦笑気味に答える。

「朔良さん。冷やした方が良い」

ずっと黙っていた一樹は、その間おしぼりを氷に冷やしてくれたようで、それを渡してくれた。

「ありがとうございます」

素直に受け取り、左頬にあてた。それを見届けると一樹は隼人に目を向ける。

「隼人。何か言うことあるだろう」

「あ、私が勝手に殴られただけだから」

朔良は必死でおしぼりを持ってない方の手を横に降った。思いの外ダメージを受けている隼人に気を遣ったのだ。

隼人はこちらを見ずに、何とか声を振り絞る。

「朔良……ごめん………」

朔良はふっと笑った。

「大丈夫だから」

そしたらケイも口を開く。

「俺もすみません」

「いいえ」

朔良が笑いかけると、ケイは安心した顔で隼人を見た。彼はどこ

か泣きそうな顔をしている、

「隼人も…ごめん、言いすぎた」

「いや俺こそ…ごめん…」

仲直り成立。少々痛い犠牲をはらったが、これくらいなら安いものだ。朔良はおしぼりで冷やしながらそう思う。

するとケイが悪戯っぽい笑いをした。

「でも、やっぱり俺も行くから」

そこで朔良は目を丸くした。隼人が思いっきり嫌そうな顔をして、それが先ほどまでの表情から百八十度変化したからだ。

「お前なあ」

がつくりと肩を落とした。ここで隼人の負けが決まったようだ。

彼は自棄^{ヤケ}になって叫ぶ。

「分かったよ！どうなっても知らないからな！」

* * *

約束の時間は刻々と近づいてきていた。

Dark Killerにいたメンバーは、一樹の号令で一度集まって三チームに別れた。

朔良は一樹と行動を共にする。

それを会わせると全部で四台の車と八台のバイクが用意された。

もちろんすべてにナンバーは隠されている。

所定の位置に向かって行く車内の中で、一樹は助手席に座る朔良を一瞥した。

ギリギリまで頬は冷やした方が良いと言って、新しいおしぼりを渡した為、素直にまだおしぼりを当てている。右側から窺えた表情には、どこか緊張した面持ちをしていたが、その目に迷いや恐怖は無いようだ。

先ほどは内心驚いた。椅子から立ち上がった時は、止めようとするのだろうと感じていた。

試すように観察してしまっただが、まさか朔良が殴られることを選
択するとは思わなかった。

店に来るような連中ならともかく…。

「朔良さん」

一樹が朔良に声を掛けると朔良はこちらを向いて微笑んだ。唇の
端が痛々しい。

「呼び捨てで良いですよ」

とてもこれから警察に反抗するとは思えない笑顔だ。

とはいえ、隼人は名前しか紹介しなかった。隼人の友人が呼んで
いた名字を思い出す。

「じゃあ榊原」

「はい」

「なぜあんな無茶なことをしたんだ？」

「無茶？」

「隼人が殴ろうとしたのは分かっただろ」

朔良はフロントガラス越しに正面を見据えたまま答えた。

「止めなくちゃと思ってはいたんですが…隼人くんが本気だったの
は伝わってきたし、ケイくんも引かないなって判わかったので…的確
な言葉が見つからなかったんです」

そこで一旦言葉を切った。おしほりの表面を丁寧に裏返している。

「そしたら隼人くんの腕が動いたのが見えて…：…あとは体が勝手に
動きました。一発でその場が収まるだろうなとは思っただし…って、
これ後付けですね」

「ははは、と軽く笑っている。

「危険だな」

一樹はぼそりと呟いた。

「え？」

小声すぎて聞き取れなかったらしい。

「何でもない」

それだけ答えると一樹は車を停めた。

すぐ先では警察の規制が行われている。停車したのは警察からは死角になる場所だった。

ここはビルの裏口にあたる方向で、表よりは規制が甘いことは数時間前に確認済みだ。最も、確認したのは信頼のおけるDark K illerのメンバーなのだが。

「もうすぐですね」

朔良が興奮気味に呟いた。

彼女は勇敢だと一樹は思う。最初に隼人からこの話を持ちかけられた時は、正直どこの成り上がりが無謀なことを言っているのか、と思った。

しかし実際に会ってみて驚いた。見た目で判断するべきでは無いと思うが、彼女には荒^すんでいるところは感じないし、とても修羅場を潜^くってきたようには見えない。

志保のため…と言った時の朔良の目を見て納得した。それだけ純真なのだ。

(だが……………)

朔良にはそれ故に危険なところがある。

先ほどの件もそうだ。別に殴られなくても、他にもいくらでも隼人を止める手段はあっただろう。

一樹の仕事は彼女を中に送り届けること。

しかし本当に朔良を一人で向かわせても良いのだろうか？

亮は何をしでかすか分からない奴だ。普段ならば、崇史がいれば無謀なことはいないが、その崇史が今は普通じゃない。今や亮より危険かもしれないのだ。

決行まであと三分…。

おもむろに一樹は携帯電話を抜き出した。表の通りに待機しているはずの隼人を呼び出す。

「一樹さん？」

朔良がこちらを見て首を傾いでいた。構わず隼人を待つ。

「はい。こちら隼人」

隼人は緊張感たつぷりの声で応答した。

「隼人、今すぐこちらに来れないか？」

「ええっ？」

突然の申し出に、想像通り隼人は驚きの声に変わった。

「友達と一緒にこっちに来るといい。裏口の方が安全……」

「了解！」

……だとは思わないか？と聞く予定にしていたのだが……。隼人はあっさり一言だけで携帯を切った。

一樹は苦笑しながらため息をつくとき、携帯をポケットに押し込んだ。

朔良は突然の計画変更にきょとんとした顔で一樹を見ていた。

「一樹さん……もしかして……」

そして朔良は何やら感づいたようだった。一樹は笑顔でそれに応じる。

「マジっすか？」

彼女らしかぬ言葉であった。その心情は容易く想像できた。呆れているのだろう。

しかしそれ以上は何も言わなかった。だから一樹も沈黙して隼人を待つ。

車内のデジタル時計が開始時刻を示した。23:00きっかり。

一樹は車のエンジンを掛けて窓を開ける。朔良もシートベルトを外してシヨルダーバッグの紐を握りしめた。

しばらくすると遠くが騒がしくなる。始まったのだ。それだけ確認して一樹は窓を閉めた。

まだ隼人達は来ない。

一樹も朔良も隼人達が来る筈はずの道と、車内のデジタル時計とを交互に見る。

23:04になった時、朔良が先に見つけた。

「来た！」

遅れて一樹も視線を移す。

まずは隼人の走る姿が見えた。数歩後ろにケイの姿。ケイはかなり全力疾走しているのが見ただけで分かった。隼人がケイを気にしながらもまっすぐこちらに向かつて来る。

一樹がギアを入れてゆっくりと車を発進させた。隼人達に向かつて進める。

「警察やマスコミは表に気をとられて向かい出したみたい！」

すると朔良側から警察が規制を張る場所が見えたようで伝えてくれる。

しかし全てでは無かった。手薄にはなっていたが、警備の為だろう、僅かに待機している。

「遅れてすみません！一樹さん」

隼人が叫びながら後部座席のドアを開けた。

車は半クラッチで徐行より遅い速度だったが、動いたままだった。

一樹は警察の方に目を向けたまま冷静に判断する。

「大丈夫だ。間に合う」

ケイも近づいてきた。隼人がドアを開けたまま右手を差し出す。

ケイは迷うことなくその手を取った。手を掴んだ瞬間隼人が引つ張り上げる。二人は飛び込むように車内に入った。

「いてっ」

勢い余った隼人が左内側のドアに頭をぶつけたようだ。

思わず声を上げると、ケイが急いでドアを閉めるのと…一樹がアクセルを踏み込むのが、全て同時となった。

車は悲鳴を上げて急発進する。

「舌噛むなよ！」

一樹が叫ぶ。思わずそこにいる全員が歯をくいしばった。

規制テープの先で警察がこちらの異変に気づき出す。警官が数人警棒を横に振って、止まれと叫んでいるのが分かった。

車は急には止まらない。迷わずそのまま車は突っ込む。

止まる気がないと気づいた警官達は、左右に散り散りに逃げた。

一樹は警官達がいる限界を過ぎると、ようやく急ブレーキを踏む。

車はまたしても悲鳴を上げて、減速しながらも裏口に正面からぶつかった。

皆うつくまっつてその衝撃に耐えようとした。しかしその遙かに上を行く衝撃がきて、体は浮いた。

「くっ！」

「きゃっ！」

「いてえ！」

「わっ！」

苦しい声がそれぞれから漏れる。車はエンストして止まった。

そして止まるや否や朔良はドアを開けて、鞆を持ち車から出た。

代わりにおしぼりが虚しく助手席に投げ置かれる。

朔良は後ろも見ずに、車のおかげで窓ガラスが割れた扉から中に入った。そして一樹もそれに続く。

「隼人！運転頼む！」

それだけ言い残して…。

「うええっ？」

隼人が体勢を立て直しながら驚愕の声を上げた。

しかし瞬時に理解して後部座席から運転席に飛び乗るのが一樹には見えた。

満足そうに微笑むと、一樹は急いで朔良の後を追った。

* * *

一方、いきなり任された隼人は迷わずエンジンを掛け直し、ギアをバックに入れる。

「ケイ！掴まってるよ！」

そう叫ぶとクラッチを離しながらアクセルを踏み込む。

後ろでは警官がこちらに近づいてきていた。バックミラーと左右のドアミラーを酷使し、ギリギリの一步先で急ブレーキを踏む。

さすがの警官は、鍛えぬかれた運動神経で接触を免れている。

隼人の直感は冴えていた。

すぐにギアをセカンドに入れ、ハンドルを右にいっぱい切りながら、半クラッチでエンジンを噴かすように急発進した。

しかし前には三人の警官と、その先には停車中のパトカー。

そのギリギリでブレーキを踏みながら、素早くギアをバックに入れ直す。障害物や人でまわりきれないことは分かっていた。

それから切り替えを二回、同じように勢いをつけて繰り返す。

その間、何回か勇気ある警官に近寄られバンパーやフロントガラスを叩かれた。

バンパーがひん曲がったのが見えたが、フロントガラスの強度は完璧だった。

しかしエンソトでもしたら終わりだ。隼人の左足はクラッチを上手く使わなければならないという緊張で力が入っていた。

そこに注意しながらもう一度切り替えをして、やっと車は元来た道へ進むことが出来た。

抑えることは無理だと気づいた警官が離れた。そしてパトカーに乗り込むのがバックミラーから見えた。

ここでやっと隼人は遠慮無く速度を上げることが出来たのだ。

この一連の流れは時間にしては短いものだったが、隼人にはひどく永く感じた。

「は、隼人…すごい…」

それまで歯をくいしばって、硬くなったままだったケイがやっと口を開く。

「まだだ！」

しかし隼人の表情はまだ緊迫していた。

後ろからパトカーがサイレンを鳴らして追ってきていたのだ。

「うわっ！どうすんの？隼人！」

「逃げ切るしかねえだろ！」

隼人は容赦なく赤信号を突っ切った。

「ひえええっ！」

青ざめながら叫ぶケイの声が夜の街に響き渡っていた。
隼人の方は、しばらく運転に集中していて何も言葉を発する余裕
が無かった。

ビルの中

パトカーのサイレンは朔良達の耳にも届いていた。

そしてそれが遠ざかって行くのも…。

それが何を意味するのか…もちろん二人には分かっていた。

サイレンは一つだけではなく、四方八方に散って行って聴こえる。隼人とケイだけではなく、当然表口で暴れた者達にも追ってがかかっているのだろう。

それが作戦の内で、逃走ルートや落ち合う場所も決めてあると分かっている、朔良は心配せずにはいらなかった。

この作戦には皆進んで参加していた。もちろん一樹は無理強いはいないと言っていたのだが、止めるという者はいなかった。

一樹は信頼されているんだな、と朔良は思う。しかしだからこそ、朔良は振り返るわけにはいかない。前へ進むしかないのだ。

それなのに、ビルの中のエレベーターは停止されており、上ボタンを押しても動かなかった。なのでMIYOSHIのある六階まで、朔良と一樹は階段で上がるしかなかった。

朔良が先に走り出したはずなのに、あっさりと一樹に追い抜かれた。一樹の後を追う形で朔良は息を切らして走っている。

他の店はもちろん営業などしておらず、人の気配はまったくなかった。階段含め夜のビルは暗い。電気は非常灯のみで僅かだ。

「きつっ…」

つい弱音が漏れる。普段の運動不足を呪った。

「大丈夫か？あと一階だ」

なぜか涼しげな顔をして、一樹は朔良の方を振り返る。

「大丈夫です」

少々意地を張って笑顔で言う。

何とか朔良が六階まで辿り着くと、すでに一樹は階段のところの壁越しにMIYOSHIの方を見ていた。

「灯りはついているようだが、ドアが閉まっている。当然鍵も掛けているだろうな」

どうする？というふうに一樹は朔良を見た。朔良もMIYOSH Iが見える位置まで並ぶ。

「ここはやっぱリアルじゃないでしょう」

にんまりと朔良は笑った。任せなさい、とその目が言っている。

一樹は怪訝けげんな顔をしていたが、構わず朔良はさっさとMIYOSH HIの扉の前に立った。

そしてすうっと大きく息を吸う。

はつとして一樹は一步前に出た。嫌な予感がした。

それよりも早く朔良の右腕が上がり、その扉を叩く。

「こんばんは！榊原朔良です！怪しい者ではありません！開けてくださいーい」

慌てた一樹が朔良に近寄る。

「おい……」

「朔良です！飲みに来ました！開けてくださいーい！警察はいませーん！」

「榊原！やめろ！」

一樹が焦って止めるのと、ドアの鍵がガチャガチャッと開けられるのが同時になった。

「うるせえ！」

中から男の罵声が聞こえて扉が開いた。

崇史だった。

記憶の中にある顔よりも、見るからにやつれていた。ジーンズとグレーの長袖のTシャツを一枚だけ着ていて、それが一層そう思わせた。

しかし目は死んでない。この世のすべてを憎もうとしているようだった。手には拳銃を握り締めこちらに向けている。

しかし崇史の視線は朔良を見た後、その後ろで止まった。

「あ……」

その目が大きく見開かれる。

「一樹…」

「よお」

一樹はため息をつくとき、朔良に倣ならって軽く挨拶をした。

朔良はその隣で、初めて見る拳銃に目が奪さらわれていた。意外と小さい。

「下の騒さわぎ…お前らか？」

崇史が銃口を外さず厳しい声で聞いた。それに答えたのは朔良だった。

「そうですね。立ち話もなんですから中に入れてください」

まるで人の家に図々しく上がるみたいと言つて、朔良は崇史の傍かたわらをすり抜けた。予想外の態度に崇史の行動が遅れる。

「お、おいっ」

焦りながらその背中に銃口を向ける。

「やめろよ」

後ろから一樹が低く言ったのが聞こえた。初めて聞く厳しい声色だった。

「俺がつれてきた娘こだ」

崇史が息を呑んだのが分かった。

「どういふつもりだ？」

「それはこつちが聞きたい。お前に言いたいことは山ほど有るんだ。入らせてもらつぞ」

一樹も朔良に続いて強引に中に入った。

足を一步踏み入れただけで、暖房が効いていることがわかる。

電力はここだけ通じるようにしているようだ。汗をかいていた今の朔良には、暑いくらいだった。

中にはまずレジがあり、そこを通りぬけると一番広いホールになる。

行き慣れた店のはずだったが中はまったく雰囲気異なっていた。テーブルや椅子はほとんど壁に押しやられている。広い空間を作

つてその手前側に十人くらいの人が、地べたに座らされていた。後ろに手首を縛られている。

その向かい側、一番奥の窓と窓の間の壁際にはテーブルが一つ有り、ニユースで見た顔がこちらを見ていた。

黒江亮だ。

亮は機関銃のような大きい銃を持っていた。足をテーブルに乗せて行儀悪く座りながら、やはり朔良達にそれを向けている。黒いシヤツを上から三つくらいボタンを開けていて、その胸元にはゴールドの十字架がぶら下がっていた。

亮は無表情で朔良にはその心情が読み取れなかった。追い込まれた風でもなかったし、かといって人質を抑圧することを楽しんでいくわけでもなさそうだった。

(なに…この人…)

初めて対面する人種だった。

「朔良！」

亮を見定めていると、人質の方から声がかかった。人質の塊の中で、一番こちら側にいた三吉だった。

三吉は反抗したのかも知れない。顔には殴られた痕が残っていた。

「三吉さん！」

朔良は三吉に駆け寄ろうとした。しかしそれは寸でのところで叶わなかった。

目の前に亮が割り込んできて立ちほだかったのだ。咄嗟に足が止まる。

「動くな」

静かな目線で銃口を向けていた。

いつの間に!?

椅子から立ち上がったのでさえまったく気づかなかった。

「亮! やめる!」

後ろから叫んだのは一樹だった。亮は顔色を変えることなく一樹の睨みを受け止めた。

「一樹：久しぶりだね」

特に驚きも感動も無いというふうに朔良には見えた。

「ああ。まさかこんなかたちで三人で会うとはな」

悔しそうに一樹が呟く。

「何しに来たんだよ」

崇史にはそんな一樹の想いは届かなかったようで、銃口を向け直した。一樹は亮よりも崇史に視線を向けていた。すべての原因は崇史だから。

「お前を止めに来たんだ！崇史」

「止める？」

崇史はせせら笑っていたが、どこか泣きそうだった。

「もうやめるよ！こんなことして、警察が言う通りにすると思ってるのか？」

「うるさい！してもらわなければ困るんだよ！」

「こんなやり方しなくても良いだろう？他人が犠牲になるのは構わないって言うのか？」

「ああ！構わない！志保はいま苦しんでいるんだ！勝手に自殺にされて……」

最後の方から崇史の勢いが失われた。腕が力弱く下がって、自動的に銃口も下を向いている。

「夢に出てくるんだ…志保が。“私の真実を見つけて”って言うんだ」

崇史の顔が苦しみに歪んだ。今にも涙を落としそうだ。

「……だからといって、こんなやり方して笠原さんが喜ぶとでも思っているのか？」

しかし一樹の声が冷たく響く。まっすぐ崇史の目を見据えている。どこか遠くの方で朔良は二人のやり取りを聞いていた。

(志保は……喜ばない………)
それは確かだと思う。

しかし一樹の言葉は一般論に過ぎないことを、朔良は客観的に捉

えていた。

(志保の望みは……………)

自分はちゃんと知っている。日頃から聞いていたから。死んだものの願いは叶えなければならぬ。本人にはもう、出来ないことだから。

(生きている私が叶えるんだ)

「うるさいっ！」

朔良の思考を崇史の声が遮った。はっと顔を上げる。

「てめえに何が分かる!？」

朔良が崇史と会ったときは決まってMIYOSHIで、そしてその隣には志保がいた。

崇史は志保といるときとても柔和な男だった。大声を出すことさえ、想像がつかないほど。少なくとも朔良にはそう見えていた。

あの時の穏やかさは、今やその片鱗さえ無くなっている。まさか志保がいなくなることで、こんなに追い込まれるとは思わなかった。気持ちは分からないでもない。

(私だって…本当は……………)

いや違う。朔良は自分の無意識の感情に愕然がくぜんとなった。

(私は冬馬さんとは違う!)

自分は知っている。志保の本当の望みを。それだけで天と地の差があるはずだった。

「分かるか!崇史こそ考えろよ!笠原さんが本当に苦しむことが何なのかっ」

朔良は僅かに複雑な想いで、一樹の台詞を聞いていた。それは崇史の胸にも突き刺さったようだ。

「知った口を聞くんじゃないやねえ!だいたいてめえなんかにはねえんだよ!帰れ!出ていけ!」

崇史は再び拳銃を一樹に向けて叫んだ。

撃つかもしれない。

そこにいた者は皆、ほぼそう感じただろう。それほどの殺気に満

ちていた。

そしてその空気を破るように、唐突に朔良は一步前に出た。

「え？帰って良いんですか？本当に？…じゃあ帰りますよ」

わざとらしく両手を口元に押さえ、嬉しそうにゆっくり出口に向かう。啞然とした視線がそれぞれから朔良に送られた。

構わず朔良はすぐに悲しそうな顔を作って立ち止まった。

「でも私、飲みに来たんですよ。たまにここで飲まないとやってられなくて」

どうしよう、とこれまたわざとらしく悩む。朔良の一人小芝居はまだ続いた。

「このまま帰るとなると、ストレス発散出来なかった私は、ヤケになって警察にこの情報をぶっちゃけますよね？ええ！確実に！」
ぼんと手を叩くと、ちらりと崇史を見た。啞然としていたのが、みるみる内に表情が変わる。眉が吊り上がってきていた。

それから亮に視線を移す。こちらは変わらず無表情だった。

(いや…ちよつと馬鹿にしてる……………)

内心朔良は自己嫌悪に陥りそうになる。しかしやめるという選択肢はない。

「というわけでー、みんなで協定結びませんか？ほら、一人より三人、三人より五人って言うし！…えーと……………いち、にい、さん…十六人もここにいますよ！こんだけいたら警察なんてイ・チ・コ・ロ」
人差し指を頬につけ、そこで朔良はウインクを試してみた。

限界に達した崇史はズカズカと朔良に近寄ってきた。

「やかましい！」

一喝して拳銃の握る部分で朔良の頭をはたく。

「たっ！」

正直かなり痛みがきた。思わず、本当に思わず涙目になる。

「協定なんか結ぶか！」

「ケチ」

ぎろりと崇史は朔良を睨むと亮に向き直って言った。

「こいつらも縛ってくれ！」
「りょーかい」

つまらなそうに亮は答えた。

これで無事に、朔良と一樹は人質の仲間に落ち着いた。

* * *

一樹は一連の流れを信じられないものを見る目で見ていた。

(この子は… いったい……………)

確かに最初は朔良の頭がどうかしたのか、と心配した。

しかし…先ほどまでの殺気が崇史から消えたことは確かだ。自分は助けられたのだ、朔良に。それも一滴の血も流さず。

それは先ほど隼人の闘争行為を止めたのとは正反対の手段であった。

咄嗟に流れを読み取り最善の策で動いている、とでも言うのだろうか。

一樹は反省していた。正論を伝えることが全て正しいというわけではないことを痛感したのだ。

だから 素直に亮に縛られた。

朔良の隣に座り込む。

「すまない」

朔良の方も見ずに一言呟いた。朔良がこちらを見たのが目の端で分かった。

「頭、大丈夫か？」

自分の考えなしの行動のせいで崇史に殴られてしまった。撃たれるよりはずっとマシだが、彼女が傷ついたのに代わりはない。

「どうせイタイ女ですよ」

しかし朔良は別の意味で一樹の言葉を捉えたらしい。朔良を見ると唇を尖らせていた。

日本語は難しい…。

* * *

数分後、崇史のポケットから携帯電話が鳴った。

崇史は窓越しに下の警察を観察しながら、携帯を取り出す。ディスプレイには最近登録した男の名。
池田浩一郎いけだこういちろう。

志保が死んだとき、事情聴取を受けた刑事だった。

この状況を崇史が作り出したときから、頻繁に掛かってきている。崇史はこれまで通りその電話をとった。

「冬馬か？中は変わりないか？」

池田は直接には聞いてこなかった。薄く笑って崇史は答えてやった。

「人質が2人増えましたよ」

「……そうか」

電話越しにでも相手の苦痛の息が漏れたのが分かった。

「いいか！早まるなよ！」

まるで親身になっている、とても主張したげな声だ。しかし自分にはまったく受け付けられない。

「池田さん、まだですか？こつちにはかりいなくて、早く捜査してくださいよ。俺もいつまでも待てません」

それだけ言うと崇史は池田の言葉を待たずに携帯を切った。

あまりにぐずぐずされるようなら、制限時間を設けなければならぬ。

* * *

それからしばらく静寂が流れていた。

崇史と亮は固定の位置、つまり出入口からみて一番奥の窓際に設置された席に座っている。

朔良は三吉と一樹に挟まれる形で地べたに座り込んで、二十分く

らい経っていた。

この状態になってから気づいたが、人質の中には三吉以外にも知
っている人がいた。

何度か一緒に飲んだ中岡賢二と木本結花だ。2人は恋人だった。
おそらくこの日も二人で飲みに来ていたのだろう。

朔良は笑顔で会釈だけで挨拶したのだが、そっぽを向かれた。他
人の振りを決め込むようだ。それから三吉の他のスタッフのバイト
が四人いた。あとは、二人ほど見たことはあるが名前は知らない客
がいて、残り三人はまったく初対面だ。

全部で人質は十二人。朔良と一樹を入れて十四人だ。

こっそり朔良は三吉に話しかけた。

「大丈夫ですか？」

三吉だけが殴られていたようだった。質問の意図に気づいて三吉
は顔をしかめた。

「ああ、コレか？全然痛くない」

意地張っているのが表情で分かった。笑っているが、いつもの明
るさがそこには見えない。こんな目に遭っているのだ、当然だろう。

「何で殴られたんですか？」

「アレだ。みせしめってやつだな」

「じゃあ、一発だけ発砲があつたってニュースで言っていましたけど」

「そんなに騒ぎになってるのか？」

テレビを見れない三吉には実感が無いようだった。低く唸って三
吉は答える。

「それも威嚇いかくの一発だ。飲んだくれが大人しくなるため、のな」

確かに皆、すでにお酒は抜けきっているように見えた。皆にした
ら迷惑な話だろう。気持ち良く酔っているときに水を差されたのだ
から。

「それより、本当に何で来たんだ？朔良」

「ただの気まぐれですよ」

いつものように朔良は冗談っぽく返す。

この店では適当な会話がすべてだった。少なくとも朔良には……。それが居心地良かったのだ。身内にも会社にも出来ない、いい加減な切り返しがここでは成立する。良い加減なのだ。別に軽く見ている訳ではない。

「んなワケねえだろ」

しかし今は、それを三吉は赦してはくれなかった。

朔良は苦笑いだけでそれに返した。

そのとき、遠くからパトカーのサイレンが聞こえ始めた。Dark Killerの皆を追跡して行った警察が、帰って来たのだと分かった。

このビルに近づくと案の定サイレンは消える。

それとなく聞こえるように朔良は一樹に語りかけた。

「大丈夫だったかなあ？」

一樹はちらりとこちらを見て、不敵な笑みを浮かべた。

「え？」

少したじろぐ。

「大丈夫だろ」

一樹には自信があるようだ。しかしその一言で終わらせようとしていた。

「その意図は？」

厳しく朔良は突っ込む。片方だけが気になってるなんて不公平だ。一樹はそんな朔良にふつと笑った。

「そうだな。今回車の運転を担当してるのは、普段走り屋をしている……とかでは駄目かな？」

「じゃあ隼人くんは？」

「ああ。あの車を引き上げる奴が必要だったから呼んだんだ。でも隼人にそんな趣味はないはずだな」

「一樹さん、ヒドイ」

あっさりと明るく言う一樹に朔良は眉をひそめる。

「大丈夫だって。隼人もやるときはやる奴だから」

真剣な目で一樹は安心させるように言った。

「分かりました。信じます」

その目を見てるとそう言うしかない。信じない。

(まあ…今からじゃ到底間に合わないし)

どこか本音ではなかったが、朔良はそう自分に言い聞かせた。

本音ではすでに信じていたと思う。隼人を、そして一樹を……。

それぞれの想い

街の外れにある自動車整備会社。工場も一体化している小さな会社だった。

そこには先ほど警察から振り切つて逃げてきたDark Killのメンバーが集まっていた。

深夜だった為周りは静まり返っていたが、この場だけが騒がしい。到着した車は三台。

リーダー格の男が周りを見渡していた。

「マサキ！一樹さんだけ来ねえ」

マサキと呼ばれたその男は、泣き言を言う同じチームだった男に答えた。

「一樹さんなら大丈夫だろ！それより隼人はどうした？」

隼人がいるはずのチームのメンバーに聞いた。するとそのチームの女が心配の色をみせる。

「隼人、一樹さんに呼ばれたって言って、行っちゃったんだよ」

「一樹さんのところに？」

「多分……上手くいったのかな？」

女はため息混じりに言った。

マサキが口を開こうとした時、遠くの方からヘッドライトが見えた。皆がそちらを注目する。

徐々に近づいてくる車は、まず前方が変形していることが見て分かった。そしてそれが見覚えのある車だと分かる。

「一樹さんの車だ」

誰かの声が聴こえた。一樹の車はそのまま工場に入り、自分達の前まで来て停まった。

「一樹さん！」

皆が車に近づく。

するとなんと運転席から出てきたのは隼人だった。

「隼人？」

マサキがまず隼人に近づいた。後ろからも先ほどDark Kiiに居た少年が出てくる。

しかしそれだけだった。

二人ともどこか深刻そうな顔をしている。

「隼人どうした？一樹さんはどうしたんだ？」

代表でマサキが訊く。隼人はマサキに寄りかかるようにしてどうにか立っていた。

「こ………」

何やら呟いている。マサキは隼人を支えながらも、隼人の顔を見た。その表情は険しい。

「こ？………どうしたんだ？隼人」

優しく語りかけてやる。隼人は何とか口を開いた。

「こ、怖かったー」

そのままズルズルと地面に落ちていった。

「は、隼人？」

するとそれを見ていた少年が代わりに教えてくれた。

「一樹さんは榊原さんと一緒にあのビルの中に入って行っちゃいました。それで代わりに隼人が運転して逃げてきたんです」

一瞬そこにいたすべてのメンバーが凍りついた。

「えええええっ？」

そして皆は深夜に大絶叫するはめとなった。

* * *

Dark Kiiのメンバーが闇夜に大合唱を響かせているころ、MIYOSHIの中では朔良の携帯電話が鳴っていた。

マナーモードになっているものの、静寂なこの場ではバイブの音さえ響く。朔良は縛られている手で何とか鞆を手繰りよせる。

「んー…もうちよい」

バッグのサイドポケットの中からやつと携帯を触ることが出来た。細いストラップを持って引き抜く。首を曲げて何とか目視すると、メールではなく電話だった。

出ようと二つ折りの携帯を開いたとき、周りの緊迫する気配をまぶ感じた。そして顔を上げるとまさに目の前に崇史が銃口を向けているところだった。

「何をしている」

冷たい目をしている。

「え？電話が掛かってきて…あ、沙織里だ」

後ろを向きながら画面を確認すると、構わず朔良は通話ボタンを押した。

「…！」

周りがさらに凍りつく。

朔良は器用に携帯を膝の上に投げて乗せた。ストラップを口に加え位置を直すと、耳から携帯に寄せる。

「きさつ…！」

「あ、もしもし沙織里ー？」

崇史が止めようと口を開いたとき、すでに朔良は通話ボタンを押していた。

そのとき崇史の歯ぎしりが聞こえて、三吉や一樹は冷や汗をかく。「あー、昼の？……いいよ……うん……うん。私も感じ悪かったよね、ごめんね」

独り空気を読まず朔良は会話を続ける。

「…いま？ううん……大丈夫大丈夫。もうすぐ寝るかもしれないけどね…ははは。……沙織里も頑張ってるね、じゃあまた……うん、おやすみ」

そして何気ない会話は終わった。

沙織里から通話が切れたのが、漏れた音から崇史にも分かったのだろう。すると崇史はすぐに携帯を取り上げた。朔良が見上げる。

「あ…何する…」

崇史は最後まで言わせなかった。

携帯と拳銃は左手に持ちかえるのと同時に、右手の掌てのひらで思い切り朔良の頬を叩く。

バシツという重い音が響いた。

「貴様！自分の立場がわかつてるのか！？」

崇史の怒鳴り声^{こゑ}が耳をつんざく。朔良はそのまま視線を落として痛みをやり過ごした。髪の毛に覆われて表情が分からない。

（うう…左ばかりだわ）

内心はそんなことを考えていて、気持ち^{こゝろ}を紛らわしていた。

しかし崇史の怒りは収まらなかった。朔良の胸ぐらを掴んで立たせると、そのまま壁に叩きつけるように押し付けた。

「何の話をした！？」

「くっ…」

衝撃と、首が絞まって息が出来ない。薄目を開けて崇史を見ると、その顔は怒気に満ちていた。崇史は顔を近づけてなおも叫ぶ。

「何を話したと聞いている！」

酸素を肺に送り込むことが困難だった。表情は苦しさに歪んだ。

それでも何とか朔良は言葉を発する。

「別に………日常…会、話だよ」

崇史は少しだけ力を緩める。手加減の具合を充分承知しているようだ。

そして睨み付けたまま、拒否を許さない口調で訊いた。

「会話した内容を全部話せ！」

「ちょっと、昼間に些細な喧嘩をして…沙織里が謝ってくれたんだよ。でも私も悪かったから謝った。それだけ」

「今がどうか言っていたらどう？」

怒鳴りはしなかったが崇史の声は低く、それがさらに怒りを感じた。

「寝てた…って聞かれたから、大丈夫って答えただけ」

素っ気なく聞こえるように朔良は返した。しかしその声は、掠れ

てしまっている。咽喉の調子というのもあるが、恐怖からだったのかもしれない。

ようやく崇史の手が朔良から離れた。バランスを失って朔良はよろける。両手が縛られているため、何とか足で踏ん張った。

そして一気に酸素が入ったために、しばらく咳を止められなかった。

「げほっ…ごほっ！」

崇史はそれを冷たく見つめながら、右手に拳銃を持ち変えた。

「今度勝手な真似したら、殺すからな」

最後の忠告か、と朔良は思った。ぎりりと歯をくいしばる。

「ずいぶん…余裕が無いんですね」

「なに？」

定位置に戻ろうとしていた崇史がピクリと反応した。

「やめる榊原」

一樹の止める声が聴こえる。

だけど今やめるわけにはいかない。朔良の脚は恐怖で震えていた。それを隠そうと力を込める。

振り返った崇史の目からは憎しみが見えた。

朔良は口に笑みを作った。嘲笑ちやうせうに見えたらそれがいい…そう思った。

「そんなに追い詰められて…本当に警察と渡り合えるの？」

「何だと？」

「志保の自殺は納得出来ない。だったら冬馬さんは何だったら良かったの？…事故？それとも他殺？」

「黙れ！」

崇史は銃口を朔良に向けて、そして撃鉄を引き起こした。

それを見た一樹が悲痛の声を上げた。

「崇史！やめてくれ！」

ずっと黙っていたことを朔良は怒鳴るように叫んだ。

「私を殺したら、志保の死の真相には近づけない！私にしか知らな

いことがあるから！」

崇史の目が見開かれた。

「なに？」

寝耳に水だったことだろう。当然だった。朔良は誰にもこの事を言っていない。

志保が死んだとき、参考にと警察に事情聴取されたときだって、適当に返していたのだから。

（もっともあのときは、そうするしか無かったんだけどね……）

一樹も三吉も、そこにいる誰もが驚いて朔良を見ている。

そして崇史は明らかに動揺していた。その目が揺らぐ。

「どういう…ことだ？」

まだこちらに向いている手は震えていた。するとずっと座って見守っていた亮が、滑らかな動きで崇史の隣まで来た。

「口から出任せ。死にたくないから言っているだけだ」

崇史に援護するように右側から亮が、代わりに銃を朔良に向けた。朔良は亮の目を見据えて言い足す。

「嘘じゃない。実際、志保に一番最後に会ったのはたぶん私だから」

「そんな……」

崇史には躊躇させる言葉だった。しかし亮にはそれが無い。機関銃を脇に挟み込み構えた。

（駄目、か……）

朔良は内心、絶望を感じていた。これが朔良が持てる唯一の武器だった。

崇史を止める為の。

亮がこんなにも非情だとは。朔良は覚悟を決めた。

「待ってくれ、亮。話を聞きたい」

しかし崇史がそれを遮った。すると亮は、驚くほどにあっさり機関銃を降ろしたのだ。

崇史の言うことしか聞かないようだ。逆に言えば崇史の言うことならば聞くのか。

「ちゃんと話せ。嘘だったら許さない」

崇史の有無を言わせない口調が、朔良の心に突き刺さった。嘘をつくつもりはないが、まだ言えないことはあるんだ。ちゃんと言葉を選ばないと自分の目的も達成出来ない。

朔良は一度ため息混じりの深呼吸をした。そして語り出す。

「あの日はMIYOSHIで貸し切りで、飲み会がありました。志保もいたし、私も参加しました」

ちらりと三吉を見たら、彼が頷く。

崇史は参加してなかった。元々あまりお酒は強くない、と志保が言っていた。

「聞いている」

しかしそれは知ってはいるようだ。

「それから三次会まであったんですけど、最後まで残っていたのは6人。そこにも、私は志保と一緒にいたんですよ」

そこには賢二や結花もいた。二人は迷惑そうな顔をしていたため、それには口をつぐんだ。

壁にもたれながら続ける。

「それで最後に私は志保と二人で帰ったんです…志保はそこまで酔ってませんでした」

「それで？」

逸る気持ちで崇史は促す。

他の者は口を開かず見守っていた。何か言いたそうな顔の者は数人いたが、割って入る勇氣はないようだった。

そんな空気の中で朔良はあっさり続ける。

「それだけです」

たった一言で。

皆の期待を裏切ったのにまったく悪びれていなかった。

そして崇史はわなわなと震え出した。下を向いていたため表情は確認できない。

思わず一樹が間に入った。

「榊原、そこからが重要じゃないかな」

確かにここまでは皆の証言から明らかになっていることだった。

「そうですね。一番言いたいことは、実は記憶が途切れ途切れなんです。重要なところが抜けてて…でも大丈夫！思い出したとき、絶対真実が分かります」

そこまで一気に言っていると、朔良はにつこりと笑った。亮が呆れた顔で口を開く。

「やっぱり、たいしたこと知らないよ、こいつ」

「だから！知ってるんです！忘れてるだけなんですってば」

感興もなく亮は崇史の判断を待つように視線を移した。

当の本人は俯いたまま拳銃を下にずらした。引き起こされた撃鉄をそつと戻している。意図が解らず、朔良はじつと崇史を見守った。「分かった。今は榊原に賭けよう」

朔良は目を瞠みはった。僅かに…本当に僅かだったが、いつもの穏やかな顔が崇史に戻っていた。

しかしそれは一瞬だけだった。すぐに厳しい目になり、睨み付けられた。

「だが立場をわきまえろ。今度は許さない。これは預かっておく」
そう言つと、朔良の携帯を持ったまま窓際まで引き返して行った。隣で亮が、やはりつまらなそうに後に続いて行く。

緊迫感から逃れた朔良は何とか地べたに座ることが出来た。

正直ずつと脚は震えていたのだ。隠しきれたかは不明だった。

膝を使って少し前に出て、先ほどまでの位置まで戻る。

「無茶するな」

隣で一樹がため息混じりに呟いた。三吉も同意というように朔良を見ている。

「すみません」

軽く笑って謝ったが、内心はまだ動悸が速かった。

* * *

工場に車を預けて事情を説明したあと、隼人とケイは皆と別れた。あの会社はメンバーの一人が親から譲り受けて、そのまま経営者としてやっている会社だった。

大通りに出るまで二人は歩いていた。隼人が少し前を歩く。

「上手くいって良かった」

ケイからずつと溜めていた本音が聞こえてきた。隼人は振り返りもせず言う。

「まあな。でもとりあえず、だけどな」

「彼女ならまだ大丈夫じゃないかな」

なぜか確信持つて言うケイに一瞥を向ける。

「分かんのか？」

どこか遠くを見ながらケイは答えた。

「最初にあつたときも、カフェでもずつと榊原さんから迷いを感じたんだ。でも店で会ったとき、もう彼女からは強い意思しか残ってなかった。間違えたよ」

「ふうん」

隼人には解らなかった。

朔良はどこか天然でいきなり読めないことをする。

ケイの方を振り向きながら、ずつと気になっていたことを訊いた。

「何で殴られたのかな？」

まだ、隼人の手にはあの時の感触が残っていた。革製のジャケットのポケットに突っ込んでいた手を、その中で握り締める。

ケイは隼人を見て悪戯っぽく笑った。

「隼人のパンチ、たいしたことないって思ったんじゃない？」

「ぶっ潰す」

言葉とは裏腹に、隼人も笑いながら拳をケイに向ける。

「冗談だよ……でも……」

ふとケイは真剣な目をした。口元は笑みを作ったままだった。

「きつと俺たちのためを思ってやったことで、他意は無いよ。それ

は分かる」

その意見には同調できた。

「ああ。そつだな」

あの時のことを思うと、まだ少し胸が痛い。

女を殴ったの初めて？

朔良の言葉が思い出される。まさに、凶星だった。

隼人は吹っ切るように再び前を向いて歩き出した。

大通りまでまだ少しある。大通りに出たら、隼人には自転車が置いてあった。それで帰れる距離なのだ。まだそれを撤去されていないことを祈るが。

「今日はどうすんだ？ケイ」

ケイは電車が必要な距離に家がある。親と同居だから終電までには帰りたいと思っていたが、今回の作戦に参加すれば帰れなくなることは分かっていた。

だから止めたかったのに。今さら思ってもどうにもならない。

「隼人ん家泊めてよ」

後ろからの声に隼人はため息をついた。

「俺は全然構わないけど」

「俺も全然構わない。俺だってもう大人だよ。いつまでも親に気を使ってられない」

ケイは厳しい口調だった。隼人はケイの両親を知っていた。どこか過保護で、そして……。

「そっか」

いつまでも子供のまま立ち止まってはいられないらしい。

「だから…俺、榊原さんに全部話そうと思っただ」

まるで一連の会話の流れのように言う。

思わずケイを見ると、隼人をしっかりと見つめていた。それは自分に承諾を得ようとしている目だと解って、隼人は少し視線を逸らす。

「榊原さんは確かに迷いが無くなったけど、だからこそ危ないんだ。

余計なお世話かも知れない…ただの思い上がりだって言われても、俺には…」

話の途中で隼人が近づいてきて、そして頭を軽く小突いた。

「痛いっ！」

涙ながらにケイは抗議した。

「何するんだよ！」

「お前って馬鹿」

それだけ言うと踵を返す。

しかしケイがついて来ていないのが、気配で分かった。ちゃんと話を聞いてもらうまで動かない、という主張だろう。

構わず歩を進めながら、いつもケイはお人好しすぎる、と隼人は思った。

朔良に言った言葉…異様に勘が鋭い…。それは嘘ではない。でも

……それだけではないのだ。

ケイはいつもこうだ。

それで最後には自分が傷つくくせに。

そして、それをフォローするのはいつも隼人だった。隼人は右手に感覚を集中させた。そして足を止める。

(また俺が何とかしてやる……………)

自分はいつでも、これからもケイを見捨てない。

(それに…)

右手を拳のままポケットから出して見つめる。

朔良なら大丈夫かもしれない。根拠もなくそう思った。

後ろを振り向くと、ケイはまだその場に立ち尽くしている。暗く表情まで分からなかったが、心配そうにこちらを見ているだろうことは想像がついた。

でも隼人が次に喋るまで動かない　　そう決めてるようだった。

(つたく、頑固だな)

ひとつため息をつく、隼人はよく通る声で言ってやった。

「好きにすれば? ……今さら俺も乗り掛かった船を降りたりしねえ

から、思っ通りにやってみるよ」「
何も声は返ってこなかったが、ケイがこちらに歩き始めたのが見
えた。

夢で

夜が本格的に深まり、MIYOSHIではこんな状態に陥って初めての就寝時間がやってきていた。

皆に疲労が溜まっていた。それはそうだろう。朔良と一樹以外はもう丸一日拘束されてることになる。

三吉が店に毛布を置いてある、と崇史に教え、スタッフルームから出してもらった。

毛布は五枚ある。崇史は全部人質側に渡してくれた。それでも足りないので、二、三人で一枚を使うことになった。

朔良はこんなこともあるのかと、鞆に洋服を余分に持ってきてあったので毛布は断った。暖房もあるし問題ない。

「何が入ってるんだ？」

隣で一樹が大きめの鞆を見て、怪訝な顔をしていた。

「いやあ、何持ってきたら良いかわからなくて、旅行気分…では無いですけど、ね」

朔良はそれに何とか体裁を取り繕う。

そして一樹もなぜか毛布を断り、朔良の隣から離れなかった。無謀なことをする朔良を見守りたかったのだろう。いや、信用を失っただけだな…と朔良は思う。

それからしばらくするとほとんどの人から寝息が聴こえ始めた。本当に疲れていたのだ。

崇史と亮は交代制で見張るようだった。

朔良はなかなか寝付けなかった。まだ興奮しているのかもしれない。

そして静まり返ったその場所では、志保のことばかりが湧き上がってきた。

(いや…違うな…)

此処だからではないのだ。毎日独りになると思い出す…志保のこ

とを。

どこにも居場所を感じられない。

志保はよくそう言っていた。まだ崇史と出逢う…幸せを知る前だ。「だからといって死に逃げるわけじゃあないのよ。でもこの世界は……この国はこんなに物に溢れているのにどこか孤独を感じるの」彼女はいつもそんなことを言いながらも笑っていた。哀しい笑みだった。

「他人の気持ちって絶対分からないもんだよね。同じことを体験しても感じる場所は一人一人違うし。でもつい近い人とだと錯覚する、いま同じこと想ってるかもって」

朔良もそう言いつつ、今は彼女と同じ気持ちなんじゃないかと錯覚する。

そしてそんなとき、そこに少しでも相違があることを知ると、自分は独りだと気づかせられるのだ。

「朔良、人はいつか死ぬけど……私はその時は自分で決めたいな」志保はそう言うともた笑った。

今というわけではない……そう、いつかだ。

「そしたら私は笑って見送るよ」

朔良もそう言って笑っていたのだ。

そついう話をした後、いつも志保は、朔良が先に逝くかも知れないよ、と冗談ぼくやはり笑っていた。

(やっぱり志保が先だったんだね……)

なんとなくそんな気がした。

まさかそれがこんなに速く訪れて、こんなに笑うことが難しいことだとは思わなかった。

ひと月経ってもまだ薄れない。

「地球が誕生してどれだけの年月が経つてると思っ？長い目でみれば悲しみなんて一瞬だよ」

出逢った頃の志保の言葉は、今や酷く無情に聴こえる。

(分かってるから…志保……)

志保は笑って送られることを望んでいる。

そして、なるべく早く周りの人には普段の日常を取り戻して欲しい、と。

しかし崇史はどうだ？志保の想いとは正反対の行動を取っている。志保の想いは志保と朔良だけのものだった。破られることは許されない誓い。

だから朔良が崇史を止めなければならない。

(志保：必ず思い出すから…)

志保の最期は自分しか知らない、と言ったのは本当だった。

失われた記憶には他意がある。

いつの間にか朔良も眠りに落ちていた。

* * *

「ホント朔良には悪いことをしたなあ」

隣で彼女は一人言のように呟いた。頬がほんのり赤い。

「やめてよ。私普通に祝福してるんだから」

朔良は笑いながら心の底からの気持ちで言った。視線は目の前のカクテルに向いたまま。

嘘はなかった。

(ただ…ちよっぴり寂しいだけ…)

声に出さず付け足す。

「でもあの気持ちは今も変わってないの」

「うん」

ちゃんとわかってる。

「結婚してもあたしは変わらないよ」

「うん」

「また時々こうして飲もうよ」

そこで朔良は彼女を見る。

「当たり前だよ！家庭が出来ても誘っから」

誘わなくてもあの店に行けば、高確率で会えるのだが。

「ホントに酒好きだねえ」

彼女はからかうように笑っていた。

「自分もでしょ」

朔良も負けじと笑い返す。

「うん。お酒は日常を忘れさせてくれるからね。…ねえ、あたし達はどんな風に死ぬのかなあ」

何でもないことのようにさらりと彼女は言った。朔良はその言葉を慣れたことのように聞いていた。

彼女と二人きりになるとよくこんな会話をしていたのだ。

「先のことは分からないからねえ。周りは哀しむんだろうけどね」

朔良は苦笑した。彼女は切なそうに言った。

「どうして人ってそうなのかな」

逃れられない死の連鎖。

生あるものはいずれ死ぬのに、必ずそこには悲しみや哀しみが生まれる。

だけどそんな負担をかけるようなことは嫌だね、と朔良達はよく語り合っていた。

そのときふと、彼女の目線は朔良を通り越して、朔良の後ろに向かって笑いかける。

「あ。お久しぶりですね」

朔良は彼女、笠原志保の目線を追って振り向いた。

* * *

はっと朔良は目を醒ました。毛布のように掛けていたダウンコートが、少しずつ落ちた。

(夢…?)

頭を押さえたい衝動に駆られる。そこで手が自由に動かないことを再認識させられた。

順を追って、現在の状況を思い出す。

朔良は窓際を見ると崇史が見張る番だった。目が合った。

心臓が早鐘のように鳴りだす。隠すように下を向いた。コートを顎で引き上げる。

「何か思い出したか？」

崇史が小さい声で訊いてきた。

周りには皆寝ている。亮でさえ、一樹だって目を閉じていた。起きているのは二人だけ。

朔良も俯いたまま、皆を起こさないように気を遣いながら小声で答える。

「まだですよ」

先ほどのほただの夢では無かった。

所々失くなつた記憶の一欠片。

場所はある日の二次会の会場で、*vista*というバーだった。

MIYOSHIの後には良く行く店だ。

そこでの志保との会話。

記憶はパズルのピースのように、少しずつはめこまれる。しかしまだ完成はしていなかった。

崇史は片膝を立てて座り、じつとこちらを見ている。朔良の奥底を見定めようとする目だった。

「何が目的なんだ？」

口からストレートに発せられる疑問。

「私が動くのは志保の為だけです」

Dark Killで言った言葉とまったく同じことを呟く。

「冬馬さんとは別のところで」

そして付け足した。

崇史はピクリと反応する。

「どういう意味だ？」

瞬時に朔良は後悔した。まだ言うべき時では無かったのだ。

「志保は今の貴方を見て、どう思うでしょうか？」

しかし重要な記憶を取り戻した朔良は興奮していて、止まらない。重要なのは、志保との会話のその後だった。二人に近づいてきた人物。確信があった。あの人が怪しい。

そんなことが分からない崇史は朔良を睨み付ける。

「お前も一樹と同じ意見なんだな」

そう言えば一樹も最初に言っていたな、と朔良は思った。

あの時はこの台詞は逆効果だった。だから少し違ったことを伝えた。ただひとつの事実として。

「志保は貴方が本当に好きでした。冬馬さんがいなかったら、志保はもっと早くいなくなっていたかもしれない……」

思わず崇史は立ち上がった。椅子が音を立て、亮が目を開いた。

「それはどういう、ことだ？まさか……」

崇史が頭を抱える。

（言つな！）

心の別の声が朔良を遮る。しかしその口は止まらず、言つつもりも無かったことを吐き出した。

「違います。志保は自殺はしていません」

「！」

崇史は目を見開いた。

ずっと誰かからそう言ってもらいたかったのだらう。その目が少し赤くなる。そして大股で朔良にまで近づいた。

僅かに朔良は身構える。しかし崇史は乱暴はしなかった。

「頼む…教えてくれ。榊原が知ってること全部」

朔良の前にしゃがみこんで頭を下げた。

その姿を見るのは正直辛かった。こうなることが分かるから、言うべきでは無かったのに……。朔良は自分を責めた。

「ごめんなさい」

仕方ない。誤魔化すのはやめよう。誠実に朔良は言った。

「すぐ思い出すから…これ以上は、もう少し待っててくれませんか？」

しゃがみこんだまま崇史は顔を上げる。泣きそうな表情だった。たまらなくなつて朔良は目を逸らした。

「自殺じゃないのは…確かなんだな？」

「……………はい……………」

自殺志願者だったのはもうずっと前だ。それに志保はこんな形で終えたりしない。それを朔良は知ってる。

「そうか…」

崇史はそれだけ言うと、しばらく黙つたまま頂垂れていた。

どうしても朔良は志保の本音だけは伝えられなかった。そして怪しい人物のことも、まだ中途半端な情報しか持ち合わせていなかったのだ。

* * *

そして夜が開けた。

暖房が一応ついているが、真冬の朝はやっぱり寒かった。

ひとつ身震いをして朔良は目覚めた。またいつの間にか眠っていたらしい。

しかし眠りが浅かったせいかまた夢を見た。今回はただの夢。母親が怒りながらこちらを見ていた。よくヒステリックに怒っている母親だった。

（こんな状況になつて気になつているのかも…………）

遠く離れた両親に、ここに居ることは伝わるのだろうか。

朔良はこの街で独り暮らしをしていた。会社には隼人に連絡をしてもらうことになっている。今日は平日だが出勤は出来ない。

（会社から実家に連絡が入るのかな？）

それは嫌だな、と朔良は思った。無用な心配は掛けたくない。

（でもしょうがないか…）

自分の意志でここにいるのだから。

周りを見るとほとんどの人が起きていた。皆も、あまり深くは眠

れていないみたいだった。

朔良はトイレに行きたいと崇史に告げる。

ここにいる間、トイレは申告しなければならなかった。崇史が亮が見張る為について来るが、その間だけは縄をほどいてくれる。

「あ、私も……」

遠慮がちに結花も申し出た。この中で女性は二人だけだ。

移動する二人の後ろから崇史がついてきて、そして縄をほどくとトイレの前で待つ。トイレには逃げられるような窓は無い。

最初は待たれることが何だか恥ずかしかったが、二度目には慣れた。

用を足して手を洗っていると結花が左隣に来て話しかけてきた。

「あんた、なにしに来たのよ」

崇史に聞かれないよう、小声だったがはっきりと怒りが伝わってきた。

栗色の短い髪が頬に掛かってくるのも構わず、中腰で手を洗いながら睨み上げている。可憐な花柄のワンピースがその表情と不釣り合いだった。

「みんな同じようなことを訊くね」

蛇口を捻りちよつと朔良は笑ってみせる。しかし結花にはそれさえも苛立ちを募らせる要因となった。

「ちゃんと答えないからでしょ。なにを企んでるのかって訊いてるのよ」

結花とは今までよく一瞬に飲んでいた。あの日もメンバーの中にいたほどのだから、本当はかなり近い間柄だ。

そして結花は志保のことが友として好きだった。

だが志保はよく朔良といるので、常日頃から嫉妬の目を向けていたのだ。このようにあからさまなものは初めてだったが、朔良は気づいていた。

志保が死んだことで、感情が抑制を仕切れないのだろう。

「結花には関係ないことだよ」

自然と朔良も拒絶するような口調になってしまった。結花の目に憎しみの色が混じる。

「あんなに落ち着いてんの？気持ち悪いっ！なに考えてんのか全然わかんない！」

徐々に語調が荒くる。朔良は黙ったまま結花を見つめた。まるで、静かにその憎しみを受け止めるかのように。

「志保が死んだ日もそれから、あなたが泣いたところを見たことがないわ！むしろ笑ってばかり。頭おかしいんじゃない？それとも馬鹿！？」

叫びながら蛇口の先を手で抑え、その水を朔良にぶちまけた。

思わず右手で顔を覆い少し後退る。冷たい水は庇いきれず髪と服を濡らせた。

そのとき、ここの異変に気づいた崇史がドアを勢いよく開いて入ってきた。

「なんだ？何をしている！」

崇史から見て手間に結花、奥に朔良がいる。濡れた朔良と出しっぱなしの水。

事態を瞬時に理解すると結花の腕を抑えた。

「やめろ！」

しかし一度爆発した結花の感情は収まらない。腕を捕まれられながらも糾弾した。

「私は聞いているのよ！あの日あなたは志保に死ねって言ったじゃない！！それから通夜にも葬式にも来なかった！なにを企んでるか言えよ！」

結花は崇史がいなければ掴みかかってくる勢이었다。かくいう崇史は結花を抑えながらも、その内容に訝しげな顔で朔良を見る。

朔良はハンカチを出し、かかってしまった顔や髪を拭いた。まるで平穏な心を取り戻すかのように。

（私が志保に？）

まだ、思い出せない場面だった。

そこに驚きはなかったが、ただ胸は痛んだ。どういふ流れでそう言ったのかはまだ分からない。

でもよく生と死について話していたんだ。どうかその延長線上であつて欲しいと朔良は願つた。もちろん志保の死なんて望んでないから。

(傷つけてしまつていたらどうしよう……)

朔良はそつと目を伏せた。

「そんなこと、どうでも良いでしょう」

「なんですって？」

「たまたま忙しかつたから行けなかつた、それだけよ。別に何も企んでないし、あの言葉は……そう、ただの冗談」

「なにそれっ！どこまでも自分は関係無いみたいにつ……そうやって無関心でいればいいわ！私は絶つ対！許さないから！……殺してやりたい！殺してやる！！」

最後の方は絶叫に近かつた。何度も殺すと叫び、崇史の腕を振りほどこうとする。

しかし男の力には敵わない。崇史も本気で抑えていた。

「やめる！大人しくしないと撃つぞ！」

崇史は榛色のジャケットのポケットに入れていた拳銃を、威嚇のために引き抜く。

結花は崇史を睨み付けながらも口を閉ざすと、みるみる内にその目から涙が溢れ出した。

それを見ると崇史は朔良に視線を移す。

「お前も、あんまりスカしてんなよ。勝手なことするな、つて言ったのは俺に対してだけじゃないんだ。この場を荒らすなら容赦はない」

崇史の感情は不安定でぶれていた。怒りと哀しみが左右にあるとしたなら、中心にある針が極端に振れる。

今は結花に感化でもされたのか、怒りの中にいた。朔良はハンカチをポケットに押し込む。

「私だつて…別に怒らせたいわけじゃあ、ないんだけどな」

聞き取れないほどの小さい呟き。崇史は僅かにこちらに耳を寄せ、結花は構わず泣いていた。

その時、なかなか戻つてこない三人に不審に思ったのか亮がやつてきた。

肩に機関銃を乗せながら飄々として^{ひらひら}している。中を一度見渡すと朔良に視線を戻して、ぼそりと言った。

「また、あんたなの」

朔良は苦笑するしかなかった。

「こいつ撃つちゃえよ崇史。こいつがいなければ全て巧く纏まる^{うま}」
とんでもないことを、さらりと無表情で亮は言う。

崇史は即答しなかった。迷っているようだ。

(まずいな…)

直感的に朔良はそう思った。明らかに不利だ。

そしてどう動くべきか迷う。

ひととき沈黙が続く、先に口を開いたのは結花だった。

「もういい。こんな人、相手にしなければいいのよ…構われないだけなんだわ」

まだ涙声で疲れたように言う。

崇史は結花から手を放した。結花はもう朔良に突っ掛かりはしなかった。

「確かに…木本の言う通りかもしれない」

崇史はポツリと呟く。

「お前のことが分からない。何が言いたいのか、何がしたいのか…」

崇史の、結花の、亮の視線が痛い。

一挙手一投足を見張られているようだった。

「本当に榊原はここに荒らしに来たと思えない」

そして崇史は拳銃を朔良に向けた。この状況がもう何度目になるか数えるのも億劫になる。

崇史の表情は読めなかった。

感情を荒立てないで静かに銃口を向けられるのは初めてだ。

だからこそ朔良は恐かった。どういつつもりでいるのか、まったく読めない。一寸先は闇。その言葉を痛感する。

表情に変化もないまま静かに崇史は撃鉄を引き起こした。

「安心しろ。まだ殺さない」

朔良がその意味を考える前に、崇史は引き金を引いた。

乾いた音がトイレに響く。

「！」

朔良は跪ひざまずいた。右脇腹に貫くように衝撃がきて、立てなかった。

目の端に赤い液体が広がっていく。

「くっ……」

遅れて、卒倒しそうなほどの痛みが朔良を襲った。

目の前が霞んできて跪くことさえままならなくなる。やがて朔良

は前のめりに倒れた。

「きゃあっ！」

やっと事態を把握した結花の叫び声が、どこか遠くから聴こえてきた。

怪しい人物

あの日、二次会のあつたv i s t aで朔良は意外な人に出会った。その男の名は松野貴尚^{まつの たかなお}。

よくここやMIYOSHIで会う人物だったが、この日は沙織里が幹事として貸し切りに行っていたはずだった。その貴尚がまるで参加者のようにv i s t aにいたのだ。

そして朔良と志保の会話を邪魔するように、カウンターの席に近づいてきた。

朔良は隣に置いてあつたバッグやコートをそのままにして、貴尚が座ることを拒否する。しかし志保が自分の左隣を促してしまった。挨拶を交わして何やら朔良の話をし始めている。

「朔良ちゃんはまだ彼氏いないんだ」

志保の隣に座つた貴尚は、賢そうに眼鏡を中指で上げながら、志保越しに朔良に聞いてきた。

貴尚はいつものようにビジネススーツを身に纏^{まと}っていて、見た目は二十代後半の落ち着いた感じがする男だった。

朔良には男性のスーツの価値が判らなかい。だが着けている時計は、かなり金持ちだと判断させる物だった。

「そうなんですよ。なかなか理想が高いんです。ね、朔良」
何故か志保が嬉しそうに真ん中で受け答えをしている。

朔良はいきなり現れた邪魔者に内心目を細めた。どういつつもりで割って入ってきたんだか…という目だ。

「じゃあ僕が立候補しようかな」

貴尚がニコニコと笑って言うてくる。

「だってどうする？朔良」

朔良はつい頭を押さえた。

「あのねえ」

改めて貴尚の目を見てきっぱりと言う。

「私は松野さんとはお付き合いしないって、前にもお断りしたと思いますけど」

貴尚は朔良と会つと、いつもそんなことばかり言ってくるのだ。

「残念でしたね、松野さん」

やっぱり志保は楽しそうだ。

貴尚は朔良に好意を抱いているようだが、いつもそれを断り倒していた。志保は貴尚が朔良に何度断られてもめげないのを知っているから、いつの間にか面白がるようになっていたのだ。

「確かに残念だな。君の理想に近づくことも頑張るのに」

わざと貴尚は悲しそうな顔をする。そう、わざとな感じが朔良には伝わってきているから、どこか信用出来なかつたのだ。

「朔良も試しに付き合ってみたら良いのに。意外と相性良いかもよ」
志保は無邪気だ。自分ばかりが幸せになることに気が引けているのだらう。結婚が決まつてから、彼女はお酒が入るとよく朔良にそう言うようになっていた。

こんな事を言う志保は嫌いだった。

別に僻ひがんでいるわけではない。ただ、幸せを押し付けられているような気がしてしまうのだ。

「そうだよ。どう？ 試しに」

「い、や、ですー！」

これ以上は無いくらいに断っているのに、何故この人は引かないんだらう。

「志保ー。見て見てこれ！」

その時テーブルから志保を呼ぶ声があった。彼氏達数人と飲んでいたら結花だ。何やら写真を持って振っている。

すでに出来上がっているようだ。

おそらくあの写真は結花と彼氏である中岡賢二が旅行した時の写真だらう。最近海外旅行に行ったと聞いている。

「なに？ なに？」

志保はその盛り上がりに興味を惹かれ行ってしまった。

MIYOSHIで飲んだあとはいつも二手に別れていた。馬鹿騒ぎしたい派とただ静かに飲みたい派に…。

Vistaに来るメンバーは静かに飲む派だったのに、最近はお酒が進むといつの間にか居酒屋化していて、朔良には不満だった。

「まあ、いいけど別に」

「なにが良いの？」

不意に近くに貴尚が顔を寄せていた。志保が抜けた事で朔良の隣に来たのだ。

思わず朔良は後ろにのけ反る。いつの間にか気持ちが生に出ていたらしい。

「いーえ、なんでも」

「そう？面白いね朔良ちゃん」

貴尚は甘い笑顔で朔良に言った。

「やめてください。その呼び方。背中がゾワゾワする」

両腕で自分を抱きしめ、僅かに震える。

「寒い？暖めてあげようか？」

「……………」

朔良は無視した会話に嫌悪感を覚えた。

「ちよつと失礼」

そう言つと、トイレに行くために立ち上がった。

どう撃退しようか考えながら。

用を済ませそこから戻ると、もう貴尚はカウンターにはいなかった。別の仲間の男性とテーブルで喋りながら飲んでいたので見える。

朔良はほつとして、カウンターに戻りカクテルを飲み干した。

* * *

場面が変わった。

朔良は遠くからそれを視させられている。

自分は夢を見ているんだ、とこの時気づいて、不思議な感覚に陥

った。

その時、感情がいつもより昂っているのを朔良は感じていた。

最初はお酒のせいだと思っていた。いつもとは違い、悪い酔い方をしてしまったのかと……。

だけどそれは違う、と別のところから否定する声が聴こえてくる。もしかしたら……という想いが消せない。心当たりというにはあまりに確実性がある真実。

嫌な予感が朔良の神経を尖らせていく。

「朔良は警戒心が強すぎるよ」

志保は純粹に酔っていた。たまたまトイレが一緒になって、手を洗っている時に警戒心もなく喋りかけてくる。

「なにが？」

少し苛立って、冷たく聞き返してしまう。

三次会として開かれた会場は、スナックだった。飲み仲間である河口俊の母親が経営していて、時々少人数になると誘ってくれていたのだ。

この日三次会に参加したのは、その俊と、朔良と志保と沙織里、それに結花と賢二の六人だ。

このトイレの中は一人用で狭かった。自然と近くで話すため、声は小さめになる。

「松野さん。私は良い人だと思っけどなあ」

ハンカチを取り出して丁寧に手を拭きながら志保が言った。

「あの人を信用したら駄目だよ」

トイレの鏡で自分を見ながら朔良は答えた。まるで自分自身に言っている気持ちになる。

「どうして？…あ、今度三人で飲む機会つくろっか。一度ちゃんと会話したら朔良だって…」

「絶対ダメ！志保も松野さんには近づかないで」

言葉を途中で遮られて、少し志保は頬を膨らませた。

「別にあたしが話すのは問題ないじゃん。朔良と違ってあたし松野さん好印象だし」

「志保……」

朔良は志保を睨んだ。焦る気持ちのせい、普段ならば絶対にしない行動になる。

いや、焦らせる元凶がある。それがすべての悪だった。

「志保はあの人のこと知らなすぎる」

「それを言うなら朔良でしょ。朔良はいつもすぐ思い込んでしまうところあるからさ」

「私のどこが………？」

「松野さんだつてまさにそうよ。特に何かされた訳でもないのに……頑固に意地張つてさ」

何かなら、された。

しかしそれを志保には言えなかった。伝えられないもどかしさが苛々を募らせる。

「志保は最近お節介すぎるよ」

「お節介？」

「ほつとしてよ！私のことは」

少しずつだが確実に声が大きくなった。

「ひどい……あたしは朔良に幸せになって欲しかったただけなのに」

「私は幸せだよ」

「うそつき。怖いだけでしょ」

「なに………」

「幸せになって心が変わるのが怖いのよ！死にたい時に死ねなくなるから！」

「！」

それは禁句だった。朔良の理性を完全に吹き飛ばしていた。

駄目。言つては駄目！

遠くから見ていた朔良は思わず叫ぶ。しかし何故か声が出なかつた。

頭では分かっていた。例え声が出たところで………今更こんなところで止めても無駄であることを。

これはすべてあの日にあったこと。もう、終わったことなのだ。

「志保だつて変わったじゃない！前はこんなこと言わなかった。自分だけ幸せになると思つて気が引けてるだけでしょ？」

「そんなことない！」

朔良は志保の前に居るのが耐えられなくなつて、トイレの扉を開きながら言つた。

「結局、そうやって志保も運命に殺されていくんだ。だったら、いまのうちに死んだ方がマシだよっ！」

言つてはいけない言葉を言つてしまった。

つい、朔良は顔を背けた。

そこにいた沙織里達が驚いて自分達を見ている。トイレから出た二人は、それに気づいて慌てて取り繕っていた。

(まずいことを聞かれた意識は…志保と共感していたんだね…)

客観的に目の当たりさせられて、初めて気づくこともあるのだ。

そう、これが結花が聞いた事実だった。このときの結花は、すでに憎しみをその眼光に介在させていた。

一発の銃声は一樹の耳にも無論届いていた。

嫌な予感はしていたのだ……。中々戻ってこない三人。そして様子を見に行く亮。

一樹は縛られながらも何とか立ち上がった。三吉も賢二も同じようにした。

他の人達は、心配そうな顔をしたものの、恐怖の方が先にきたようだ。

構わず一樹は銃声のした方……トイレへと駆け込んだ。後に三吉、そして賢二と続く。

「！」

結花の悲鳴が聞こえた。そして血なまぐさい臭い。

ドアは開いていた。だからすぐにその状態を見てとれた。

聴覚、嗅覚という流れで情報を捉え、そして視覚、目に映

ったものが一番の衝撃を与えた。朔良が、倒れている。

「なに……なにが………」

一樹の声が震えた。三吉も目を見開き、そして賢二も息を呑んでいた。

「朔良！朔良！！お前達、何してるんのか分かってんのか？」

三吉が激怒した。普段を知っている者からすると、想像がつかない迫力だっただろう。

亮がこちらを向き、表情も変えずに冷たく言った。

「何勝手に動いてるの？」

手には機関銃をもっている。三吉は少し戸惑ってしまった。撃たれる恐怖は怒りをも抑制する。

だが一樹には分かった。

振り向かない崇史の背中を見て、亮ではなく、彼が撃つたことを。亮は機関銃で一樹達を押しした。戻れと無言で命令する。それを踏

ん張って一樹は叫んだ。

「崇史ー！！」

僅かに亮がうるさい、と顔をしかめた。だが当の崇史は反応しない。結花はその隣で青ざめていた。

「いい加減にしるよ！どこまで墮ちたら気が済むんだっ！！」
耐えられなかった。

これが全部夢で、早く目が覚めれば良いのに、と一樹は強く思う。そして朔良の元に駆け寄りたい衝動に駆られる。しかし亮がそれを許さない。

「亮！どけよ！どけ！」

肩で何とか押し返そうとした。だが、縛られた体ではどうしても負けてしまう。

亮は涼しい顔をして、阻止する力を緩めずに崇史を見た。

「こいつも撃つ？」

自分の頭の血がさあつと引くのが分かった。

亮は昔から自分達とは違った世界にいることが多かった。何を考えているのかまったく分からない。

崇史はそんな亮をいつもでも受け入れた。面白いものを見るような感じで、亮と付き合っていたのだ。

亮にとって崇史は最大の理解者となった。だからこそ亮にとっても、崇史のことを大切な存在と思っているのだろう。

それは異常なほどだった。昔から、崇史の言うことだけは聞く。しかし他の者に対しては徹底的に冷たい。

「亮……お前ももう辞めるよ。本当に崇史のことを想うなら、もつとやるべきことがあるだろ？」

必死な一樹の訴えにも、亮は聞く耳を持たない。無視して崇史の次の言葉を待っている。

崇史がようやくくこちらを振り向いた。血の気がなく、蒼白い顔をしていたが、表情は無かった。

「そうだな。うるさい奴は黙らせればいい。俺にはその力がある」

一樹はカツとなった。とんでもない思い上がりだ。力があるのは道具で崇史自身ではないのだ。

「崇史！目を覚ませ！」

撃たれるかもしれない、そう思っても叫ばずにはいられなかった。何より早く朔良を手当てしないと手遅れになってしまう。

しかし崇史の精神状態は通常のそれでは無かった。一人撃ったことでタガが外れたようだ。

躊躇なくまっすぐと、拳銃を持っている腕を一樹に向ける。

「ひっ！」

後ろにいた賢二が、畏怖いふの声を上げて後退った。

一樹は目を見開いて、愕然とした。

こんなことをする男だっただろうか。これではまるで殺人鬼ではないか。この恐怖を朔良も味わったというのか。

逃げたいのに、脚が震えて動けない。

「ちよつと寝ていてもらおう」

それは悪役の台詞だよ、と切なく思う。しかしその時、聞こえてくるはずのない声が間に入った。

「やめて……」

朔良だった。ゆっくりと立ち上がり、血に染まりながらもしつかりと崇史を見据えている。

「榊原！」

「朔良！」

一樹と三吉が思わず叫ぶ。

信じられなかった。彼女のここまでの強さは一体どこからくるのだろうか？

（なんで……立ち上がれるんだ………なんで、立ち上がるんだ……）

その場にいた誰もが驚きの目で朔良を見た。亮でさえも、目を見開いていた。かなり珍しいことだ。

「大事な人質、なんでしよう？………1人でも、死んだら意味、無いじゃない？………警察は、絶対動かなく、な………」

小さな声だったが、確実に聞こえた。まだ何とか喋ろうとする朔良は、だけど再びよろけて倒れ掛かる。

「榊原！」

亮に隙が出来ていた。一樹は亮の脇をすり抜けると、崇史の横も通り過ぎ、素早く朔良の元に駆け寄った。

右胸が朔良の額に当たり、その身を何とか支えることに成功する。手が使えないことを、ここまで不便に思うことは無かった。

「榊原、大丈夫か？」

気をしっかり持って貰おうと、声を掛ける。

朔良はゆっくり一樹の腕を掴んで、上体を起こした。目が痛みから虚ろだ。そして一樹にしか聞こえないほどの小声で朔良は言った。

「一樹さん…もう、冬馬さんを刺激しないで…私はだい、じよぶ、だから……」

一樹は目を睜った。

そのとき、朔良がやっぱり笑っていたから。

護りたいもの

朔良はそのまま、再び意識を失った。

一樹はとてつもなく切ない気持ちになった。朔良のここでの本当の目的が分かってしまつて、泣きそうになつていた。

いや、泣いていたかもしれない。瞳も頬も熱いから…。

「崇史、そういうことだから、手当てしてくれないか」

朔良は一樹にしがみついたままだが、一樹には何も出来ない。凄く齒痒かつた。

何も言わない崇史に代わつて、三吉が口をついた。

「とにかく血を止めないと！スタッフルームに救急箱がある。大したことは出来ないが無いよりマシだろ？」

スタッフルームには何でも揃つているのか？思わず聞きそうになつて口を閉じた。今はそれどころではない。

「崇史」

遠慮がちに促した。

冬馬さんを刺激しないで。これが朔良の遺言にでもなつたら、洒落にならない。

崇史はまだどこか生気の抜けた顔をしていた。驚愕したのはあの一瞬だけだったのだ。

「好きにしる」

それだけ言つてこの場を去ろうとする。

「ま、待て！手を自由にしてくれないと…」

動けない…と最後まで言い終える前に崇史は動いた。ゆっくり一樹の元まで歩み寄り縄をほどく。

「崇史…」

崇史の表情を見たかつたが、朔良がいるので振り向けなかつた。

「木本と賢二は戻れ。一樹と三吉さんだけで何とかすればいい」

崇史は背中を向けると疲れた声を出した。半ば自棄になつている

かもしれない。

「いいの？」

亮が崇史について出て行きながら訊いていた。しかしその答えを確認して暇は無かった。

急いで朔良を抱き上げる。本当は動かすのは危険だと思ったが、トイレの、それも血痕の上に寝かせる訳にもいかない。

トイレから出て右に曲がると個室がある。三吉の指示でそこに朔良を寝かせた。

そこは畳のお座敷で、掘りごたつ式の部屋だった。

それからすぐに三吉の縄を一樹がほどいた。途中から賢二と結花は2人と離れて、広いホールの方へ戻って行く。どうせこの店から出るにはホールを通らないといけない。だからだろう。崇史も亮もついては来なかった。

三吉がスタッフルームに行つて戻ってくる間、一樹は朔良の顔を見つめた。血が流れすぎたのだろう。比喻ではなく顔面蒼白だった。そして呼吸が荒い。

「朔良……」

呼び掛けてみるが反応がない。

「どんな想いでここまで来たんだ？…何で、そんなに守りたいんだ？」

たとえ朔良が意識があつて、同じように訊いたところで、朔良はまた適当に答えるだろうと思えた。

* * *

人があんなに血を流すところを初めて見た。しかも拳銃というドラマや映画でしか見たことのない物で。

結花は体が震えて中々止まらなかった。賢二の胸に寄りかかる。

崇史達は結花をなぜかまだ縛らなかつた。しかしあんな衝撃な場面を見させられた後では、反抗的な行動を起こす気にもならない。

「賢二……」

弱々しく語りかけた。

賢二の胸に顔をうずくませる。聴こえてくるその鼓動は速かった。賢二も辛いのだろう。

「結花」

「私……何で、あんなこと言っちゃったんだろう」

朔良のことは今でも大嫌いだ。それは変わらない。

「殺してやるって……言っちゃったの………あんな感情が私の中にあつたなんて……」

あの時は本気でそう思った。どす黒い憎しみに満ちたあの感情。しかし実際に朔良が倒れて怖くなった。

死というものを、初めて間近に感じたと思う。

殺すなんて絶対に言っではいけない言葉だと、頭では分かっていたのに……。それがどうしてなのか、心の心臓で実感した。

「どうしよう。朔良が死んだら………私のせいだ」

硬く結花は目を閉じた。

自分が仕掛けたことだったから。朔良がトイレに行くのを見て、最初から詰問きつもんするつもりでついに行った。それがあんな事態を引き起こしたのだ。責任を感じずにはおれない。

ずっと黙って聞いていた賢二が口を開いた。

「結花のせいじゃない。結花は悪くない」

慰めのその言葉を、呪文のように結花は心の中で繰り返した。

* * *

窓際の定位置に戻り、崇史は窓から警察の動きを確認した。銃声が聞こえたことで、騒々しくなっていた。池田の姿も見える。

早く、志保の死について調べて欲しい。自分はそれだけを望んでいるのに、なぜこんなことになっているのだろうか。

崇史が感慨深く思慮していると、何度目になるか携帯が鳴った。

いくつかの友人や、会社関係の人から最初は着信があった。しかしそれには一切無視していた。

何を言ってくるか、容易に想像出来たから。

志保が死んでから今まで、周りの人達は皆自分を憐れんだ。これまで腫れ物にさわるかのような扱いをうけた。

反吐が出る。

だから崇史が応対するのは決まって池田からの電話のみだ。

崇史は通話ボタンを押す。そして何も言わずに池田の言葉を待った。

「今、何があった？」

池田の声は深刻な感じに低い。銃声がして気を揉んでいるのだろう。

これを利用しない手はない。

「一人負傷しました」

崇史は他人事のように伝えた。

「なに？」

「まだ彼女は生きてますが時間の問題です。池田さん、分かるでしょう？このまま時間が経つとどうなるか。最悪の事態を招きたくないかったら、早く捜査してください」

「彼女？誰が怪我したんだ？」

拒否を許さない厳しい口調が変わる。

「それより捜査はどこまで進んでるんですか？まずはそれを教えてください」

電話の向こうで少し間が空いた。迷っているのだろうか。

「いいか冬馬。何度も言うようだが、笠原志保の部屋は密室だった。窓は開いていたが、第三者が侵入した形跡はない。部屋だって身辺整理されていたし…認めたくないのは分かるが…」

「それを調べるのが警察だろうがっ！」

声を荒らげて遮った。後ろで人質たちがビクリと反応したが、崇史にはそれを気づく余裕はない。

「志保は自殺じゃない。榊原だってそう言ったんだ！警察は榊原の話聞いたのか？」

朔良はいろいろなことを言っただけは信じたかった。がこの言葉だけは信じたかった。

あの時の朔良の目は、何だか辛そうでも嘘をついているふうには見えなかった。

「榊原……？榊原朔良か。……事情は聞いてるが……」

池田は思い出しながら喋っていた。

「何も覚えてない、の一言だったな」

「……………」

朔良は警察にも答えていなかった。彼女は絶対に何かを知っているはずなのに。

「他には？何を言っていましたか？」

「何だ？……彼女に何かあるのか？」

池田が唸った。警察側はノーマークだったのだ。

(役立たずめ……………)

心の中で毒づく。

「榊原が怪しい。俺でさえ分かったのに、刑事の貴方はみすみすそれを聞き流したんですね」

「どういうことだ？まさか突入した人物の中に女性がいたという報告があったが……」

「そうですね、彼女です。だから教えてください。榊原が喋ったこと全部」

声を強めて崇史は命じた。丁寧な口調は、時に汚い言葉を紡ぐよりの迫力を持つ。

「……彼女は、酔っていてほとんど覚えてないと言った。だが笠原さんとは友人ではなく、同志だったと話している」

「同志？」

志しが同じである者？崇史は首を傾げた。

「それから笠原さんの部屋は、死ぬ前と何も変化がないことも証言

している」

「なんだと!？」

崇史は抑えきれず叫んだ。志保と会うときは、いつも外か崇史の家だった。だから正直、崇史が初めて志保の部屋に入ったのは事件の後、だったのだ。

志保は一人暮らしだ。それは知っている。

確かにそこは、シンプルと言えば聞こえは良いが、余計な物が一切無い、つまり何も無い部屋だった。

間取りは1DKで、部屋にある家電製品はデスクトップのパソコンが一台、机に置かれ、そのディスプレイでテレビを見て、音楽もそれで聴いていたようだ。あとはベッドにもなるソファ……それだけだった。

キッチン道具は一応一通り揃っているが、一つずつで使った形跡はない。そういえば料理は苦手だと言っていた。

そしてクローゼットの中も必要最小限の量の服があるだけだった。この部屋では身辺整理された部屋、そう思われても仕方がないのかもしれない。だが例えば犯人がいて、自殺に見せ掛けた、という可能性だって捨てきれない。そう思っていた。

一度も志保の部屋に訪れなかった事を後悔した。この部屋が普段のままなのかどうか、今の崇史に知る術が無かったから。

何と志保の両親でさえ、来たことは無いと言った。契約の時には一緒に見たが、それからは志保が実家に帰ることはあっても、その逆は無かったと母親は涙ながらに教えてくれたのだ。

自分は志保のことをあまり知らなかったのだ。

部屋を見渡していると、それを実感して寂しい気持ちに襲われた。当時は気づかなかつたが、今思えば、さりげなく崇史を自分の家から遠ざけていたと思う。

しかし朔良は志保の部屋に行ったことがあるというのか？

(しかも……死ぬ前と変化が無い、だと?)

いきなり黙り込んだ崇史に池田が怪訝な声をだした。

「冬馬？」

「なん、でもありません…それでは榊原は、やはり志保が自殺をほのめかしていたと？」

「認めたくは無かったが、崇史より朔良の方が志保の近くにいたよ
うだ。」

「……いや、そうとは言っていない。…さあ、話したぞ。今度は冬馬
が教えてくれ。中の様子を」

「まだいろいろ訊きたかったが、池田はそう打ち切る。」

「崇史は拳を握りしめた。爪が食い込んだが、不思議と痛みは感じ
なかった。」

「負傷者はその、榊原です。俺が撃ちました。俺はただ威嚇の為に
こんなものを持っているんじゃない。それが分かってもらえたんじ
やないですか？」

「冬馬！」

「俺は本気です。今日中に捜査の報告を入れてください。何も進展
が無ければ、もう一発撃たないといけませんね」

「そう言うと、再び崇史から通話を切る。早くこんな状態から抜
け出したかった。」

「安心、したかった。」

* * *

「また朔良は夢に引き戻されていた。」

「覚えている記憶と、潜在意識の奥底に眠っていた真実が、通して
繰り返されられていく。」

「スナックを後にすると、賢二と結花は仲良く二人で帰って行った。
そして俊が沙織里を送って行くよ、と申し出た。」

「え？悪いよ。同じ方向でもないし……というか俊くんち、ここだし」
沙織里は遠慮していたが、志保が気遣って後押しすると、照れながらも一瞬に歩いて行った。なかなか良い雰囲気だ。このまま付き合うかもしれない。

そんな二人を後ろから見送ると、喧嘩したあと初めて志保と二人きりになった。

少し気まずい空気がその場に流れる。

「さて、私達も帰ろっか」

まず朔良が明るく切り出した。

「うん。あ、朔良今日泊まっていけない？」

志保もいつもの笑顔を朔良に向ける。たまに飲んだ後、こうして志保の家に泊まることがあった。朔良もいつものようにその提案に肯首する。

二人でタクシーに乗り志保のマンションに向かった。

車内ではどちらも無言だった。運転手が気を遣って、一言一言話し掛けてくるのを答えたくらいだ。

志保が何を考えているのか分からなかったが、朔良はこの日のことを思い返していた。

そして頭を抑える。

記憶が 失われ始めていたのだ。

志保のマンションについてタクシーを降りたとき、やっと朔良達はちゃんと会話した。

「今日はごめん」

まず朔良が謝った。

「私、言い過ぎた」

「そんなの……。あたしこそごめん！あんなこと言っつもり無かったのに」

志保も頭を下げた。初めてした喧嘩の仲直りに朔良はむず痒い気持ちになって笑った。

志保も同様にふふ、と笑う。

朔良が続けて口を開こうとした時、後ろから声を掛ける者がいた。「あれ。偶然だね」

その声に驚いて朔良は勢いよく振り返る。志保もそれに習って声の主を見た。貴尚 だった。

朔良から完全に笑みが消えた。

そう、ここで貴尚は再び登場した。

朔良は厳しい目で見つめた。

真実のビジョンが、新しい記憶の穴を埋めながら頭に刻み込まれる。しかしそれはすでに起きたことだ。

新しく得るものではなく、すでに頭にあるものが再び溢れてきているはずなのに、まるで今が現在であるかのように感じる。

この辺りは、ほぼ忘れていた。だから、食い入るように次を見守った。

「松野さん？ どうしたんですか？ こんなところで」

志保が無邪気にこの偶然を驚きながらもはしゃいでいた。

「どうした？ って聞かれてもね。僕の家もこの近くなんだよ。ちょっと締めには何か食べようかなと思って」

「そんなんですか？ 偶然！ あたしのマンションもここなんですよ」「お酒のせいだろう。あっさり志保は自分のマンションをばらした。

(え……？)

朔良は違和感を感じていた。それが何かはこの時は分からなかつ

た。

それを追及するより、今の現状に危機感を覚えて流れを見守るのに必死だったのだ。

貴尚は、人当たりの良い微笑を朔良達に向けた。

「へえ。偶然だね」

そして、志保はとんでも無いことを言い出した。

「あ。だったらこれからあたしの家で三人で飲み直しませんか？」

「な……………！」

朔良は突然の展開にうろたえた。人を部屋に入れるのを嫌い、朔良しか入ったことが無かったのは知っていたからだ。

「ちよ……………」

「本当？嬉しいな」

朔良が拒絶するよりも速く貴尚は笑って頷いていた。志保に躊躇いはなく、その回答にあっさり“四次会”が決まってしまった。

なんてことだ。朔良はその展開を見て口を手で覆った。その手が震えている。

(こつこつ…こと、だったんだ……………)

やっと、分かった。ここだけが謎だったのだ。

この流れを思い出したことで、後は大体想像がつくものとなった。そして先ほど感じた違和感も今なら解る。貴尚は志保が自分のマシオンをばらす前から“僕の家も”と言った。それが意味するものは、貴尚は初めから知っていたということだ。

そしておそらく、貴尚の家がこの近くというのも…嘘だろう。

すぐには志保の家に入らずに、近くのコンビニでお酒やおつまみ

を買った。

志保と貴尚は楽しそうに会話をしている。何も知らない者が見たらこの二人こそが恋人に見えたかもしれない。

少し下がったところで恨めしく朔良はそれを見ていた。

(どういいうつもり…)

貴尚を見ると、自然と睨んでしまう。

一応仲直りはしたが、三次会で志保が言ったことは、まだ志保の胸の内に在った^あということだ。

志保はなぜが朔良と貴尚をくつつけたがつている。志保に今更何を言っても無駄だと気づいていた。

それに怪しまれず貴尚と離れて、二人で会話する機会は今もないだろう。

ならば貴尚の動きを見張るしかない。何を企んでいるのかは知らないが、貴尚には怪しいところがあったのだ。

「朔良。遅れてるよ」

振り向いて志保が朔良を呼び掛けた。慌てて表情をつくりなおし、朔良は二人に追いついた。

見張るつもりであることを貴尚にばれる訳にはいかない。

「妬いてるの？朔良ちゃん」

「いいえ」

ふふふ、と笑う貴尚に素っ気なくそれだけで否定する。

あたし邪魔かなあ？とか言いつつも志保は相変わらず楽しそうだ。

「そんなことないよ志保ちゃん。それに、いつか僕は自分の力で朔良ちゃんと二人きりになるから大丈夫だよ」

「やだあ。松野さんってば」

この時、強い頭痛を覚えた。それはお酒のせいではなく、精神的なもので間違いないだろう、と朔良は思えた。

* * *

その時、朔良は薄く目を開けた。

最初に見えたのは暗めの照明だった。明らかに見慣れた自分の部屋とは違う。

「朔良！」

次に覗き込んできた心配そうな一樹の顔。

「気がついたか」

そして三吉がほっとしたような顔を見せてきた。その顔を認識すると、徐々に現状を思い出してきた。

（そうか…私、気を失ったんだ）

ぼんやりした頭のまままで身体を起こした。

「あれ？痛くない」

つい声に出る。自分の身体を確認すると、インナーのブラウスはほぼ血に染まり、それが乾いていた。

しかし服の下は見えなくても手当てをされているのが分かった。

包帯のようなもので止血されている感触がある。そして毛布を掛けてくれていた。

「朔良。三吉さんが救急箱を持ってたんだ」

「痛み止と、怪我のせいで熱だしてたからな、解熱剤を飲ませた。

……………あとは消毒とか簡単な応急措置だから、本当はちゃんと病院に連れて行きたかったんだが……」

二人は嬉しそうに教えてくれたが言葉の後半に少し三吉の顔が曇る。

ここはMIYOSHIの個室だった。朔良も通してもらったことがある。

「まだ寝ていた方が良く」

一樹が朔良の上半身を支えて横にさせた。毛布を掛け直してくれる。

やはり動かすと少し痛い。だけど撃たれた直後とは比べ物にならないほど軽くなっていた。

「幸運なことだが、弾はかすただけだったんだ」

銃弾は大切な臓器を傷つけることなく朔良から離れてくれた、と一樹は教えてくれた。

「ありがとう…」

朔良は二人に素直にお礼を言った。でも運ではないことは朔良が一番良く分かった。崇史は言ったのだ。……まだ殺さないと。

「あれからどうなりました？」

よく見ると二人とも自由に動いている。この場には崇史も亮もいなかった。

「何も変わってない」

三吉がため息混じりに言った。一樹も辛そうな顔をしている。

「崇史は今日中に捜査が進展しないと、また誰かを撃つつもりらしい」

(そんな……)

少し絶望的な気持ちになる。そしてふと疑問を感じた。

「私、どれくらい気を失ってたんですか？」

今が何時か気になったが、近くに時計は無かった。朔良は腕時計はしない。時間を確認するときは常に携帯だったから。

「ただ三吉が腕時計をしていた。それを見ながら言った。」

「十時間くらいだ。もう夕方の五時だぞ」

「そんなに？」

驚いて、焦りから再び体を起こそうとする。しかし一樹がそれを許さなかった。

「寝ている。朔良は無茶をしすぎる」

「でも…」

「でもない。大人しくしないと睡眠薬も吞ませるけど、良いか？」

朔良は一樹を恨めしそうな目で、無言の訴えをした。しかし一樹はすんなり受け止めると、優しく諭すように笑う。

「俺がいるから大丈夫だ。崇史には誰も殺させない。…だから安心して寝てろ」

その言葉に朔良は戸惑い顔を見せる。自分の心を読まれた気がしたのだ。そつと毛布を顔の半分まで覆って、目だけで一樹を見た。そのとき三吉が立ち上がった言った。

「一応朔良が気づいたこと、崇史に知らせてくるわ。何だかんだ言っただけにしてははずだから」

どこかのんびりした口調だった。徐々にこの状況に慣れてきたのと、朔良が無事だった安心からか、普段の三吉を取り戻しつつあるようだ。

三吉が個室から出ると、ぼそぼそ朔良が呟いた。

「いつ気づいたの？」

「崇史のこと刺激するなって、俺に言っただろ？」

朔良はまったく覚えて無かった。これは意図的なものではない。意識が朦朧とした中で、言った言葉だった。

「覚えてない……」

素直に言うと、一樹はまた優しく微笑した。

「それから、今までの朔良の行動を思い出した。俺が撃たれそうになったとき、崇史を止めてくれたる？阿呆な振りして」

「アホ……」

少々傷ついた。

「でも自分のとき、やっと明かした事実があった。あの時は、俺の時より崇史に殺気が満ちていた。だから奥の手を出したように見えただ」

凶星をつかれて、毛布の下で朔良は赤面していた。毛布があつて良かった。

「自分が撃たれたって言うのに、また俺が崇史を責めたら、君は刺激するなと言う。だから思っただ」

一樹はちらりと朔良を見た。

「君は自分が“死にたくない”とか、崇史を“ただ止めたい”とか、そんなことじゃなくて……それはもちろんあると思うけど、もっと違う視点に重点を置いていたんじゃないかって」

そう、朔良がここに来た目的。それは崇史に“人殺しをさせない”ことだった。

志保のために。

崇史が自分のことで犯罪者になることは、志保の意に反することだ。でももう、いくつか犯罪を起こしてしまっていた。だからせめて殺人者にだけはしたくないと、朔良は動いたのだ。

志保は自分が死んだ時には、周りにはなるべく早くいつもの日常を取り戻して欲しいと望んでいた。

しかしどのように言っても、崇史は止まらなかった。

一発、自分が撃たれることでショックを受けて止めてくれれば良い、とまで思った。

それで収まるならこんな怪我、いくらでもしてやる。だけど、だからこそ自分はこのまま死ぬわけにはいかない。

朔良は毛布を握りしめた。その手を一樹が上から触れる。

「でも、もう無茶はするな。俺も…協力するから」

「一樹さん…」

力強く一樹の言葉が心に響いた。

(だけど…ダメなんです…)

朔良にはもうひとつ、別の目的があった。そしてそれは今より無謀なことだと思えた。

だから体力はつけておく必要がある。

朔良は目を閉じるといつの間にか再び眠りに落ちた。

* * *

朔良の寝息が聞こえると一樹はその顔を見つめる。

(約束は……してくれなかったか……)

一樹にはそれが何を意味するのかが何となく分かり、ため息をついた。

いつの間にか朔良のことばかり考える。朔良のする言動が気にな

って、ひとときも見逃せない。

一樹は……つい。

眠っている朔良の顔に、自分の顔を近づける。
そして一瞬だけ、ほんの微かに、唇を重ねた。

朔良の野望

テレビの前でグシャリと隼人はコーラの缶を握りつぶした。半分まで入っていた缶はその液体を噴き出す。

「なんだって…？」

無機質な音声で、淡々とアナウンサーはそのニュースを伝えた。

『ダイニングバーMIYOSHIで起こっている立て籠り事件の速報です。今朝未明、二発目の発砲がありました。これにより、昨夜ビルへ車で強行突入した榎原朔良さん二十三歳が負傷しました』

世界がグルリと回るような衝撃を隼人は感じた。

ゴールデンタイムの番組までの、何気なく場繋ぎでつけていたニュース番組だった。

ケイはすでに帰っている。今頃はまだ大学に残っているのかもしれないし、すでに帰っているかもしれない。

隼人は携帯を持ったが連絡するのを一瞬躊躇った。家だったらどうしよう。

相手も携帯だから大丈夫なはずなのだが、ケイの家は特殊だった。とにかくケイに対する束縛が強い。そしてケイの両親は、隼人とつるむのを嫌がっている。

隼人はもう一度テレビに目を向けた。映像は、昨日、自分達が仕出かした事柄をプレイバックしていた。

表口ではあの時、バイクに乗った仲間が七人、発煙筒を持って正面に突入した。

本当はこの中に隼人も入る予定だった。今日はその使用されるはずだったバイクを引き取りに行ったのだ。一応目立たないところに隠してきた為、撤去はまだされてなかった。

そして、煙で混乱を巻き起こすときつかり五分。

その後計画通り三方向に別れて逃走した。車は逃走の時の目眩ましに使われたのだ。パトカーとバイクの間に巧みに入って。

しかし映像は煙で何がなんだか分からない部分と、裏口の一樹の車が突っ込むところが、遠くから撮られた物のみだった。

誰一人、素性も顔すらバレてない。作戦もその実行も完璧だったのだ。

(なのに、なんで朔良は失敗してんだよ……)

心が押し潰されそうな想いになった。

ケイは大丈夫って言ったのに……。ここにいない親友に少し八つ当たりをする。

名前を公表する警察にもムカついたが、それより朔良の怪我が気になる。

躊躇いながらも隼人はケイの番号を呼び出した。祈りながらその応答を待つ。

「もしもし。隼人？」

繋がった。しかしまだ安心は出来ない。

「ケイか？いま、大丈夫か？」

ドキドキしながら訊いた。

「うん。いま帰り道」

隼人はほっとした。しかしすぐに困惑げな声になる。

「大変なんだ！朔良が怪我した！」

小さくえっ、と電話の向こうで呟く声が聞こえた。そして隼人は、ニュースで知ったことを話した。

「どうしよう。あいつ死んだら」

隼人は完全に混乱していた。

「落ち着いて。今から会える？」

ケイは冷静だった。隼人はうん、と答えて待ち合わせ場所を決めた。

* * *

ビルの前で池田は唸っていた。池田はよれよれのコートを着てい

だが、それは徹夜だっただけでなく、もつと年季を感じさせるものだった。

無精髭をいじりながら、崇史がいるはずの窓を睨む。朝、崇史が期限付きで要求したことは夕方になっても進展をしていなかった。

志保の部屋はまだ契約が続いていた。今月末に引き上げると崇史伝に聞いている。

だからと言って、調べられることは限られていた。

念の為、池田の後輩が部屋に行ってみたが、相変わらず何も無く、怪しい箇所も見つからなかったのだ。

検死は行われたがやはり不審な点は無く、お酒以外なもの…つまり薬物的なものを服用した、もしくははされたという結果は認められていない。

遺体はとうに茶毘に付されている。解剖までには至らなかったうえ、今更出来ない。

(お手上げだな…)

いま対策本部では事故として処理し直す話もでているが、崇史は果たしてそれで納得するのだろうか。

結局はつきりとした事実は出てこない。

(ここらが潮時だぞ…冬馬……………)

気持ちは解らないでもないが、逝ってしまった者についてどう自分で向き合うかも考えないと、前には進めないのだ。

崇史が言った榊原朔良は確かに不思議な人物だった。

朔良も池田が事情聴取をした。身内や周りの友人達が悲しみに暮れるなか、彼女はしっかり受け答えをし、時には笑みを見せることもあった。

話を聞く限り、一番志保と近しい人物だったのだろう。

彼女は不思議なことを証言したのだ。

「私の影響で志保はいつも部屋をシンプルにしていました」

この言葉を要約すると、志保は常に身辺整理をしていたことになる。そのときだけ、一瞬朔良は悲しげな表情を見せた。

今、再捜査するならまず朔良に話を聞きたいのに。彼女は店内に自ら入っていき、現在は負傷しているという。

(どの程度の怪我かでも分かれば…)

池田はやきもきしていた。

「池田さん。もうすぐ時間です」

その時、後輩の青木が自分を呼びにきた。ああ、と言ってそちらに向かう。

もうじき、朔良達が開けたあの裏口から、機動隊が潜入する計画だったのだ。まだ突入ではなく、MIYOSHIの近くまでだ。

* * *

警察の異変に崇史と亮は気づいていた。

厳密に言えばそれは亮の読みだった。

「ほら。前にいた人数が極端に減ってる」

亮の助言に崇史は眉を潜めた。

「極端つてのは、言い過ぎじゃないか？」

今までも警察側の人数には変化があった。確かに今減つてると言われればそう見えるが、今までとの違いが崇史には分からなかった。

「そんなことないよ。人数自体はそんなに変わらないかもしれないけど機動隊が減ってる。残ってるのは警官がほとんどだ」

興奮しているのか亮の口数が多い。

「なら、出入口を何とかした方が良いな」

だからこそ、すぐに崇史は亮を信じる。しかしどうしたものかと考え込んだ。

「とりあえずこのテーブルと椅子でバリケードを張るか」

それしか思い付かなかった自分が悔しい。

「それも良いけど、それだと自分達も追い込まれるよ」

亮は別に良いけど、と付け足した。崇史も頷いた。

「すでに追い込まれてるからな」

逃げることもなんて最初から頭に無かった。崇史には目的を遂げることだけがすべてだったのだ。その後のことなんかどうでも良かった。

三吉が朔良の様子を伝えにきてから、崇史は少しだけ心が落ち着いた。

やはりあのまま死なれたら寝覚めが悪い。

(だけど…これから、警察の出方次第では、決断をしないとイケない時が来る！)

崇史は腹をくくった。

* * *

朔良が次に目覚めたのは、眠ってから二時間後のことだった。

もう記憶の夢は見なかった。熟睡できた感覚がある。

そしてその場にはまだ一樹がいた。一樹はこちらに背中を向けて足を部屋の外に出して座っている。

朔良は戸惑いながら訊いた。

「ずっとそこにいたんですか？」

背中が反応して少しだけ向いた。

「まあ…でもイビキとかはかいてなかったから、安心していい。そういうことではないんだけど、と朔良は突っ込みたくなった。じっくり寝顔を見られたかと思うと恥ずかしい。

「あの…もう起きてもいいですか？」

朔良の遠慮がちな申し出に、一樹は完全にこちらを見た。真剣な瞳をしていた。

どきりと朔良の鼓動が鳴る。

「ゆっくりな。それで少しでもしんどいようなら駄目だ」

朔良はとりあえず上半身を起こした。寝覚めが良かったせいか、吐き気や苦しさは無かった。

痛みはやはり完全には取りきれていないが、耐えられない程じゃ

ない。

「大丈夫みたいです」

自分でも安心しながら朔良は伝えた。毛布を丁寧に畳み始める。起きる気満々だったのだ。

「朔良、ひとつ教えて欲しいことがある」

そんな朔良の様子を見ながら、一樹は真面目な顔をして言った。

「なんですか？」

さらりと聞き返したが心の内には翳^{かげ}りが現れた。真剣な一樹が問うことに嫌な予感がしていたのだ。

「朔良のもうひとつの…本来の目的って何だ？」

(やっぱり、か……………)

ため息を吐きたい衝動に駆られたが、何とか呑み込む。

それだけは聞かないで欲しかった。ここでの野望がばれたときもそうだが、あまり踏み込まれたくない。志保の為だけではなく、それが朔良の性でもあったのだ。

「そんなこと…聞いてどうするんですか？」

誤魔化すように毛布を整える。とつくに畳み終えていたが、手持ちぶさたになって何度も畳み直した。

そんな朔良を一樹はじつと見つめた。居心地の悪さを感じて、朔良は立ち上がるうと力を入れる。その一瞬速く、一樹が動いた。

優しく抱き止められていた。

「一樹さん…」

朔良の声が掠れた。鼓動が脈打ってうるさい。

「頼むから、協力させて欲しい。もう独りで頑張らないでくれ」

そして身体中が熱くなった。いつもの適当な切り返しが出来ない。「私も…:…お願いですから何も聞かないで…:欲しいです。どうしても言えないんです」

抱き締められたままにしていたが、その言葉は拒絶だった。その顔は目を見開いたまま哀しく歪んでいる。

この差し伸べられた手を取ることが出来たなら、どんなに楽かと

思う。どんなに心強いかと。

一樹はその瞬間、抱き締める力を強めた。それから 離れる。
必然的に目に映ったその表情は、切なく笑っていた。

「悪いな。困らせた」

傷つけた、と気づいた。

(私もごめんなさい…)

でも朔良には、どうしても1人でやらなければならない理由があったのだ。

「いいえ」

朔良はそれだけ言った。謝りたかったが、そんなことをすれば更に一樹を惨めにさせてしまう。

「冬馬さんはどうしてますか？」

どうしても宗史と交渉しなければならぬことがある。もうあんな卑劣な武器を使わせないために。

静かに一樹は首を横に振った。

「何も……」

それは何も変化がないのか、それともここにいたから分からないのか……朔良には判然し得なかった。

「ホールに……戻りましょうか」

そう言つと朔良は立ち上がった。久しぶりに立ったことで、くらりと目眩を感じる。

「朔良っ」

瞬時に一樹が反応し支えてくれた。一樹の右の胸に、顔をうずめるかたちになってしまう。朔良は一瞬硬く目を閉じ、そして一樹の両の腕を押すようにして自分の身体を引き剥がした。

「すみません……ただの立ち眩みです」

一樹も一歩下がって離れた。

「そうか……」

そう言つと一樹から先にお座敷を出た。朔良は後に続くその中で、一樹の背中を見つめる。

(ごめんなさい…でも、ダメ、なんです。…守られることに…支え
てもらうことに慣れてしまったら、ダメなんです)

もう二度と、自分の足で立てなくなる気がしていた。

独りで成し遂げることが叶わなくなる。朔良はそう感じていた。

ホールに入るとまず一樹が立ち尽くす。朔良はそれに不安を感じ
すぐに中を見た。

すると何を思ったのか、崇史と亮がテーブルや椅子を移動してい
るところだったのだ。半分くらいすでに運び出され、中はさらに広
い空間となっていた。

「何してるんですか？」

半ば呆気にとられながら朔良は訊いた。

崇史はちょうどテーブルをレジのある方へ持って行くところで、
ちらりと朔良達の方を見たが、運ぶのに忙しいようで無言で姿を消
す。亮は初めから喋る気が無いようだ。

それを見かねて三吉が教えてくれた。三吉は元の位置に座り縄を
縛り直されていた。

「バリケード作るんだと。なんかお前らの開けた裏口から、機動隊
とかが入り込んでるらしいぞ」

「え？」

しばらく呆然としてその場に立ち尽くしてしまった。

そして窓際を見る。その席はそのまま、テーブルには機関銃
と、没収された朔良の携帯電話が置いてあった。

(あ。いまのうちなら…)

この騒ぎに乗じて携帯を取り返そうと一歩踏み出す。

しかしそれを一樹が感じとり、朔良の右腕を掴んだ。一樹の方を
向くと、ただ首を横に振った。余計なことはするな、と言いたいら
しい。

朔良は俯く。一樹の心配が痛いほど分かった。

だから……とりあえず二人の作業が終わるのを待つことにした。

機動隊なんてものに突入されるなんて、とんでもないことだ。被

害が出る可能性が高くなるような気が朔良にはしていた。

機動隊は人質救出が最優先だろう。たとえ人質側に被害が出なくても、犯人側はどうか分からない。

朔良は、崇史に人殺しにさせたくないだけではなく、この件では誰も死人を出したくなかったのだ。

人質も、犯人も、そして機動隊にも。

（虫の好い話だってことは分かってる。でもこれが志保の…私の望みなんだ）

無意識に左手で右の脇腹を触る。

（そのためには、まずは携帯が必須アイテムなんだけどな）

ぼんやりと窓際を見つめた。

するとそれに気づいたのか、テーブルを運び終わった崇史がこちらにやってきた。

「おい。何考えてる？」

ギクリとして朔良は声の主を見る。

「いや…あの…なにも。あはははは」

誤魔化し笑いを冷たい目で一蹴された。そして崇史は視線を下に移す。

その時になって、まだ一樹が自分の腕を掴んだままであることに気づいた。慌てて右腕を引っ込める。

だが崇史は傷口の辺りを見ていた。

「大丈夫なようだな」

ぼそりと独り言のように呟く。

絶好のタイミング、だと思った。

朔良は決断する。今こそが崇史との交渉の時だと思ったのだ。

もう、この瞬間一樹のことは頭の隅に追いやられていた。

「冬馬さん。お願いがあります。携帯電話を使用することを許してもらえませんか？」

ストレートに朔良は言った。これは“勝手なこと”ではないだろう。お願いしているのだから。

僅かに崇史の眉が寄った。

「何のために？」

「沙織里に訊きたいことがあるんです。これは志保の真相に一步近づくためです」

今度ははつきりと崇史の顔色が変わる。隣で一樹が息を呑んだ。

そして亮がこちらを見ていた。また何か言ってる…という顔だ。

他の人達もこちらを注目している。

構わず朔良は続けた。

「思い出したんです。だから…私を一時的に解放してください！」

そして頭を深々と下げた。

いきなりの動作に、脇腹がずきりと痛む。視線が下にあるため崇

史の表情は分からなかった。

しばらく沈黙が流れる。

「その内容は？」

崇史は怒鳴ることなく、静かに問うた。朔良は顔を上げるとま

つすぐ崇史を見る。

「志保は自殺ではありません」

これは前にも言ったことだ。本当は今こそが言つべき瞬間ときだったのだ。

「でも事故でもないんです」

徐々に崇史の顔色が驚愕に変わる。

「志保は…殺されたんです！！」

ずっと、溜めていた言葉だった。もしかしたら一生言えないのかもしれない、と思った時期さえあった。

崇史の表情はやがて哀しく歪んだ。見ている方が切なくなる顔だった。

「どつやって？」

崇史の声が重くのし掛かる。それに耐え首を横に振った。

「まだ言えません。証拠が何も無いんです」

すべては朔良の記憶の中だけのことだった。志保が亡くなっています

ぐ、朔良は志保のマンションに行った。

志保から何か遭った時の為にと、事前に合鍵を預かっていたのだ。まさか本当に使う日が来るとは、朔良も思っていなかったが。

だがすでに、部屋には記憶の中の形跡が何も無かった。

警察からも第三者の指紋は、自分だけのものだったことも聞いた。では貴尚の指紋は？コンビニで買って持ち寄った飲食物のゴミは？

そう、あの四次会の形跡はごっそり切り取られていたのだ。亮が滑らかな動きで機関銃まで近寄った。

「随分、都合が良いんだね」
しかしすぐに銃口を向けるようなことはしなかった。崇史の判断を待つようだ。

しかし崇史はそれには気づく余裕がない。

「犯人は誰だ？」
少し朔良は躊躇った。先ほども言ったことだが証拠がない。しかし今から動くにあたって、隠し通す事は難しいだろうと思えた。

「松野貴尚」
憎しみを込めてその名を口にする。刹那、身体に電流が走ったように震えた。

もう永いこと、押し込めていたことだった。貴尚の隠れた悪に気づきながら、うわべで交わす会話。

志保に伝えていたならこの悲劇は起きなかっただろうか。おそらく否だ。貴尚の想うところは計り知れないが、間違いなく狂気な存在だった。

三吉、それに結花や賢二といった貴尚のことを知る人は皆、驚いていた。

それはそうだろう。貴尚は頭が良い。人当たりも良かった。

「松野？何度か見かけたことはあるな。しかし志保から聞いたが、奴は榊原のことが好きなんだろう？」

崇史は首を傾げた。

(まったく…志保ったら…)

朔良はもういない同志にいつも通りの感情を持つ。困ったような切ないような気持ちだった。

「口ではそう言っていました。真意は…私にも解りません。でもだから、私はあの人に会わなければならぬ」

何かを言いたそうな顔で一樹がこちらを見ていた。お願いだから、いまは何も言わないで。切実にそう思う。決心が鈍ってしまっそうだったから。

崇史は躊躇いがちに朔良を見ていた。心情は読めない。

「原田に何を訊くんだ？」

「松野さんの連絡先です。MIYOSHIで何度かそれとなく聞いていたけど、誰も知りませんでした。あの日、沙織里が幹事をしてきた二次会に来ていたから、その辺りを…。多分知らないとは思いますが、何かヒントになればと思って」

朔良はここで頂垂れた。貴尚は志保が死んでからばったりとMIYOSHIに来なくなっていたのだ。

そこも不審に思うきっかけの一つだったのだが、まだ沙織里に訊いていない。記憶を取り戻した時に訊けばいいと思ってしまうていた。

「誰か知らないか？」

一応崇史が三吉達に訊ねる。三吉が思い出すように空を見た。

「そう言えば知らないな…。普段何をしているのかも訊いたことはあるが、確かはぐらかされた」

他の人も知らないと言を横に振っている。

そう貴尚は連絡先だけではなく、素性も知れなかった。横ですつと黙っていた一樹がとうとう口を開く。

「連絡先を知ってどうするつもりなんだ？」

朔良は握り拳を作った。心配かけるのは分かるがやめるつもりはない。

「私の目的はあの人の逮捕です。志保の件を自供させます！」

「危険だ！」

瞬時に一樹は叫んだ。

「危険なのは承知してます。だけど私しか出来ないことだと思つてます。あの人は頭が良い。警察では捕らえられないでしょう」

「だったら尚更反対だ！そんな危険なやつ、何をされるか分からないんだぞ！」

「あの人を許せない！野放しにはしたくないんです！！」

朔良はいつの間にか必死に訴えていた。此処へ来て、初めて本音をぶちまけた気がした。

白い拳が震える。

（だから、言いたくなかったんです）

「なら俺も行く」

拒否を許さない目で一樹は低く言った。しかし朔良は拒否をした。「駄目です。他の人がいたら彼は何も喋りません」

なぜかその確信があった。それに………と朔良は思う。

（それに私と志保の秘密をあの人は絶対知っている！）

それは一樹と言えども知られる訳にはいかない。生前、志保が言っていたことを朔良は思い出していた。

「あたし達だけの秘密ね」その言葉は、遺言のように今の朔良を動かしていた。

しかしここでは崇史の判断が最優先される。朔良は崇史の様子を窺った。

考えこんでいるようだったが…やがて崇史はふと笑った。冷笑だった。

「？」

何を考えついたのか朔良は読めなかったが、ただ凄く嫌な感じを受けた。

（なに？今の…）

しかしそれは一瞬のことですぐに無表情になる。崇史は腕を組み

ながら言った。

「分かった。好きなだけ使え。だが必ず捕らえる」

「あ、はい…」

怪訝な想いで窓際まで近づくと亮が一步下がった。その流れで窓の外を観る。

(あれ?……………)

目を引くものが映った。

しかし崇史の気が変わらない内に行動に移しなければならぬ。その場で携帯を開くと電源は落とされていた。起動をさせたとき、後ろから崇史の声が掛かった。

「待て、言っておくがこの内部事情は話すなよ」

信用ないな、と朔良は嫌な顔をした。

「解ってます」

沙織里の番号を呼び出すとき電池が1つ減った。それを確認しつつ携帯を耳にあてる。

「朔良!？」

するとすぐに出た。なぜか驚くような声を出している。

「そうだよー。どうしたの?そんなびっくりして」

「するよ!大丈夫?大丈夫なの!？」

そこで朔良は気づいた。恐る恐る訊いてみる。

「まさか何か知ってるの?」

「知ってるって…そんなの当たり前だよ!ニュースになってんだから!」

頭をガンと殴られたような衝撃を感じた。何ということだ…。もう大騒ぎだよー、とか沙織里は付け足しているし。

朔良は頭を押さえたくなくなった。

(だからか…)

朔良は再び窓の外に目を向けた。そこには野次馬に混ざって、隼人とケイがこちらを見上げていたのだ。遠すぎて分からないが、心配してるのだろう。

「あ、あのさ。そんなことより…」

なるべく突っ込まれないように無理矢理話しを変える。

「そんなこと！？心配してるのよ！」

しかし失敗に終わった。すぐにしまった、と後悔した。沙織里に火をつけてしまったようだ。

「それをそんなこと!？」

「ごめん！いや、私は大丈夫だから！全っ然！まったく！」

焦って取り繕う。ちらりと崇史を見ると、青筋を立ててこちらを見ていた。顎で合図してくる。早く本題に入れと言いたいようだ。

(怖いよー)

何とか電話に集中し直す。

「本当？まだ中にいるの？電話掛けられてるってことは釈放されたの？他の人は？」

沙織里の怒涛のように浴びせてくる質問は脅威的だった。

「沙織里！聞いて！」

すべてを無視して強引に斬り込む。

「松野さんの連絡先を教えて欲しいの！」

「え？」

ピタリと沙織里の問いが止まった。

「沙織里知ってる？…知らなくても、誰か知ってる人いないかな…」

「松野さん？…まさか！朔良！」

沙織里ははっとしていた。少しばかり嫌な予感がする。

「とつとつ松野さんのことを…」

「違うよ！」

予感はあるさと当たってしまった、朔良は肩を落とした。

(冗談じゃない…)

「じゃあ何で？」

朔良は言葉に詰まった。本当のことを沙織里に言う訳にはいかな
い。

「それは……………」

「それは？」

「こついつ時に限って適当な言い訳が思い付かない。まさかこんな展開になるとは、朔良は想像だにできなかったのだ。」

「やっぱり！おめでとう朔良！照れなくてもいいよ」

言葉が続かない朔良に沙織里は勘違いをしたまま進んで行ってしまった…。

（それよりおめでとうって何！？）

沙織里も志保みたいにくつつきたい、などと思っていたと言うのか。とうとう朔良は頭を押さえた。

「で……知ってるの？」

疲れきってしまい、そのままにしておくことにした。

「ごめんね。知らない」

本当に申し訳なさそうに沙織里は言った。せつかくの恋の発展だったのにね、と呟いている。

朔良も青筋を立てたくなった。

「あ！でもマスターなら知ってるかも」

ふと沙織里が妙案を思い付いて嬉しそうに叫ぶ。

「マスターっていうと…」

「うん！v i s t aのマスター！ちよつと聞いてみる！また掛け直すね！」

それだけ言うと一方的に通話が切れた。虚しく電子音が朔良の耳に残る。

「切れた」

ぼそりと呟くと崇史が近くまで寄っていた。

「何だった？」

ギクリとなって振り向く。

「えと、知らないって…で、知ってる人いるから聞いて掛け直してくれるって」

「かいつまんで重要な部分だけ伝える。」

「前半は？」

「なんかっ…あの、ニュースになってるって…その、私の怪我が」
朔良は恐縮した。自分なんかメディアに出たのが信じられな
った。少し照れる。

「ふーん」

つまらなそうに崇史は言う。

「まさか、知ってました？」

「携帯のニュースサイトでな」

そうですか、としか朔良は答えられなかった。照れた自分が馬鹿
みたいだ。

「で、中盤は？」

「聞くな！」

つい叫んでしまい崇史の怒りを一身に浴びた。

行動開始

少し時間は遡る。

隼人は待ち合わせに指定したカフェでケイを待っていた。

昨日朔良とも行ったカフェで同じ席に座った。窓からビルが見える。

あの中で朔良が瀕死の状態かもしれない、と思うといてもたつてもいられなかった。

ケイは少し遅れていた。苛立ちながらカフェラテを飲んだ。

ケイが時間かかるのは分かっていたことだ。それなのに落ち着かないのは、自分の未熟さ故のものだということは解っている。

(でも遅え！)

自然と貧乏ゆすりをしてしまう。すると隣の席に座っていた女子高生二人が明らかに引いていた。

何だよ、と隼人は睨み付ける。

「ヤンキー丸出しだよ隼人」

その時待ち焦がれた声の前から降ってきた。怯えていた女子高生から視線を外し、その声が出た方を向く。

「遅い！」

方向転換しながら叫ぶと冷やかな目線で、ケイがコーヒーを持って立っていた。

「これでも走つたんだけど」

言いながら隼人の前に座ると、確かに額に汗が滲んでいた。息も少し荒い。

「あ。ごめん」

すぐに隼人は反省した。泣きついたのは自分の方だったのだ。

「でも朔良が！」

また泣きそうな顔になってケイを見た。

「大丈夫だよ。まだ、大丈夫」

ケイはそれしか言わなかったが、隼人はほつと安堵の表情を見せた。

ケイはこういうとき嘘はつかない。長年の付き合いで解っていた。「でもそろそろみたいだ」

意味深なことをケイは言う。

「そうなんだ」

隼人にはケイの言いたいことが、やはり長年の付き合いで分かってしまった。

それからカフェを出て、二人でビルに向かった。

相変わらず野次馬が多い。

昨日はここで朔良を見つけた。

それは偶然では無かった。

一ヶ月前に遭遇した彼女に再び話しかけたのは、ケイがずっと気にしていたからだ。最初は渋々着いて行った。

あの人の協力がしたいんだ。

ケイが、そう言うから。

最初は反対したけど、一度決めたら引き下がらないのがケイだ。

ビルのMIYOSHIがあるあたりを見上げながらケイが言った。

「決断してみたい……」

隼人もつられて見る。MIYOSHIには行ったことがないから、内部のイメージが湧かない。

窓の位置も多分あの辺りということのみ。それはニュースで見たから分かることだ。

「決断って……何を？」

ケイはすべてを話してくれない。大事なところを言うだけだ。

「本当の犯人を捕まえるつもりなんだって」

悲しげな顔をした。

ケイには……普通の人には無い力がある。そのせいで知らなくてもいいことが分かってしまうのだ。

昔からこの力のせいでケイは苦勞してきた。隼人にはその感

覚は皆無だったが、近くで何度もそういう場面を見ていたのだ。

ケイがこうやって力を使って、お人好しに他人と関わるのをあまり快くは思わない。

(でも今回は許しちゃったからな…)

それに朔良のことは気になっている。

「もうすぐ俺たちの出番だ」

ケイは上の方を見ていたが、どこにも焦点は合っていないようだ。慣れたものを見る目で隼人は見守っていた。

「あ、榊原さん」

ふとケイの世界がこちら側に戻った。隼人も視線を追うと、窓際に女性が1人立っていた。

周りが騒然となった。マスコミがたくさんシャッターを押ししたり、カメラを向けている。

遠すぎてその女性が朔良だとは分からなかったが、ケイが言うので本当だろう。

「無事なんだな」

少なくとも立つぐらいは元気らしい。隼人はもつと朔良の健康状態を確認したくて、マスコミの望遠が立派なカメラを奪いたくなかった。望遠鏡が欲しい。

「だから大丈夫だって」

ケイは窓際に視線を固定したまま笑って言った。

分かっている。ケイを疑っているわけではないのだ。

「俺たちの出番って？」

気になって隼人は訊いた。だがケイはまた意識を集中して、別の世界に行ってしまった。

それからしばらくすると朔良と思われる女性は窓から見えなくなつた。

「あ……」

少しの変化でも心配になる。一体あの中で何が繰り広げられているのだろうか。隼人には知る術が無かった。

こういう時はケイに聞きたいのに、当の本人は反応しない。未だに集中力を尖らせて……力を使っているのだ。

結局隼人には何も映らなくなった窓を見つめることしか出来なかった。

(朔良……)

そして数十分間が経った。だが隼人にはそれが何時間にも感じた。こんなにただ待つことが辛いとは思わなかった。

すると、その気持ちを察したかのように隼人の携帯が鳴る。

「！」

すぐに相手を確認するとそれは一樹からだった。

驚いて思わずケイを見る。ケイもやつと隼人の顔を見ていて、力強く頷いた。

「協力、してあげて」

意味有りげなことを言う。隼人はただそれに頷き返して電話に出た。

「隼人、何も聞かずにこれから言うことをして欲しい」

一樹はどこか哀しそうな声でそう言った。無論、隼人はそのつもりだったが、初めて聞く彼の声に戸惑ってしまった。

しかしなぜか尋ねることが憚れたため、いつも通りに答えた。

「了解！」

* * *

沙織里は折り返しの連絡をとっても迅速に掛けてきた。時間にして約十分後。

沙織里の直感通り *vissta* のマスターは貴尚の携帯番号を知っていた。

「なんかあんまり教えたくなさそうだったんだけど、頑張っ
て聞き出したんだからね！」

頑張るんだよ！と沙織里が言っていた。朔良はわざと本来の意味

に置き換えて聞いておくことにした。

「えーと…どうやってこの場所から出ようかな？」

次に立ちはだかった壁に対して朔良は独りごちた。

入ってきたところにはバリケードが完成している。その独り言を聞いた崇史は冷たく言い放った。

「ここで電話しろ。俺は電話の使用は認めだが、出ることは別だ」
意地悪だ、と朔良は頬を脹らませた。

「だから、電話だとはぐらかされる可能性が高いんです！」
「とりあえず居場所を掴め。話はそれからだろ」

仕方がない。朔良はつい先ほど知った十一桁の番号を呼び出した。しかし何コールしても出ない。知らない番号からは電話を取らない主義だったらどうしよう。思わず嫌な考えがよぎる。

それでもしつこく待っていると、留守番電話に切り替わった。

(私からだと分かれれば、出るはず…)

少々緊張しながら「ピー」という発信音を聞いた。

「朔良です。もし時間があったら、会ってもらえませんか？」

それだけ言っただけ切った。危険なのは分かるが、会わないと話が進まない。

すると後方から痛いほどの視線を感じた。崇史が無言の怒りをこちらに向けて凄みを利かせていたのだ。勝手に会う約束をしようとしたので、怒っているようだ。

(こっちも危険！)

朔良の顔がひきつった。

「いや、つい…勢いで……」

そう言うしかなかった。何とか崇史に取り繕うと、朔良は鞆から充電器を取る為に窓から離れた。電池が足りない。

崇史が何と言おうと朔良はここから出て貴尚に会うつもりでいた。それには携帯は必須だ。途中でただの機械に成り下がってもらっては困る。

その動きは崇史に訝しく映ったようだった。

「今度は何だ？」

しかし朔良の突飛な行動には馴れてきたようで、その言葉に半ばため息が混じっていた。

「コンセント無いかな？」

充電器をちらつかせながら朔良は探し回る。

「じつとしてる」

呆れ顔でそれだけ崇史は言う。とりあえず、追い込まれてすぐに銃口を向けることは無くなっていた。

良い傾向だ。安心したとき、朔良の携帯が鳴った。

見ると先ほど掛けた番号からだった。少し顔色を変えた朔良に、周りの皆は固唾を呑んで見守っていた。

「もしもし」

（束の間の安心だったわね）

そう皮肉に思いながらも慌てて朔良は携帯に出た。この繋がりを見途絶えさせたら、後がない。

「やあ朔良ちゃん。びっくりしたよ」

いつもと同じような貴尚の声が聴こえた。

「すみません突然。人に、番号聞いて」

「ふうん。誰に教えたかな？」

貴尚は考え込んでいるようだった。それには答えず、朔良は本題を言う。

「あの、今日お暇ですか？出来ればお逢いしてお話したいことがあるんですが」

朔良の動機が速くなった。怖くて崇史の方を向けなかったが言ったもの勝ちだ。

貴尚は不審に思っていることだろう。避け続けられた朔良からの突然の連絡なのだから。貴尚の反応を僅かでも感じとるように、強く携帯電話を耳に当てた。

感覚を研ぎ澄ませるべき対象が二つある。とりあえず後ろからの攻撃は無いようだ。

しかしもう一方からは、とんでもない答えが返ってきた。

「ちよつと今、家で仕事してるんだ。だからうちに来てくれるなら、いいよ」

「！」

貴尚の家。

朔良は躊躇した。自分の顔が強張るのが分かった。怖い、と心が拒否している。

出来ることなら密室ではないところが良かった。しかしこの機を逃すわけにはいかない。何より住所が分かることは、更に大きな進歩となる。

「分かりました。伺います」

すると貴尚は自宅の住所を教えてくれた。朔良は、メモるものがなく必死で頭に刻み込む。

分からなかつたらまた掛けておいで、という貴尚の言葉を最後に電話は切れた。

最後まで立て籠りの話には触れなかった。

(ニュースでもやってるのに...)

怪しすぎる。

「どうなつたんだ？」

事の成り行きをまず訊いてきたのは、崇史ではなく一樹からだっ
た。

崇史には適当に返すことが出来るのに、一樹にはそれが出来なくなっていた。なぜだか自分では分からなかった。自然と心が苦しくなる。

一樹の望みを自分は叶えることが出来ない。それを感じて、とて
もやるせなくなるのだ。

(それに...)

それに一樹といると弱くなる。勇気が、決心が鈍るような感覚に
陥るのだ。

(どうして?)

複雑な気持ちを押し殺して、朔良は笑う。

「松野さんに会ってきます」

それしか答えられなかった。すると一樹には顔を背けられた。呆れられたのかもしれない。言うことを聞かない自分に怒っているかもしれない。

そう思うとズキリと自分の心が軋んだ気がした。

腕を組みながら続けて崇史が訊いてきた。

「どこで会うつもりだ？」

どうしよう、と朔良は迷った。言わずにここを出たい。

先ほどの崇史の冷やかな笑みがここへきて思い出された。何かを、企んでいる気がした。

「とりあえずカフェで待ち合わせをしました。私が行かないと不審がって帰ってしまうでしょう。だから、行かせてください」

嘘をついて頭を下げた。崇史を欺くべきだと本能が訴えたのだ。そして一樹にも…。

朔良は頭を下げながら硬く目を閉じた。逃げたくて堪らない。二人の視線がそれぞれ、刺さるように痛かったから。

「……いいだろう。だが猶予は一日だけだ」

少し間が空いたあと、崇史は厳しい口調ではあったが肯定的なことを言った。

朔良には希望の光が見えた。一日あれば充分だ。

「ちゃんと戻ってこないと…みんなを見捨てたと見なす」

崇史はたとえ脅しても殺すとは言わなくなっていた。

志保の望みが叶って行く。その手応えを、確かに朔良は感じた。

「分かりました」

とりあえず、帰り方は状況をみてから決めることにしよう。

「あと逐一報告すること。だが…」

ふと崇史の言葉が途切れた。どういつ条件で報告させるか考えているのだろう。

「いいものあるよ」

その隣に亮が立ち、ぼそりと不気味に笑いながら言った。崇史の考えを読んだらしい。亮は自分の鞆を探って何やら崇史に差し出した。

「これ」

「なんだ？これ、時計？」

言葉少な目な友人と、差し出された物を交互に崇史は見つめる。それはどうみても普通の腕時計だった。いや、少しダサイ。

デジタル表示であるそれは、子供が持つようなデザインだった。

「だだの時計じゃない。盗聴器付き」

「ええ？」

亮の発言に皆が驚きの声を上げた。

（まさか…）

あれを自分に着けると言うつもりなのだろうか？

朔良は拒否しなかった。ファッション面だけではない。盗聴器なんて、とんでもない。プライバシーの侵害だ。

友人ながら崇史は亮が何を持って来ていたのか知らなかったようだ。興味深そうにまじまじと見ている。

「何者？」

近くで三吉が一樹に声を掛けているのが聞こえた。

「ああいうの、昔から好きなんだ」

一樹がため息混じりに答えている。崇史は盗聴器付き腕時計を受け取ると朔良に渡した。

「報告はいい。常にこれを着けている」

朔良は受け取ることを躊躇った。見てとれるほど嫌々な顔になっている。

「これは…ちょっと…きつい、かなー」

弱々しく拒絶する。

「これをしないと解放しない」

（やっぱりそうなるよね…）

仕方がなく朔良は手を伸ばした。

「絶対外さないこと。あと…このことを話したり、何か不審なことをしたら…」

「分かってます」

崇史の念押しに朔良はため息をつきながらも了承した。

(何とかしないと…)

考えるべきことが増えた。しかし投げ出すという意識は頭の隅にも無かった。

とにかくここから出ることが先決だ。

(あつと、その前に…)

ふと朔良の頭に妙案が浮かんだ。

「あと、貸して貰いたい物があるんですが」

朔良は恐縮しながらも、亮の鞆を見つめながら申し出た。素っ気なく崇史は聞き返す。

「なんだ？」

「あの、私でも使えるナイフ無いですか？出来れば隠し持てるくらいの」

「何する気だ？」

崇史は本心を探ろうと朔良を見ていた。

「ただちよつと…念のために…」

いきなり訪れた機会だ。準備も何もしていない。

ここへ来る時は不要な物だと思っただが、次はそうはいかなかった。貴尚が何をしてくるか想像がつかないのだ。

無論、護身用で他意は無い。それに亮なら持っているような気がした。

崇史はしばらく朔良を見ていたが、ため息をついて亮を見た。

「何かあるか？」

亮はつまらなそうに鞆を漁った。あくまでも崇史の為になるもの以外は出したくない、とでも言っているようだ。

分かりやすい…と皆が思っただろう。

案の定、亮はすっかり持ってきていたようで、折り畳み式のナイフを取り出す。

「これは？」

「いいんじゃないか」

崇史は亮から受け取ると何の迷いもなく朔良に渡した。

「いいんですか？」

何故か朔良が躊躇した。あまりにあっさり貸してくれたからだっ

た。

「いらぬならいい」

「い、いりますいります！ありがとうございます！」

慌てて受け取ると、コートのポケットにしまったために振り向く。そのとき一樹と目が合ってしまった。目を逸らすようにして、朔良は鞆とコートの前にしゃがみ込んだ。

（見ないように…してただけだな…）

後方では崇史と亮がどうやって朔良を出すか話し合っている。

「朔良」

避けてしまう朔良を断ち切るかのように、一樹が呼び掛けた。びくりと全身が震えた。

一樹の顔を見れずに、意味もなく鞆の中の整理をし始める。

「はい…」

何とか一言、返事ができた。

いつの間には彼は、自分を下の名前で呼ぶようになったのだろうか。他の誰が呼ぶより、それは心に響く。

（縛られてるみたい…）

それは捕えられて逃れられない感覚だった。朔良はそっと、自分の心臓の辺りを撫でる。

「もう分かったよ」

「え？」

言葉の意図が解らずつい一樹の方を見た。一樹は俯いていて表情が見えない。

「無駄なんだな…何を言っても…」

小さく本当に小さくポツリと呟いた。

「……………」

「だったら俺がここから出してやる」

「え？」

突然、一樹が力強く言った。朔良には一樹の言わんとしていることが解らない。

「だけど、必ず無事に帰ってきてくれ。君が傷つくのだって、笠原さんは望んでいないはずだから」

「！」

朔良の鼻の奥がつんと痛んだ。泣きたい衝動が襲ってきて、必死で堪える。

（だめ…）

泣くのは駄目だ。

（志保…志保……………！）

無意識に志保の名を心で叫んでいた。涙は最大の禁忌。最大の、裏切りなのだから。

「分かって、ますよ」

いつものように口元に笑みを作れたかったが、それは叶わなかった。不自然に顔が歪む。

一樹の言うことは明確に当たっていたから。

「ならばもう何も言わない」

「……………」

「ここから出よう」

そう言って一樹は、しゃがんでいる朔良に右手を差し出してきた。どうして彼はこんなにも優しく、そしてこんなに切なそうにしているのだろう。

躊躇いがちに朔良も右手を伸ばした。

* * *

そして一樹の作戦は意外と単純だった。またDark Killの何人かを集めると言ってどこかに電話をし始めた。

会話からそれが隼人だとすぐに分かる。

崇史は一樹のやることに何も口を挟まない。他に良いアイデアが浮かばなかったからだろう。

「用意出来るか？」

数回後の電話で一樹は最終確認をした。

「そうか…頼む」

話が纏まったようでも電話を切った。

朔良といえば、三吉からコンセントの場所を聞いて充電をしたり、個室で服を着替えたり、準備をしていた。

着替えるとき包帯が目に入った。

三吉から一樹が手当てをしてくれた、と教えて貰っていたため今更恥ずかしくなる。いくらお腹とはいえ、見られたのだ地肌を。

(そんな場合じゃなかったっていうのは分かってるけど……)

ため息をつきながら黒いスウェットシャツを着た。

お洒落よりも持ってきた中で一番傷口に負担をかけない服を選んだのだ。

(傷口が開かなければ良いんだけど……)

これ以上は血を流せない。貧血で倒れている場合ではないのだ。着替えが終わってホールに戻ると、一樹の手配が終わっていた。

戻ってきた朔良に三吉が声をかけてきた。

「朔良、痛み止とか救急箱にあるの何でも持って行って良いぞ」

三吉も心配をしてくれているのが分かる。

いつも、いつMIYOSHIに来てても三吉は自分を可愛がってくれる。もちろん志保や沙織里も、結花も分け隔てなく好意的に接してくれていた。

三吉もきつと辛いのだ。

朔良は素直にその好意を受け止めた。

「ありがとう、三浦さん」

秘密

隼人の電話で再びDark Killerのメンバーが集まった。

ビルから少し離れた駐車場で待ち合わせをして落ち合う。今度は九人と少な目だった。都合が悪くて来れない人もいたのだ。

この少人数で成功するか疑問が生まれる。むしろ前回より頭数が欲しいくらいなのに。

「大丈夫だ。一樹さんの目的は絶対に達成させる」

一人不安そうにしている隼人に、リーダー格のマサキが力強いことを言ってくれた。しかし隼人はまだそわそわして落ち着かない。

「でも……」

「しっかりしろ、隼人。今回は特に時間厳守なんだからな」

マサキはそう言って隼人の肩を叩く。

その時、光一という男が最後にワゴン車で到着した。光一は車から降りると、トランクを開けてマサキに判断を仰ぐ。

「こんなんで良かったかな？」

マサキはワゴン車の中にあるそれを見て、頷きながら隼人を見た。充分だろ。な？」

「うーん……わかんないっす」

隼人は唸った。なにせ朔良が無事に事を成せるかどうか、これにかかっているのだ。自分の一存では責任が持てない。

一樹の指示は時間と方法のみで、細かいところは隼人に任せると言ってきたのだ。

「大丈夫です」

後押しをしたのはケイだ。いつの間にかケイは皆と打ち解けていて、この場においても違和感を感じないようになっていた。

マサキはその言葉を聞くと自然と仕切りだす。

「よし急ごう。時間がない。ミク、あれを出してくれ」

「はい」

ミクと呼ばれたこの場で唯一の女が自分の軽自動車に向かった。

「隼人達は見張っててくれるか？」

「了解！」

「はい」

マサキの指示に二人はそれぞれ車の前後に立った。見張ると言っても、この場所は人気が少なく歩いている人はほとんどいない。

隼人は前の方で、ビルが見える位置に立った。

腕時計を見て時間を確認する。約束の時間 20:00まで

あと、十五分。

「出来たぞ」

数分後マサキが隼人を呼んだ。いつもは一樹やマサキが指示を出す立場だ。

今日はマサキがいつものように、頼りになる感じでリーダーシップをとっていたが、最後にはすべて隼人に声が掛かる。

それは、一樹が隼人に頼んだからだった。そして隼人がマサキに伝える…といういつもとは逆の形が成り立ってしまったのだ。

(朔良のことだからかな?)

自分達が朔良を連れていったのが事の始まりだからだろうか。

「えーと…じゃあ行きましょう」

隼人は言いながらドキドキしていた。何か間違えていたらどうしよう。そう思うと口数が少なくなる。

(だって俺、しょせん長男タイプじゃねえし)

どこかの外れな事を考えてしまった。隼人は長男だったが姉がいた。実はコンプレックスを感じている部分だ。

「隼人」

そのとき後ろからポンと肩が叩かれる。

「うわっ！はい！すみません！」

自虐的な事を考えているとつい謝ってしまった。

振り向くとそれはケイだった。目を細めて見るかに呆れた顔をしている。

「隼人、緊張しすぎ」

「悪かったな！」

悔しさから嘔みついて叫んだ。ちくしょう、と内心呟く。

「大丈夫だよ。みんないるんだから」

「分かってる」

優しく微笑むケイにぼそりと返した。ケイはこういつとき自分より強いと思う。

（一人っ子なのに…）

いろいろなモノを見すぎてるせいかもしれない。自分には想像もつかないくらい、実は修羅場を潜っていると思う。

「なら行こう。榊原さんが待ってる」

「おう」

一樹を、そして朔良の期待を裏切るわけにはいかない。隼人はマサキが用意してくれた車に乗り込みながら皆に言った。

「みんな…よろしく」

皆も頷きながらそれぞれの配置に着いた。

* * *

「俺さあ……………」

時間を待ってる間、助手席に乗っているケイに向かって話しかけた。

何か喋ってないと落ち着かない。

「実はあんまりミッション得意じゃないんだよ」

知ってる、とケイが答えた。

「で、ずっと考えてたんだ。昨日一樹さんはなんで俺を呼んだのかわかって…」

今日だつてそうだ。こんな重要な役目を自分に託してくる。

「嫌だつたの？」

ケイが上の方を見たまま訊いてきた。その方向にはあのビルの窓

が見えている。

「それが…そうは思わなかったんだ」

嫌、なんてとんでもない。ただ驚きの方が強かったのは確かだ。

「普通ならさ、お前まで呼ばれて、利用されたとか思うじゃない？俺なら」

ケイが危険な身にあつたのだ。自分の身に降り掛かるより腹立たしく、いつもなら感じる。

「それよりなんでかな、ちょっと嬉しかったんだ」

驚きの次に気づいた感情だった。

「そんなの…当たり前じゃない？」

すべて分かっているようにケイは言った。不思議に思っただけ隼人は左側を見た。ケイの次の言葉を待つ。

「隼人は認められたんだよ、一樹さんに。隼人なら出来るってね。

隼人も一樹さんを尊敬してるから嬉しかったんじゃない？」

それからケイはこちらを向いた。

「俺を呼んだのは…俺がこういうことをとくに経験してないから、隼人の近くに置いていた方が良いと思っただけだ」

断定的な言葉でケイは言う。隼人は目を丸くした。だけどその後には、すっと胸の支えが取れたように軽くなった。

「そっか…だったら良いな」

素直に言う隼人に、ケイはふふっと笑った。

「それに、今回一樹さんは絶対成功させなければいけなかったんだ。…だからかな？榊原さんを気にかけてくれてる、隼人以外には最初から任せる気は無かったよ」

「え？それ、どういう…」
今すぐく大事なことを言った気がしたが、隼人は最後まで聞けなかった。

ケイがそつと唇に人差し指を当て、それからその指を時計に向けながら。計画開始まで、もう二分をきっていた。

いつの間に？

隼人の鼓動が高鳴った。瞬時に頭を切り替える。
そこには先ほどもまでの、泣き言をこぼす彼はいなかった。

* * *

20:00。朔良は準備万端で窓際を見つめていた。少し離れた位置にいるため、下は見えない。

その中にある一つの窓の左右には、崇史が向かって右側、一樹が左側でスタンバイしていた。二人も窓には移らないように屈んでいる。

誰も何も言わずにその時をまった。

(聞こえてきた…)

昨夜と同じように下が騒ぎ出した。

朔良は昨日より緊張していた。二番煎じがどこまで通じるかわからない。

そう、今表口では彼らが騒ぎを起こしている。昨日と異なることは、今回朔良が向かっているこの窓の方向は、表でも裏でもない東側だった。

そして昨日より時間が限られている。

騒ぎが聞こえだしてすぐ、朔良のスニーカーの靴底が床を蹴った。それは助走だった。

ギリギリのところまで二人が窓を開ける。躊躇うことなく速度を緩めず…朔良は開かれた窓の棧に足を掛けて。

そして窓から飛び降りた。

「！」

窓の下には目標物が敷いてある。一樹が予めあらかじめそう言っていた。

しかし…それは少し遠くにあり、まだ運んでいるところだった。間に合わない。

(死ぬ…)

ふと朔良の頭に過った言葉。

「榊原さん!!」

意識が薄れそうになった瞬間　　ケイの叫び声がしつかりと耳に届いた。

いや、耳ではない。それは頭に…心に直接響いた気がする。次に、ほんの一瞬だけ、重力に逆らったような感覚を感じた。

「っ!」

どういうことか考える前に朔良の体は衝撃を全身に浴びた。

そして朔良はうつ伏せに…その物　　布団の上に倒れていた。

布団は何枚も重ねて紐でまとめられている。それはマットのように、朔良の体と重力を吸収したのだ。

(こ、怖ー)

後からとんでもない事を仕出かしたことを実感して、恐怖感に満たされる。

裏口に主要な警察が固まっているなら、出口はあの窓しか無かったのだ。

(だからと言って無謀すぎ…)

どちらが無茶苦茶なのか、責めたい気持ちで先ほどまでいた六階の窓を見上げる。

一樹も崇史もこちらを見下ろしていた。上手くいったのか心配しているのだろう。朔良が動いたことに、一樹の安堵の表情がちらりと見えた。

「早く!」

しかし恐怖心を堪能している暇は無かった。布団を持ってきてくれた、Dark Killで見かけた男性三人が朔良を急かす。

やっと冷静になって周りを見渡すと、警官が至るところからこちらに向かって来るところだった。

しかしマスコミがたくさんシャッターを押しているため、眩しくてあまりよく見えない。

「走れるか?」

一樹の仲間の一人が朔良を気遣いながら立たせてくれた。頷いて

走り出すと、三人は朔良を囲むように移動する。

そこに辿り着いた警官達が取り押さえようとしてきた。

「離せよっ！」

朔良の左側にいた仲間が警官に腕を捕まれたのが見えた。

その時、一台の車がクラクションを鳴らして飛び込んできた。警官と朔良達の間に入るようにして、その車は停車した。身の危険を察知して、警官達が少し離れる。

プライバシーガラスで内部は見えない。何者が運転しているのか朔良は聞かされて無かった為、一瞬戸惑う。

「乗れ！」

一番近くにいた仲間の男が朔良を促すと、その声に押されるように、慌てて左側の後部座席のドアを開けた。

すると運転していたのはサングラスを掛けた隼人だった。

「早く乗って！」

助手席にはケイがいて後ろの男と同じことを言った。やはりサングラスを掛けている。

朔良から迷いが消えて、すぐに体を車体に滑り込ませた。

隼人がアクセルを踏み込もうとしたとき刑事が一人、前に立ちただかった。両手を真横に大きく広げている。

「池田さん」

知っている顔、だった。思わず朔良は呟く。

もたもたしている内に池田に続いて警官達も車に寄ってきた。

「くそっ！」

隼人がハンドルを叩いた。完全に取り囲まれたのだ。

しかし先ほど朔良を気遣ってくれた男がボンネットの上に飛び乗った。

「マサキさん！！」

それを見て隼人が叫ぶ。マサキはそのまま池田に殴りかかった。突然のことに朔良は目を見開いた。

刑事を殴るなんて間違いない彼は逮捕される。

「早く行け！」

その時ちらりとマサキが一瞬こちらを見て、そう叫んだのが口の動きで分かった。よく見ると他の二人も暴れている。

何も言わずに隼人はクラクションを鳴らしながらアクセルを踏んだ。ゆっくりだったが確実に車が進んで行く。

「待って！みんなが！」

後方から目を離せずに朔良は焦りの声をあげた。

マサキは強かった。しかし池田の力はその比ではない。池田はマサキを殴り倒して、こちらに追ってくる。それをマサキが脚を掴んで、何とか行かせないようにしていた。

そのとき、裏口から何人かがバイクでその群れに突入してきた。僅かに安心する。しかし警官の群れの中ではスピードが出せずに、多勢に無勢となり、一人また一人と捕まっている。

捕まった者はバイクから引きずり降ろされ、やがて朔良からは見えなくなった。

構わず隼人は前進して徐々にスピードを上げる。

「隼人くん！」

マスコミが次に前にいたが、隼人は朔良の声が聞こえないかのようになり、それにも躊躇せず進んで行く。ケイも何も言わなかった。

「どうして！？ちよつと待ってよ……！」

「待てねえよ……！」

隼人が声を荒らげる。びくつ、と朔良の体を震えさせる声だった。「みんなお前を逃がすためにやってんだ。頼むから口を挟まないでくれ」

隼人の声は厳しい。自分の力が抜けて行くのを感じた。

（そんな……）

分かっただけはいたはずなのに初めて聞いたような衝撃が襲う。これは確かに自分の我が儘だ。一樹を傷つけ、崇史に嘘をつき……それでも朔良が望んだ結果の果てがこれだったのだ。

いくら志保のためとはいえ、そんなものは言い訳にしかない。

間違っていたのだろうか…自分は。

「迷わないで」

ずっと黙っていたケイがやっと口を開いた。

「迷いは犠牲を生むから」

また、自分の心を読み取っているようなことを言う。

「充分……犠牲は出てるよ……」

朔良はそれだけポツリと呟いた。あのバイクに乗っている中に、女の子もいたのに。

朔良は一樹からだだ時間と、飛び降りることを聞いたただけだった。MIYOSHIに窓は東側の一ヶ所のみだったから、池田に読まれても不思議は無かったのだ。二番煎じは通用しない。そういうことだ。

「でもこれしかなかったんだ。榊原さんだけを出すには」

ケイが子供に話すように優しく言う。

「一樹さんだって本当は、こんなことさせたくなかったと思うよ。怪我をした榊原さんを飛び降ろさせることなんだから」

機動隊に捕まったら、しばらく自由にはしてくれなかっただろう。

昨日のこともある。保護、という形のみでは無いはずだ。

隼人が変わらずマスコミに苦戦していると、後部座席の窓が勢いよく叩かれた。

池田だった。マサキを振り切って追いついてきたのだ。

「生まれ！開ける！」

かなり怒鳴り声は大きく、しつかり朔良達の耳まで届くほどだ。

「隼人！」

ケイが焦って隼人を見る。苛立ちながら隼人は尚もクラクションを鳴らし続けた。

「くそっ！邪魔だマスコミ！」

朔良はウィンドウを半分まで開けた。

「朔良？」

その音を聞いて隼人はバックミラー越しに険しい顔を向けた。ウ

インドウが半分まで開くと、池田が腕を伸ばしてきた。だが、朔良はさっとそれにはかわす。

「後で必ず話しますから！今は見逃してください！」

それだけ叫ぶとウインドウを閉じる。池田は必死に窓を押さえようとしたが、自動的に閉まるそれには敵わなかった。

「どういうことだ？何する気だ！？」

池田の罵声を残して窓は閉じられた。

それと同時に隼人もクラッチを強めに踏み込んでエンジンを吹かせる。その音に前にいた記者達も僅かに怯んだ。

その隙をついて隼人は速度を上げる。何とか池田やマスコミを振り切ることが出来て、車はやっと滑らかに走り出した。

「無茶すんな！」

すると隼人に叱られた。

(私…叱られてばかりだ…)

後ろを振り返りながらそう思った。池田が方向を変えていくのが見える。車で追ってくるつもりなのかも知れない。

残された皆を心配しながら、朔良はずっと後方を向いていた。

* * *

池田や他の警官は追いかけて来なかった。彼らもマスコミの存在が仇^{あだ}となったのだろう。

しかしパトカーのサイレンは遠くからだったが、絶え間なく聴こえる。

警察の追っ手が来ないことを確認すると、ケイがサングラスを外して口を開いた。

「俺は榊原さんに言わなくちゃいけないことがあるんです」

車は朔良を乗せて目的地もなく走っていた。それは朔良が貴尚の住所を言いたくないために、何となくそうなってしまったのだ。

「なに？」

ぼんやり窓の外を眺めながら無意識に聞き返す。

「本当は最初から言っておくべきだったんだ…そうすれば…」
ケイがどこか悔しそうに喋るのを、隼人は一瞥だけ向けた。

「俺……………」

ケイはとても言いにくそうにしていた。徐々に朔良はまずい、と気づく。そして自分の左手首を見つめた。何を言いつもりかは分からないが、周りに知られてはならないほど重要なことだと思う。

だけど自分の左手には卑劣な機器がある。外してしまいたいが、怪しまれることは出来ない。せつかく改善されつつある崇史の心が…また堕ちて行く気がしたから。

「ケイクン。後で聞くよ」

自分はいろいろ後回しにしてばかりだ。朔良はふと悲しくなった。ただ前に向かいたいだけなのに、志保のこと以外にはすべておざなりになる。

「いいえ。いま言わないといけないんです」

だがケイは話そうとする。

「榊原さんがいまからしようとしていることを、俺は止めたいって思うから」

朔良は目を瞠った。何かケイは知っているようだ。

(勘が鋭すぎる…)

いや、とてもそれだけでは終わらせられない。MIYOSHIの中に居たのならともかく。

(駄目、これ以上は…!)

朔良の頭の中で危険信号が赤く光っていた。

このままケイに語らせてはいけない。それは、すでにケイのことを心配する気持ちだけでは終わらなかつた。自分にも周りに聞かれなくてはならないことだと、直感で覚つたのだ。

朔良は盗聴器に一度だけ目をやる。壊すことは勿論、外すことも出来ない。

残された手は…。

朔良は車内の左側のレバーを見つめた。信号で止まるのを待っている場合では無かった。

後ろに車がないことを確認する。そして、そっと気づかれないうちにレバーに手を掛けた。

「駄目だ！やめて！」

悲鳴のようなケイの制止にびくつと朔良のその手が止まる。

なぜか何も言おうとしない隼人も、その時は何事かとバックミラーからこちらを見た。

（なんで…、気づいたの？）

「良いから…大丈夫だから聞いて。俺は榊原さんを助けたいんだ」シートベルトを伸ばしながら、ケイは体ごとこちらに向けた。真摯な目をしていた。

「助ける…？」

自嘲気味に朔良は聞き返す。そんなこと…誰にだって出来ない。

これは志保と自分の問題なのだから。

いくら崇史が怒ろうとも三吉が心配しようとも、そして一樹が懇願しようとも…そこには口を挟む余地など無い。ケイにだってそれは当てはまるのだ。

「違うんです。俺には分かるんです。榊原さんと笠原さんのことが」

初めてケイの口から志保の名が出た。それはまるで、朔良の考えを聞いていたかのような台詞。

「勘…？」

勘が鋭いことは聞いている。だがそこにはそれだけでは説明のつかない何かがあった。

朔良の呟きにケイが首を横に降った。

「感じるんです！俺は、人には見えないものが見える、聞こえないものが聞こえる…つまり一般的に解り易く言えば“靈感がある”んです」

「え！？」

突然の告白に朔良は明らかな動揺を見せた。キーンと耳鳴りがして上手く考えが纏まらない。

(いま…なんて……………?)

ケイは今まで見たことのないほどの力強い表情をしていた。迷いは何も感じられなかった。

「聞こえるんです。彼女の声が……………。だからこそ俺には貴女を助けられる。いや、俺でしか貴女を救えない」

「つつ……………！」

思わず泣きそうになり、朔良は右腕を口元に持っていく。天井を見た。

彼が言うことは、とても嘘だとは思えなかった。何度か隠した気持ちを読み取られている。そしてケイの言うことはいつも的確だ。

しかしそれでは……………。つまり彼が見えている対象^{もの}があるということ……………。

(志保！)

そんなの反則だ、と思う。自分が焦がれるほど望んだ志保の^{いま}現在の想い。彼にはそれが分かっていることになる。それはおそらく初めて会ったあの日から。

「だからもう、独りで頑張らなくても良いんです。すべての責任を貴女が独りで背負わないで、良いんですよ」

ケイもどこか泣きそうに微笑んだ。心の縛りが少しずつほぐれていくような微笑だ。

(こんなので、ない)

しかし朔良は必死で涙をこらえることに集中した。自分から…ほどけていったそれを縛り直す。

(でも私はもう…)

もう遅いのだ。

自分には今すべきことが分かっている。それはすでに、志保の為だけでは無くなっていったのだ。

「ありがとう、ごめんなさい…私のために」

これを伝える為にケイは自分の秘密を語ってくれたのだ。盗聴器の存在も気づいているのかも知れないのに。

(でも…)

「私はやっぱり…」

最後まで伝えることなく、朔良は左側のレバーを躊躇わず引く。

少し古めのこの車は、自動でロックが掛からないタイプだった。

「榊原さん！隼人停めて！」

青ざめて叫ぶケイの声を聞きながら、その身は路側帯へと落ちていった。

(やっぱり志保との最後の約束は守りたいの)

* * *

盗聴器越しに得る情報を、MIYOSHIでは全員で聴いていた。

(何て、言った?)

崇史はケイと呼ばれた少年の言葉を、信じられない想いで聴いていた。

途中で出た志保の名前。自分を抜きにして、何を話してる?と問いただしに行きたい衝動にかられた。しかし自分でここから出られなくしたのだ。初めて後悔したかもしれない。

だがこういう状態にならなければ、知り得なかった情報であることもまた事実だった。

「一樹！あいつは何だ?どういう奴だ!？」

崇史は一樹を見たがその顔は土のような色をしていた。つい一瞬前に聞こえたケイの叫び声と、それに反応した甲高いブレーキ音。そして強く擦られたような不快な音。

一樹も自分もそれだけで事の重大さに気づいた。

しかしそれだけではない。失敗に終わった仲間達のこと、一樹にはダメージを与えているのだろう。

それが崇史には分かっていた。舌打ちをして詰問を諦める。

(志保が……何だっ?)

苛立ちを覚えながら、崇史は一連の音を注意深く聴く体勢に入った。

盗聴器は破損を免れ、続けて情報を伝えている。

喝れない涙

急ブレーキを掛けられた車は制御が効かなくなった。そのまま進み、左側のガードレールに突っ込んで何とか停車する。

「うっ」

ケイが思わず呻いたが、隼人はすぐさま外に飛び出した。

幸い後続車両はいなかった。朔良が倒れたと思われる位置まで走る。

「隼人！」

ケイも着いてきたのが声で分かった。それに振り向く余裕もなく一心に走る。

しかしその場に朔良はいなかった。少量だったが血痕が残っている。

「朔良！」

辺りを見渡しながら走り出す。近くには公園があった。暗がりでもよく見えない。いかにも怪しかった。

隼人はそのまま公園に脇から入って行く。大きめな公園で、中は広がった。

「朔良あ！」

辺りを見渡しながら何度も呼んだ。叫ぶと涙が溢れてくる。

「なんでだよ！なにしてんだよ！」

悔しかった。ケイの……いや、自分達の想いが届かなかったから。拒絶された気持ちでいっぱいだった。

そしてケイがどんな想いで語ったかも知っていたから……。信じられない朔良の行動に驚愕と怒りが混ざる。だけど、何より心配もしていた。

「待つて！隼人！」

それにケイが呼び止めた。これだけの距離を走るのにすでに息が上がっている。

「どうしよう！ケイ」

隼人は複雑な気持ちに顔を歪めながらケイの元まで駆け寄った。息を整えながら、ケイは地面に目線を落とした。そして右側にゆっくり移していく。

隼人もその視線を追っていった。よく見ると血痕が所々続いている。そして滑り台でそれは途切れた。タコのように何カ所も滑るところがある。

その中には人が隠られる場所があった。慌てながら隼人は動き出した。

「待つて！」

しかしそれをケイが腕を掴んで止める。怪訝な顔で隼人は振り向いた。

早く行かないと手遅れになるかもしれない。もしそんなに怪我が酷くなくても、もたもたしていたら逃げられるかもしれない。

「俺のせいだ。上手く言えなくて…俺が彼女を追い詰めた！」

俯きながらケイは両手で隼人の腕を掴む。

「そんなの…」

ケイのせいじゃないと、言いたかった。しかし首を横に振ってケイは否定する。

「俺、うまく人と会話できなくて……だから榊原さん！」

途中で、滑り台の方に向かって声を張り上げた。

「思う通りにやってみたらいいよ！」

微動だにせずに叫ぶ。それに隼人は、信じられないものを見るような顔をした。

「でも忘れないでください！俺は…俺たちはいつだって助けるから！味方ですから！」

それだけ言うとお入って来た方へ踵を返す。腕を離され解放された

隼人は、滑り台とケイを交互にみて　ケイの後を追った。

「おい！良いのかよ！」

「あ！そうだ隼人。車までひとつ走り行って彼女の鞆、持ってきて」

ケイはいきなり立ち止まり、返答とはまったく違う言葉を返す。
「はあ？」

呆気にとられて変な声が出てしまった。

「あれ無いと困ると思うから」

「お前、ほんと…」

「良いから早く！」

隼人に最後まで言わずケイは促す。文句を言いたい気持ちを抑えて、隼人はまた駆け出した。

その間いくつかの車が通りすぎ、何かあったのかとこちらを見て行った。大通りではなくて良かった。隼人は内心でそう呟く。

しかしいつまでもここにいと、いつ警察に発見されるか分からない。

車まで辿りつき隼人はエンジンをかけると、後ろを見ながら逆送させた。

そのとき、ガードレールのへこみが目の端に映った。車の先端も無事ではなかったのだ。

（マサキさん、ごめんなさい）

車の持ち主に申し訳ない気持ちになる。運転がもつと上手ければ、タイヤがロックされることもなくぶつからず停車できたはずだったんだ。

しかし後悔は先に立ってはくれない。

（だから、朔良……）

隼人は、滑り台の中でどんな想いで隠れているのか分からない彼女のことを想った。

（お前も先を見るよ）

いつまでも逝ってしまった者に囚われるな。

隼人から見れば　　朔良も充分、普段の日常を取り戻せていない一人だった。

車がケイの元まで着くと、ケイは急いで後部座席を開けた。

「ありがとう」

そう言つて公園に再び入る。隼人も車を降りそれに続いた。

ケイは朔良の鞆を持ち、ゆっくり滑り台に近づく。しかしその前
にあるベンチのところまで止まって、鞆をベンチに置いた。

「鞆、ここに置いとくから。あんまり無茶したらダメだよ」

まるで子供を諭すような口振りだった。

「気をつけて」

そう言つとケイはその場から離れる。

少し後ろで見えていた自分の前をも通りすぎて行く。一度もケイは
振り返らなかつた。

だから隼人は、変わりに自分がしばらく滑り台の奥にいるだろう
彼女を見ていた。しかしケイを信じて、やがて自分も公園を出た。

また泣きそうになる。公園の外でケイが待っていて、隼人を見て
口を開いた。

「泣き虫」

隼人は乱暴に腕で目をこする。

「うるせえよ」

それだけ返して運転席に戻る。ケイも助手席に乗り込んだ。

「本当に良かったのか？」

エンジンを掛けながら呟くように訊いた。

「うん。彼女の行き先は分かつてるし…このまま無理矢理拘束して
も、榊原さんのためにはならないよ」

ケイはシートベルトをし直す。それをちらりと確認して隼人はゆ
っくり発進させた。

「それに…」

前方を見つめながらケイが続けた。

「思う通りにやればいいって、隼人が言つたんだよ」

そうだ。自分がケイに言つた台詞だった。後のフォローは自分が
するから、と。

だけど朔良は今まで会つたどの人とも反応が違つていた。ケイの
力のことを話しても、大体は信じない人が多い。信じて、好奇や

奇異な目で見られたり、畏怖の念を持たれるだけだ。悪いときには攻撃される。言葉だけで済まない時も過去にはあった。何も悪いことなんてしてないのに。

朔良はだけどあっさり信じた。

「力のこと、怖がらなかつたな、朔良」

しばらく走ったあと信号で止まると、ぼそりと隼人が呟いた。

「怯えてたよ。ううん…彼女はずっと……最初から怯えてる。本音がばれることを」

窓の外を眺めながらケイが応えた。だから表情は見えなかつた。

助けたいと思うのに、彼女はそれを望んでいない。それがとてもどかしく感じた。

* * *

冬の夜空は澄みきっている。天気が良い今夜はとても星が綺麗だった。

滑り台の隙間から見える夜空を朔良はじつと見ていた。

何度も無理をしすぎたせいで、傷口が開いている。幸い他は無事だった。いや、背中と左足首が痛い。骨折まではしていないだろうが、足首は捻挫をしていそうだ。

痛み止は効き目がなくなり、頭痛を引き起こすほどの疼きが朔良を襲って立てなかつた。

しかし立ち上がれない理由が他にもあった。そして痛みの方も…傷よりも心のそれがより強かつた。

物心ついたときから、朔良は泣きそうになったとき、いつも上を向く。だから今もそうしていたのだ。

隼人の叫び声とケイの言葉はすべて耳に…それから心にまで届いていた。二人の気配が消えても、しばらく動くことが出来ない程それは響いた。

(ごめんなさい…)

謝罪の言葉だけで、いつぱいに埋め尽くされる。

(だけどこれだけは…)

独りで目的を遂げることが朔良には重要だった。あのまま車にいたら、二人は絶対に着いてくると言っただろう。

それに耐えられなかった、ということもあつた。あれ以上ケイの話聞くことが。

彼の言う言葉はすべてが胸に突き刺さって……涙を堪えることが不可能になりそうだった。

どれくらいそうしていただろうか…。

朔良は盗聴器を見た。正確には本来の仕様である時刻を確認したのだったが。犬だか熊だか分からないキャラクターが中央にいた。しかし針は正確に刻んでいる。それは確認済みだ。

(もうこんな時間…)

時計は二十一時を大幅に過ぎたことを示した。どちらかといえば二十二時に近い。

あまり遅くなるわけにはいかない。……いやもう十分に遅い。

一人の男の家に訪れる時間では無いことは分かっていた。

(行かなきゃ!)

しかし朔良は何か気持ち奮い起たせて、滑り台から出た。

バッグがぼつんとベンチに置いてある。その中から、三吉から預かった救急セットを取り出した。

滑り台まで戻り止血をしようとしたがやり方が分からない。とりあえず包帯はすでに血に染まっていたから、それを外した。ガーゼのようなもので傷口の上を覆う。そして圧迫させるように押し付け、強く新しい包帯を巻いた。

「うっ」

痛みで呻き声が漏れる。汗が尋常ではないくらい噴き出していた。息も荒くなる。

そして朔良は痛み止の薬を取り出した。どこまで効くのかは分からない。公園の蛇口まで行き薬を呑んだ。本当は眠くなるから呑み

たくないのだが、仕方がない。

(よし！)

気合いを入れて朔良は歩き出した。歩き出して分かったことがあった。この公園は貴尚の言った住所の近くだったのだ。

まさかそこまでケイに分かるとでも言うのだろうか。

彼は勘が鋭く、靈感がある。朔良の知っていることといえば、それだけだった。自分はあまりその手のことに詳しくない。

(志保の声が聴こえるって言ってたな…)

そして自分と志保のことが分かると。……どういう意味だろうか。

(つまり志保が語ったってということ？)

自分と志保の秘密を？

(どうして？志保……)

自分の背後に志保がいるのかも知れない。朔良には振り向いても何も見えないが、そう思うと落ち着かないでいた。

どうして志保が……？

もしかしたらみんなが哀しんでいることに怒っているのだろうか。自分が本当に泣かないでいるのか、見守っているのだろうか。

どちらにしても、自分の側にいるなら成仏できずにいるのではないか。朔良は知識が無い頭で、それが一番気にかかったのだ。

志保の想いが分からない。今まではあんなにも分かり合っていたのに。志保が亡くなってしまっただけから、自分が唯一の理解者だと思っていた。

寂しくなった。結局、自分は独りなのか…。

物心ついた頃から思っていたこと。それが普通とはズレていた、と気づいた時よりも今は孤独を感じた。

だけど生前志保が自分に語ったことに、嘘はないはずだ。

朔良は歩を進めるごとに顔を歪めた。今回は、あまり痛み止が効かない気がする。

ゆっくり一歩づつ進んで、ようやく朔良は記憶に留めてあった住

所の前に辿り着いた。

貴尚の家はなかなか大きな一軒家だった。やはり志保のマンションとは、お世辞にも近いとは言えない。もしかしたら家族がいるかもしれない。朔良は少しほっとした。

それから、家でする仕事とは何だろうと考えながら、インターホンを鳴らした。

「はい」

出たのは貴尚だった。緊張した声で朔良は応えた。

「あ、朔良です」

「ちよつと待ってね」

しばらくすると玄関の鍵を開けているような音がして、ドアが開いた。

貴尚が現れて、つい朔良は睨み付けた。いつものように。

「やあ久しぶり」

まったく動じずに貴尚は笑った。

* * *

貴尚は朔良をダイニングに上げると、紅茶を出してきた。とてもではないが、飲む気にはなれない。

そして何と貴尚は一人でこの家に住んでいることを聞き、あんぐりと朔良は口を開けた。内装は豪華で、いかにもお金持ちの家という風だったからだ。

「仕事中だつて聞きましたけど」

何の仕事をしているのか気になった。高そうな長いソファに、ダウンコートも脱がずに居心地悪そうに朔良は座る。長居をするつもりは無かった。

「いや、今一段落ついたところだよ」

貴尚は相変わらず優しい笑顔を向けた。白いシャツにジーンズという、いつもスーツの彼には意外な服装だった。確かに家でスーツ

を着ていたらその方が驚くが。

「嬉しいな。朔良ちゃんから連絡くれるとは思わなかったから」

「……………」

朔良は俯いていた。どう切り出そうか迷う。

「話して何かな？」

貴尚は何も言わない朔良に自分から促した。意を決して朔良は顔を上げる。

「すべて…思い出したんです。松野さん」

貴尚の表情はまったく変わらなかった。それを見届けると決定的な言葉を言った。

「どうして、志保を殺したんですか？」

この言葉にも、貴尚は一瞬ピクリと眉をひそめただけだった。それさえも芝居のように見える。

「何を言ってるの？朔良ちゃん」

「あの日…最後に会ったのは松野さんです」

「ああ。そうだね」

これには、あっさりと貴尚は頷いた。

「でもそれだけで僕が殺した、とは言わないよね？」

「あの日の次の朝、私は自分の記憶が無くなってました。まずそれを、かなり不審に思いました。言うほどは飲んでいませんでしたから」

朔良はまるで盗聴器の向こう側に説明するように、順序だてて話した。

「しかもその忘れ方は重要な部分から消えていました。ただの物忘れじゃないと確信したんです」

貴尚は何も言わずに聞いていた。表情も柔らかい笑顔のままだった。これが消えるときが恐い、と朔良は思った。

「松野さん、二次会で私に何を飲ませたんですか？」

「何のことかな？」

「志保が抜けて、私がカウンターからトイレに行った時です」

あの時一瞬だが貴尚は一人になった。

「あの後、私がカクテルを飲むと違和感を感じました。異物が入れられてあつたんです。それを入れるチャンスがあつたのは松野さんだけです」

「勘違いじゃない？」

一瞬高尚の眼光が光つたように見えた。しかし眼鏡を押し上げながら、あくまでもシラを切っている。段々と朔良は苛立ちを覚えてきた。

「そんなこと……あるわけないじゃない」

声が低くなつたのが自分でも分かつた。

「貴方はこれまでも同じことをした。私が記憶がなくなるのは決まつて貴方と会つた次の日なんですよ」

そうなのだ。そしてそれは志保と二人であの会話をした日に限られていた。

貴尚は何も言わず、向かいの一人用のソファから朔良の右隣に移つてきた。警戒心から朔良は左に寄る。

「だからさ、たまたまじゃない？」

左肘を背もたれにつき足を組みながら、相変わらず貴尚は微笑んでいる。

確かに状況証拠しか朔良には無かつた。だから今まで言えなかつたのだ。朔良はぐつと言葉につまつた。言うことをもつとちゃんと考えてくれば良かった。

「朔良ちゃん。そんなことよりせっかく会つたんだから、もっと楽しい話をしようよ」

そう言うつと貴尚は更に朔良に近づいた。それに更に左側に寄りながら、怒りを露にする。

「はぐらかさないで！ だったらあの日、松野さんは志保の家が近くだと言つた！ でもここは全然違う場所じゃない！」

最寄り駅さえ何個も離れている。

「どついついことですか！？」

「そんなこと言った？」

「言いました！」

「あれはそうだなあ…君にたまたま会ったから、何となくだよ。その場の流れで言っちゃうこと、君にもあるだろう？」

「そんなことでは誤魔化されません！貴方は最初から志保のマンシヨンを知っていた！」

朔良が叫ぶごとにその傷口が疼いた。けど気づかれなくなかったから、朔良も気づかない振りをした。

「朔良ちゃん」

貴尚が更になじり寄る。完璧な笑顔というポーカーフフェイスで。

朔良は離れられなかった。すでにソファの端にその身を置いていたのだ。

「キスしてくれたら教えてあげる」

「っ！」

その言葉に勢いよく朔良は立ち上がった。脇腹だけでなく、左足にも痛みが走ったが怒り心頭に発して叫ぶ。

「そんなことしなくても、教えてもらいます！」

ふふつと貴尚は笑った。朔良の反応に本当に可笑しいようだった。（完全に馬鹿にされてる！）

朔良は握り拳を作った。掴み所のない貴尚に苛立つ。

しかし、自分も同じことをして崇史を怒らせたのだ。立場が逆になつていた。こんなにムカつくことだったのか、と朔良は反省した。（だけど…この人には悪意がある）

確実に朔良の逆鱗に触れるポイントを突いてくる。

貴尚は体勢を変えずに、冷やかな笑みを浮かべて言った。

「そんなにうまく具合に忘れさせる物なんてあると思う？」

「私、聞いたんです。以前、製薬会社の研究開発されてたんですってね。そんな薬を造るのも簡単だったんじゃないですか？」

そう、朔良だつてこの一ヶ月間で調べたこともあったのだ。と言つても、これは *vissta* のマスターから聞いた話だった。

「ふうん。そんなこと、誰から聞いたの？」

貴尚の顔色が僅かに変わった。口元の笑みはそのままに、眼鏡の奥の瞳が厳しく光る。

そしてゆっくり立ち上がる。朔良は思わず後退った。

「それと僕の番号も誰から聞いたのかな？」

少しずつ近づいてくる。怖い、と朔良は思った。崇史が怒りをぶつけてきた時とは、違った種類の恐怖だった。

「……………知って、どうするんですか？」

後退しながら、ちらりと後ろを見る。そこには窓があった。

最悪ここから逃げよう。朔良が逃走経路を確保したその一瞬の隙について、貴尚が一気に詰め寄ってきた。

「！」

朔良の右手首を左手で掴み、右手は朔良の腰にまわされた。

（しまった！）

朔良の顔が強張った。

「お仕置き、なんてどう？」

身をよじって逃れようとするも、貴尚はそれを許さない。更にきつく抱き締められた。

「離してください」

そう言いながら、落ち着けと朔良は自分自身に念じる。動揺を見せるのは悔しかった。だから真っ直ぐ貴尚を睨み付けた。

「教えてくれたら離してあげるよ、朔良ちゃん」

貴尚は目を細めて冷笑している。交換条件の相手が、先ほどから間違いなくおかしい。

そしてマスターと貴尚と、どちらが強いか少し考えた。

（そう言うことじゃないわ）

分からなかった。だから朔良も条件を上乗せした。

「志保のこと、教えてくれたら教えてあげます」

ニヤリと朔良も笑って見せる。この状況は明らかに朔良が不利だったが、虚勢を張った。

すると面白そうに声をだして貴尚は笑った。

「やっぱり飽きないね朔良ちゃんは」

笑いながら左手で朔良の頬に触れた。ぞくりと背筋が総毛立つ。

そして頬から顎に、その手は移った。

「その話はキスしてからだよ」

貴尚の顔が近づいてきた。朔良は不敵な笑みを見せながら、自由になった右手をポケットに忍ばせた。

そして素早く貴尚の顔の前にナイフを突きつける。

「私だつて何も無しでこんなところ来ません」

わざとにつこり笑って朔良は言った。内心は気が気でなかったのだが。

「へえ」

ナイフを見ても貴尚は驚かなかった。それどころか、やはり嬉しそうに笑う。

ナイフを少しずつ前に出すと、ギリギリのところまで貴尚は朔良を離れた。

「仕方がないね。平行線のようだ…」

貴尚はわざとらしく両手を軽く広げた。その動作一つ一つが朔良には癪かんに障った。

しかし確かに話は平行線で進まない。何より貴尚には話す気がさ
らさら無いようだ。

(どつしたら…)

朔良は *visita* のマスターの話の思い出していた。

「あの男には近づかない方が良い」
志保が死去して7日目の夜のことだ。マスターが唐突にそう言った。

朔良は記憶の手がかりを探してMIYOSHIやv i s t aに通いつめていたのだ。その事に必死で、お通夜にもお葬式にも行かなかった。

それよりもつと志保の真実に近づくことの方が大切だとこの時は思っていた。一日だけ…あの雪の日だけは気持ちの整理が必要だったが。

しかしこのv i s t aのマスターは無口だった。三吉ほど客と仲良くならない為、何度か来ているが朔良は名前も知らない。だがマスターは常連客の顔はちゃんと覚えていた。

前に酔いすぎの状態で来てしまい、なかなか注文出来なかった時があったのだ。それなのにいつも頼むカクテルが出てきたことがあった。無言で……。

その時は志保と二人で来た時で二人してマスターに質悪く絡んだ覚えがある。消したい記憶だ。

マスターはなかなか綺麗な顔立ちをしていたが、クールすぎて近寄り難い雰囲気醸し出していた。生活感がまったく見えない。年齢も不詳だった。

しかし貴尚とは知り合いのようだった。何度か二人で話しているところを朔良は見かけていたのだ。

だからマスターに貴尚のことをそれとなく聞き出そうとしたのだが、マスターは口が堅かった。

そして一週間通いつめ、やっとマスターから喋りかけてくれたのだ。それが先ほどの言葉だ。その際こちらを見ないで言われた為、一瞬朔良は自分に言われたものだとは分からなかった。

その内容に後れ馳せながら返答する。

「どういう意味ですか？」

「別に。そのままの意味だ」

もくもくと洗ったグラスを拭きながら答えている。朔良は眉をひそめた。

「松野さんと、どういう知り合いなんですか？」

その日はマスターが一人で店を開けていて、それで充分と思える客の少なさだった。聞かれて困る者はいなかった。

「関わらない方が良い」

マスターはそれしか言わない。

「それではよく分からないので、余計に関わってしまいます」

朔良がきっぱり言うと、マスターは思わずという感じで朔良の方を見た。

貴尚の情報はこれまですべて空振りに終わっていた。初めて得られる機会なのだ。意地でも聞くという姿勢を感じたのか、マスターはため息をついた。何であれ、マスターが感情を表すのは凄く珍しかった。

「松野はただの知り合いだ。……だが危険なやつだ」

「危険？」

「そうだ。だからだ」

それだけ言うと綺麗に拭かれたグラスを棚に戻すため、朔良から離れた。

（それで終わり？）

朔良は心の中で突っ込んだ。マスターの言う危険…とはどういう意味だろうか。男として危険なのか、それとも人として？

「はい」

朔良は学校の授業でしていたように手を挙げマスターを呼び寄せた。少し酔いが回っていたのだ。

マスターは眉をピクリと上げたが、それに従って朔良の前に戻ってくれた。

「もし私とその忠告を破って関わったらどうなりますか？」

先生のように指してはくれなかったが、構わず朔良は生徒のように聞き方を変えて質問する。正直なところ貴尚の危険な感じは承知していたが、何とか話を続けたかったのだ。

マスターはどこか侮蔑の目で見ていたが教えてくれた。

「君は狂わせられるだろう」

挙げたままだった腕が力なく下がった。

「やつは狂気に満ちている」

(狂気………)

普段無口なマスターから出た言葉だからとても嘘のものとは思えない。

「それってつまり……」

「忠告はしたからな」

マスターはそれだけ言うのと今度こそは、という風に仕事に戻った。

「つまり…薬のことですか？」

しかしポツリと溢した朔良の言葉に、マスターは顔を上げた。

「気づいていたのか…」

どこか呆然とマスターは呟く。

朔良が異物を混入されるのは決まって *vis ta* だった。マスタ

ーはもしかしたら、何か気づいていたのかも知れない。最初はこっ

そりマスターを疑ったのだが、それは墓場まで持つて行くでしょう。

「だったら尚更分かるだろう？」

「だけど…だからこそ、松野さんのこと教えて欲しいんです」

「分かった」

マスターは聞こえるか聞こえないかの小さな声で、ため息混じりに呟く。

「松野は薬の研究をしていた。今もしているかは知らない」

そして淡々と語りだした。

(研究………?)

朔良の顔色が険しいものになる。

「薬物に密接に関わっていると知ってるからこそ分かったことだが…… たまに君がいるときに不穏な動きを見せていた。だが実際には混入する瞬間は見えていない」

「見てない？」

独り言のように朔良は呟いた。怪訝な気持ちで口についたらしい。「前後の動きから推察したんだ。やつは頭が良い…その尻尾はなかなか見せないだろう」

そこで一旦言葉を切った。別のカウンターに座っている客から注文が入り、それに応じに行ったのだ。

カクテルを飲みながらそれを待つ。マスターさえも見ていないのであれば、警察に言っても軽くあしらわれるだけだろう。頼杖をつくと、思わず深いため息が出た。前途多難だ。

「諦める気になったか？」

その様子を見て、いつの間にか戻ってきたマスターが素っ気なく言った。

「いいえ、と力強く首を横に振る。

「どうして薬の研究してたって知ってるんですか？」

朔良のその質問に、マスターは珍しく戸惑いの表情を見せた。言いたくない、と朔良でも分かる反応だった。

根気強くじつとマスターの答えを待っていると、やがて彼は教えてくれた。

「かつて俺も同じ製薬会社の社員だった。あいつが開発で俺は営業だ」

「ええっ!？」

朔良の驚愕の声が店中に響き渡った。思いきりマスターに睨み付けられ、すみませんと謝った。

だが、動悸は速いままだった。何よりマスターが営業をしていたのが一番の驚きだ。

静かに怒ったマスターは、また朔良から離れようとする。

「待ってください!本当にすみませんでした!最後に一つだけっ!」

焦って朔良はそれを制止した。この時は本当に必死だったのだ。いつもの自分では考えられないくらい、何度も食い下る。

マスターも最後なら、と思ったのか振り向いてくれた。

「松野さんの弱点って知りませんか？」

いつも掴みどころがなくて、それを見抜こうとしてもさりげなく流される。

なかなか貴尚は、本音の感情を現すようなことが無い。何でもマスターに聞いてしまつて申し訳なく思うが、他に貴尚のプライベートルを知つてる者がいないのだ。

立ち上がる勢いですがる朔良に、マスターはいつもの無表情に戻つて答える。

「そんなものは無い。………ひとつだけ上げるとしたら、今なら君だろう」

「え？」

マスターはそれだけ言うと、もう何も教えてくれなかった。それはその日だけでなく、その後もずっと。

* * *

マスターの言葉を朔良はナイフを片手に思い出していた。

だけど彼は沙織里伝で、貴尚の連絡先を覚えてくれたのだ。あれからいくら聞いても教えてくれなかったのに。ニュースでこの件を知つて、何か気づいたのかもしれない。

それとただ、沙織里の推しが自分のそれより強かったのか…。なんにしても落ち着いたら感謝しに行こう、と朔良は思った。

そして…。

(弱点は私…)

どういう意味か未だに分かっていない。まさか色気で勝負しろ、ということでも無いだろう。

(却下！)

だからそれを利用する案は消えた。それから今までの情報をまとめた。

薬の研究……。家でやる仕事。誰にも言わない連絡先。そして、今でも使用されてる薬。

(もしかしてこの家に証拠が……………?)

賭けてみる価値は大いに有る。

「何を考えるの？朔良ちゃん」

まったく喋らなくなった朔良に、わざとらしく首を傾げた。朔良はナイフを盾代わりに握り締める。

「何でもありません。とりあえず落ち着くために座りませんか？」

どちらかと言えば、落ち着かなければならないのは自分だけだった。貴尚は気づいていただろうと思えたが、頷いて言った。

「いいよ。何か飲む？お酒も置いてるけど」

「結構です！」

即答して朔良は座る。貴尚もひとつ息を吐くと座ろうとした。

「そっちに座ってください！」

そう、朔良の隣に。思わず朔良はナイフを振って、向かいのソファを示した。

「残念だね」

言いながらそのソファに優雅に深く腰を掛ける。それを見届けて朔良はやっと落ち着くことが出来た。

「何も話す気がないのは解りました」

「そんなこともないよ」

「え？」

貴尚の返答に思わず聞き入った。駆け引きをしようと用意していた言葉を呑み込む。

「じゃあ、賭けをしようか」

足を組み直して悠然と構えながら貴尚が言い出した。

「その紅茶を飲んで、何か混入されてたら君の勝ち。何でも話すよ」「な……………」

朔良は目を見開いた。貴尚は自分が警戒して口にしないことをお見通しなのだ。その上でとんでもないことを提案した。

「それ、私が不利だと思っただけですけど」

睨み付けたまま非難する。本当に目の前にいる男の考えていることが分からない。貴尚は見せつけるように自分の分の紅茶を飲んだ。「でも僕は否定をしてるんだよ?……じゃあこうしよう。混入されていても無くても君がその紅茶を飲んだら話してあげる」

そこで貴尚はにっこりと笑った。まるで名案とでも言いたげだ。

(結局なにも変わってないじゃん!)

朔良はまたしても怒りを覚えた。そして迷いながら紅茶を見つめる。

朔良がここへ来ると行つてからずいぶんと時間が経っている。予め準備することは造作もないことだっただろう。何より貴尚のペースで運んでいることに危惧を感じた。

しかしキスよりはまだ許せる気がしてくる。

(いやいや……最悪もつとヒドイことになるって……)

即座に自分自身の思考を打ち消す。しかし飲まないと話が進まない気も確かにするのだ。

(よし!)

何度目かになる決心をして、朔良はカップの取っ手を掴んだ。ぐいっと一気に飲みほす。

「うっ!」

そして朔良から呻き声が漏れた。

「どうしたの?朔良ちゃん」

一連の流れをやはり楽しそうに眺めながら貴尚は訊く。朔良はわざと音を立ててカップをソーサーに戻した。

「……………入れたの?」

ぼそりとあまりに小さく呟いた為、貴尚には聞こえなかったようだ。

「ん?」

聞き返されて今度ははつきりと朔良は言葉を紡いだ。

「砂糖、何杯入れたのよ？」

貴尚は左手で真ん中の三本の指を立てた。

「3杯」

「甘いですよ！」

紅茶はぬるくなつて底の方に砂糖が沈殿しており、さらにしつこい甘さが口に広がる。だから涙ながらに訴えた。朔良はコーヒーもブラックならば、紅茶も砂糖は要らない派だったのに……。

「僕の朔良ちゃんへの想いだよ」

歯の浮くような台詞をいつもさりと貴尚は言う。それを聞く度、自分が引いていることに気づいて無いのだろうか。良い飲みっぷりだね、などと言っている貴尚を無視して自分の状態を確認した。

(なにも……ない………?)

特に変化は無かった。

「僕のこと教えたのって *visita* のマスターかな？」

朔良がほっと一息ついた瞬間を狙って、貴尚は的確にズバリと言った。つい驚いて貴尚の顔を見る。油断、していた。

(しまった……)

それが肯定であることが、朔良の反応で気づかれてしまったのだ。「やっぱりね。彼以外は思いつかない」

貴尚はそこで初めて朔良から視線を外した。

「おかしいと思ったんだ。今は使っていない方の携帯が鳴ったから。彼にはがっかりだよ」

干渉しないタイプだと思ったのに……と言いながら立ち上がった。ビクリと朔良は身構える。

「あのっ！私が無理矢理聞いたんです！何度も！しつこく！」

焦って何とか取り繕った。それに対して貴尚は改めて朔良に視線を戻し、口元に笑みを作って言う。

「心配しなくてもお仕置きなんて冗談だよ」

貴尚はそう言いながら朔良に近づいてきた。嘘だ、と朔良は思っ

た。

その眼鏡の奥の眼が、笑ってなかったから。

朔良は恐怖で凍りつく。ナイフだけを抛り所に握りしめた。

しかし何の障害でも無い、とても言うように、貴尚の手は朔良の右手首を掴んでナイフごと引っ張った。

「あつ！」

強制的に立たされる。つい声が漏れてしまつてそれが朔良は悔しかった。

弱い部分は見せたくない。つけ入る隙を与えてしまうから。そう思い、振り払おうとしたが貴尚の力は強くそれは叶わなかった。

「おいで。約束は守るよ」

薄く笑つて貴尚が促した。

* * *

「朔良……」

MIYOSHIIの中。

音だけが伝える情報に一樹は何度目かになる眩きを漏らした。

心配で何度も胸が押し潰されそうになる。途中で立っていられなくなつて、一樹は少し離れた場所で座り込んでいた。

それでも音声は、充分に容赦なく耳に飛び込んでくる大きさだった。うずくまり両腕で顔を覆う。でも耳を塞ぐことは出来なかった。

朔良が車を飛び降りたときは心臓が止まるかと思つた。それから漏れる彼女の息遣いと苦しそうな息から、まったくの無事では無いことは分かった。

(無茶なことはするなと……あれほど言つたのに……)

しかし彼女は今また無謀なことをした。

貴尚が一筋縄ではいかない男なのは分かった。そして気障な奴だというのも。頭は切れるかも知れないが絶対に馬鹿だ。私情込みで一樹はそう思つた。

そして朔良はそんな男の挑戦を受けたのだ。

あれから二度ほど朔良の携帯に掛けてみた。車の中とそこから飛び降りた後だ。いずれも、電波が届かないという無機質なアナウンスが流れたただけだった。電源を切っているのだ。

(どうして…)

何の為に充電をしたんだと怒鳴りに行きたい気持ちだった。

隼人にも掛けてみたが、こちらはコール音のみで出てくれない。

聞きたいことが山ほどあるのに。

(隼人は殴ってやる…)

あまり穏やかではないことを考えているときに上から声を掛けられた。

「いい加減にしろよ、一樹。ここからが正念場だろ」

崇史だった。崇史は、長い付き合いで気づいているのかも知れない。自分の気持ちに。

「ああ」

ぼそりと一樹は呟くだけだった。崇史も辛はずなのに自分を氣遣ってきている。

こういうところは普段の崇史だ。本来は、こういうやつなのだ。

「俺だつて怒ってるんだ、榊原に。嘘をつかれたんだからな」

腰に手をあてながら盗聴器のスピーカーの方を見ながらぼやいた。確かに、朔良はカフェで会うと言って出ていった。おかしいと氣づくべきだった。会う時間をきつちり言わなかったから。

作戦の時間を言っても、それなら大丈夫としか朔良は言わなかったのだ。

(作戦…)

失敗だった。いくら朔良が無事に出れていても、皆が捕まるならそれは失敗と言える。

人数が足りなかった。一樹が思ったより来てなかったのだ。それを隼人は電話で打ち合わせしたと言わなかった。

(やっぱり殴る！)

皆無事だろうか。怪我はしてないだろうか。再び一樹は落ち込んだ。

「おい！榊原が頑張ってたぞ。いちいちため息つくな」
鬱陶しいと崇史は吐き捨てた。

（そうだな…）

崇史の言う通りだった。ここでじたばたしても始まらない。一樹は疲労感を覚えた体を無理矢理立ち上がる。

せめてしっかりと聞こえろ。そう思って崇史と共にスピーカーの元へ向かった。

* * *

（つたく…）

立ち上がった一樹を、半ば呆れながら崇史は見ていた。

一樹の態度は分かり易すぎる。おそらく自分だけではないだろう、気づいているのは。三吉なら分かっていそうだ。結花や賢二も……

…いや、ここにいる者なら、鋭い感覚があれば気づいていると思えた。

（でも榊原は難しいと思う）

崇史にはもう、朔良に対して猜疑心は無かった。

彼女は自分の計り知れないところで動いているのだろう……それは分かった。そして犯人を逮捕する、なんてことまで言い出す。震えながら。

このただ一人の女でしかない彼女に、どこからそんな力が湧き上がるのだろうか。崇史は不思議で仕方なかった。

（志保のため…なんだな）

自分とは違うやり方で志保の為に動いている、確かに朔良はそう言った。あの時は意味が分からなかった。今もすべては分からない。

（でもあの男…）

何度か見かけただけの、松野貴尚の顔がぼんやりと思ひ浮かぶ。

接点はまったく無かった。

志保と四六時中一緒にいたわけではないのだ。彼女が飲みに行くときも自由に行かせた。縛ることは彼女の魅力を半減させると思っただからだ。実際は、一秒だって離したくなかった。やっと結婚して落ち着ける、と思った矢先だったのに。

自分が警察に指定した期限が、もうすぐ終わりに近づいていた。しかしそのことはすでに頭の隅に追いやられていた。

明らかに朔良の方がゴールに近い。

そして崇史は、貴尚の声を憎悪の渦の中で聞いていた。

(殺してやる…)

たとえ朔良が失敗しても貴尚の居場所さえ分かれば問題ない。もう朔良は無理せず帰ってきてきても良いのだ。貴尚の情報を持って。

自分が殺しに行くから。

この時崇史は、かつて朔良が不安に駆られた冷笑をその顔に浮かべていた。

真実

朔良は貴尚に促され二階へと続く階段を登った。足首の捻挫を気取られないよう、しっかりと踏みしめた。

そして警戒心とナイフを手にしたまま、貴尚について行く。しかし貴尚にはまるでそれらが目に入らないかのように、気にせず背中を向けていた。

無用心なのか、それとも朔良に刺す気など到底ないことを見抜いているのだろうか。恐らく後者だ。

しかし大きな家だな、と改めて朔良は思った。装飾品などはなくシンプルな装いだがいくつも部屋がある。

(何でこんなところに一人で住んでるんだろう?)

先ほどのダイニングと比べると廊下や階段は異様なくらいに暗く感じた。もちろん電球は点いているし、通常の家だってそうなのだろうが、それを踏まえた上でそう感じたのだ。

空気が暗いのもかもしれない。朔良はケイなら何か分かるのかも、と漠然と思った。

こんな広い家に一人にいるから彼はあんなに曲がった人間になっただかもしれない。しかしだからと言って、同情するつもりはまったくない。

朔良は前に意識を向き直す。すると丁度貴尚がひとつの部屋のドアを開けた。

そこは一番奥の角部屋だった。促されて部屋の中を見た朔良は絶句した。

「ここ………」

そこは洋間でたくさんの棚がひしめきあっていた。

一見書斎にも見えたが、一番右の奥の机には怪しげなものが置いてあった。それはピーカーや試験管という理科室で見たことのある物から、まったく何に使うのか予想すら出来ない者までだった。

「ここで実験してるんだよ。君の言っていた会社はとっくに辞めて
いるんだ」

そこで貴尚は驚いている朔良の耳元でそつと囁いた。

「朔良ちゃんの言った通りだよ」

薬がこの家にあるだろうと思っただが、まさか研究からここで行っ
ているとは……予想外だった。

朔良は貴尚の言葉にひと睨みして中に入る。そして遠慮なく物色
した。

入って気づいたが手前側には最新のモデルだと思われるパソコン
が一台置いてあった。棚の中にはいろいろな固形の薬や液体の薬品
があり、何やらアルファベットや数字などで分類されている。

とりあえず種類が豊富なことだけは解った。

「で、志保には何を飲ませたの？」

憎しみを込めて朔良は訊いた。自分には記憶を失わせるものだっ
た。しかしそれではあのようなやり方は出来ないはずだ。

「とりあえず座りなよ。落ち着くためにね」

貴尚はパソコン用の椅子を朔良のために引いた。黒い本革で施
されているそれは、背もたれが頭まで支えてくれる立派な物だった。

（また高そうだな…）

腹立たしく思いながらも朔良は腰かけた。先ほど下で自分が言っ
た言葉をわざわざ引用しなくても良いではないか。

朔良には怒りのポイントがたくさんあったようだ。

（当たり前だ！殺人犯なんだから）

忘れてはならない事実だ。まだ本人はそこを認めていない。聞き
出さなければならなかった。

貴尚は研究材料が置いてある机用の椅子に座り足を組んだ。

「朔良ちゃん、ところで四次会のことはどこまで覚えるの？」

「え？」

貴尚は眼鏡を賢そうに中指で押し上げて質問返しをしてきた。し
かし朔良にはその意図が分からない。

「全部……思い出したはず……」

つい考え込みながらそれが口に出ていた。

四次会は三人で適当な、いや多少朔良の癩に障る会話をした。一時間も無かつたはずだ。

それから解散して朔良もタクシーで帰った…。

(その間にまだ何か…?)

くらりとする頭を朔良は空いている右手で押さえた。ひじ掛けに体重を預けると自然と眉にしわが寄る。

「だったら朔良ちゃん、どうして泊まるはずだった志保ちゃんの家から帰ったの？」

「なんでそれを！」

朔良ははっとした。その日泊まる予定だったことは貴尚の前では話していないはず。

しかし何故だろう？朔良は確かに気になった。泊まる予定にしていたことは、今日思い出した事実の中にあつた。初めて突きつけられた矛盾。

(この人が現れたから泊まる気が失せた?)

いや、そんな感情は無かつたはずだ。

(もつと別の……はつきりした理由が…)

考えあぐねている間に貴尚が言葉を発した。

「それはね、朔良ちゃんが僕を付けてきたからだよ」

何てことも無いように貴尚は穏やかに話す。朔良はただ目を瞠るだけだった。

「僕を警戒していた朔良ちゃんは、タクシーでこの家までついて来たんだ。だからここへは来たことがあるんだよ」

そこで貴尚は立ち上がることなく、体だけを机の方に向けて近くにあつた棚から一つの薬を出した。

「そのとき…全部思い出したらおいでって言って、これを飲ませたんだ」

朔良は右手の甲で口元を覆った。

あの日、二錠飲んだということになる。だから今回はいつもより思いつすのに時間が掛かったのだろうか。

「でも電話をくれた時は僕が住所を話しても何の反応もしなかった。まだすべてを思いつしたわけじゃないって分かったんだ」

貴尚はふふつと笑った。

「だから回りくどいやり方をしちゃってごめんね」

朔良は怒りで全身が震えていた。

まだその話を聞いても思いつせない。しかしそれは真実かもしれないと思つた。すべてに納得がいくから。矛盾が消化されていったのだ。

「どうして？なんでそんなに私の記憶を弄もてあそぶのよ！！」

耐えられず立ち上がつて朔良は叫んだ。がしゃつとチェアの音が鳴つたがその声にかき消される。

ナイフを握り締めている左手が汗ばんできていた。

なぜ自分が標的にされなければならぬ？何をしたというのだ、この男に。とても赦せないし許せるものではない。

「最初に *vis*ta で君たちの話を聞いたのがきっかけだった」

「え？」

「君たち二人に興味を持つたきっかけだよ。君たちは *vis*ta で死について話していた。所々しか聞こえなかつたけどね。そこから調べて君たちのことをいろいろ知つた」

「調べた？」

まさか…と朔良は気づいたことがあつた。

一時期だが、後を付けられたり無言電話が頻繁にあつたことがある。

（ただのストーリーカーだと思つて放つていたら、無くなつたけど）

放つておく朔良も朔良だったが、無視が一番の対処方法だと知つていたのだ。実際にしばらくして、それらは無くなつた。今の今まで思いつさなかつたほどに。

「あのときのストーリーカー？」

朔良は思わず呟く。

「そうだね。全然朔良ちゃん怖がらないからつまらなかつたよ」
悪びれもせず貴尚は頷いた。どこまでも卑怯な男だ。朔良は睨み付けるその目に更に力を加えた。

貴尚の口振りでは志保の元にも同じ被害があつたということだ。

（知らなかつた）

悔しくて朔良は唇を噛み締めた。自分も確かに志保には言わなかつた。

（言つていれば！）

志保は怖かつただろうか。今頃襲う後悔はすべてが空虚に流れて行つた。

「それで君たちの仲を壊したくなつたんだ。朔良ちゃんに、死について会話をしたことを中心に記憶が消されるように改良を何度も重ねた」

貴尚は静かに立ち上がった。

「さつき君は製薬会社の開発をしていたから簡単に作れたんだろう、つて言つたけど……とんでもない」

貴尚は言いながら、いろいろな薬品の中から液体のものを一つを選んで棚から取り出した。

そして何かに移し変える音が少し聞こえた。朔良からはその背中しか見えない。

「苦労したんだよ。朔良ちゃんすぐに思い出しちゃうんだから」

「なんで……」

また頭がぐらりとした。貴尚の元に行き何をしているのか突き止めなければならぬ。しかし身体はいうことをきかず、立っていることしか選択肢がなかつた。

「なんでそんなことまでして……」

「ぬるいこと言ってるからさ。誓いとか同志だとか」

そこで一瞬貴尚が振り向いた。もう…その表情には笑みが消えていた。

「でも朔良ちゃんの場合は本当に気に入ったんだよ。反応が面白いし何よりめげないから」

しかしその口調にはあくまでも変化は無い。朔良には嫌な思考が彷彿と脳裏によぎっていた。

(何を考えてる?)

貴尚は言いながら再び背中を見せた。

「私は貴方のことがずっと許せなかった。疑惑を持った日から…今も!」

そしてこのままあの背中にナイフを突きつけたい衝動に駆られた。それを必死に抑える。

まだ肝心な志保のことを聞けていない。

そんな朔良の気持ちに気づいているから、貴尚は余裕を見せているのだろう。そのことも、朔良が歯ぎしりをする要因のひとつだった。

(この人にも……)

ふと、よぎりかけた気持ちに焦って内側でかぶりを振る。

(こんな気持ち持ったら負けだ)

この人にも同じ苦しみを味あわせてやる…なんて。

「うん知ってるよ。だから良いんだ」

そう言っただけで貴尚は何やら火を付けたようだった。そしてすぐに振り向いた。

「ねえ、愛と憎しみってどっちが強いと思う?」

言いながら朔良に近づいてくる。朔良は怖くなって震えた。先ほどから足が凍りついたように動かないのだ。こんな状況はまずい。

焦ってナイフを突きつける。

だけど貴尚はそれに物怖しせず、朔良の傍らまで来た。そして躊躇して動けずにいる朔良の耳元でそっと囁いたのだ。

「ここには他にも朔良ちゃんに試したい薬がいろいろあるんだよ。どれがいい?」

「!」

危険。

朔良の頭にシグナルが激しく鳴った。

Vistaのマスターが言っていた言葉が今更ながら思いださせられた。

関わらない方がいい。

君は狂わさせられるだろう。

条件反射で逃げようとしたが、それよりも早く貴尚は朔良の背中を強く押した。

それは衝撃に耐えられない程で思わずその場にひたまず跪く。

「志保ちゃんの最期を教えるから、まだ逃げないでね。朔良ちゃん」
言いながら貴尚は机の上に視線を移した。

それを追うところにはアロマの芳香器が置いてあった。その匂いを感じた時には遅く、朔良の体はみるみる内に自由が利かなくなってきた。

「な、に……………」

ねとりとまとまりつくような甘い匂い。

「効き目凄いあるね。もう麻痺しちゃった？この中に薬の成分が混ぜてあるんだよ」

(麻痺……………?)

まさにそんな感覚だった。四肢が痺れて力が入らない。自然と這いつくばることになってしまった。少ない自尊心が傷つけられた。

「な、んで……………」

しかし貴尚は自由に動いている。薬ではなくアロマのせいだと言うなら、貴尚は何故効かないのだろうか。

朔良の疑問を読み取ったのかすんなりとその答えを言った。

「君が来ると知ってね、いろいろ準備したんだよ朔良ちゃん。僕は中和剤を飲んだから平気なんだ」

言葉とは反比例して鮮やかな笑顔だった。

朔良は必死に顔を上げて貴尚を睨み付けた。それぐらいしか反抗が出来なかった。

貴尚は真つ向にそれを受け止めそして嘲笑った。

「君たちは死にたいと話していたよね。だから僕は手伝ってあげたんだよ」

「……ちがう……」

汗をかきながらも朔良は何とか声を絞り出した。

「何が違うの？自殺願望、あつたんでしょ」

「ち、がう……。それは……いま、じゃない」

そう、違うのだ。自殺願望はいつか死ぬときには……という話したはずだ。

貴尚が盗み聞きをしていたことは気づいていた。無論いつも後から気づくのだ。その時は気配を消すくせに、わざと朔良にだけ気づくように貴尚は足跡を残していた。

しかしそれを中途半端に聞いていたのか、わざと意味を履き違えたのか朔良には分からなかった。

この体が何とかならないか身悶えながらも、貴尚から視線は外さない。

貴尚はそんな朔良を面白いものを見るように観察していた。そして傍らに跪くと、ずっと握り締めていたナイフを取り上げる。

「無駄だよ。君はずっとここで生活するんだ。僕と一緒にね」

「！」

何てことを。朔良は怒り狂いながらも、更に体を動かしていた。足にはまだ力が入らないが腕は少し動かすことが可能だった。

「い、や、だ」

すっかり睨みながら迷いの無い言葉で言った。すると貴尚は、朔良の身体を軽々と抱き抱えあっさりと先ほどまで座っていたパソコンチェアへ投げ落とした。

「ぐっ……」

傷口に響いて痛みが走った。そして貴尚はたくさん有る中から一つの棚に向かうと、薬を一粒持ってきた。

「なかなか良い絵、なんだけどね。朔良ちゃんを常に麻痺させてお

くわけにもいかないから」

貴尚はそう言つと跪いて視線を合わし、カプセルを朔良に飲ませようとした。何の薬かは分からなかったがろくな物ではないのは確かだ。

朔良は必死で首を背ける。その時右手がコート越しに傷口を触った。

「！」

あまりに必死で気づかなかつたが傷口がいつの間にか開いていた。こんな時に…と一瞬絶望的な気分になる。

(でも…もしかしたら…)

しかし朔良は瞬時に深く考え込んだ。その間にも貴尚は朔良の顎を触つて、顔を貴尚の方に向けていた。

「もう一度…今度は失敗しないよ。今度は……すべてを忘れよう。それで僕とここで出逢いをやり直すんだ」

朔良はその言葉に驚愕した。一部ではなくすべての記憶を失くさせるつもりなのだ。あまりにふざけた話ではないか。人の気持ちを弄ぶような貴尚に怒りが頂点に達した。

(なんてこと！)

しかし構わず貴尚はカプセルを朔良の口元に持つてくる。朔良は意地でも口を開かないように、唇を噛み締める。

すると貴尚は朔良の鼻を摘まんで息が出来ないようにしてきた。

しばらく経つて苦しくなつても、朔良には首を動かすことすら出来ない。硬く両目を閉じて顔を歪ませる。通常なら四肢をばたつかせているところだろうが、薬でそれさえ許されなかった。

「はっ…！はっ！」

本能的に口を開いてしまった。死んでも離さないつもりでいたのに。貴尚はそんな様子を見ると、自分でカプセルを加えて朔良の唇に口移しで入れようとしてきた。

唇が触れた瞬間、おぞましさに全身の血の気が引く。

「くっ…」

朔良から苦しみの声が漏れた。その隙について貴尚の舌にあったカプセルは、朔良の喉の奥まで押し込まれた。

「あつ……」

気持ち的に舌を出し呑み込むことを免れようとする。するとそこまできて貴尚は油断したのか、普通にキスを楽しみだした。カプセルをわざと避けて舌を這うように動かす。

朔良は抵抗する術がなくなされるがままになっていた。

しかしその僅か下では間接的に拒絶するための行動をしていたのだ。必死で傷口を中心にその身を動かす。見えなくても血が滲んでいつているのが感触でわかった。

「うつ……」

気を失いそうな激痛が生じた。汗が滲む。

それでもカプセルを呑み込まないように気を付けながら傷口を刺激する。

（解ける！）

徐々に痛覚から麻痺が解けていく。それは朔良の狙い通りだった。解放された両腕を突き出して、貴尚の体を思いつきり押した。だがそれは思ったよりも弱く、貴尚にはびくともしない。自由になりきれてはなかったのだ。

しかし異変を感じたのだろう。貴尚はゆっくり朔良から離れた。

朔良はそれと同時に焦りながら薬を吐き出した。床に溶けかけたカプセルが虚しく落ちる。

そして袖で唇を拭った。　　気持ち悪い。

「まさか…動けるなんて…」

貴尚は啞然としていた。とても珍しい表情だ。

朔良はその隙をついて半身を起こす。痛みを堪えて、必死に机まで歩み寄るとアロマの火を消した。

振り向くと貴尚はすでに立ち上がりいつもの表情を取り戻していた。朔良が火を消すことをわざと見送ったのだと気づいた。あまりに鈍い動きだったから、それで無ければとっくに阻止されていただ

るつ。

「素晴らしいよ朔良ちゃん。君は薬に良く効く体質のようだが、すぐに無効にする。ますます調べたくなつたよ」

朔良は唇を噛み締めた。どこまでこの男は自分を怒らせたら気がすむのだろう。

今回は痛みで麻痺を解いただけだった。他のことは知らない。

その傷口は思うより酷くコートの下から血が滴り落ちた。よく見ると、チエアや床にもその飛沫がある。

朔良は明らかに血を流しすぎていた。息が荒々しくなり、やがて貧血で立っていられないほどの目眩が襲った。

「くっ！」

またしても朔良は片膝をついて脇腹と頭を押さえた。

冷静にそれを観察しながら貴尚が再び近づいてきたのが気配で分かった。

(ナイフは?)

霞む目で唯一の武器を探した。

それはチエアの横にあった。自分より貴尚の方が近い。

(そんな……)

せつかく麻痺を解いたというのに、このままではやはり動けない。結局逃げられないのか。

「そういえば朔良ちゃんは怪我をしているんだっかね」

貴尚もまた屈んで視線を合わせてきた。無表情で何を考えているか読めない。

やはり貴尚もニユースを見ていた。知っていて今まで触れなかったのだ。

「僕が助けてあげる」

どつという意味か考える間もなく、貴尚は朔良をまたしても抱き抱えた。

「な……」

そして再びチエアに座らせる。今度は優しく降ろして、そしてリ

クライニングを倒した。

「痛っ！」

伸ばされた傷に耐えきれず声が漏れた。それにも動じず、黙々と貴尚はダウンコートのファスナーを下ろす。

「ちよつと！」

慌てて朔良は起き上がるうとした。しかし痛みがすぐに襲って動けない。目だけで腹部を見ると、スウェットシャツだけでなくコートの内側にも血が染み込んでいた。

構わず貴尚は、アンダー部分までスウェットを捲り上げた。

「こんな止血のやり方じゃ駄目だよ。朔良ちゃん」

「なに……」

「このまま放つといたら壊死するよ」

言いながら近くにあったナイフで包帯を裂き出した。

「くっ」

信用出来ない男にナイフで触れられるのはとても怖かった。思わず顔を背ける。

「安心していいよ。僕は朔良ちゃんを失いたくないからね」

手を動かしながらそう言つと、丁寧にガーゼと包帯を取った。カッと朔良は頭に血がのぼった。

「志保なら良かったって言うの！？」

視線を手元に落としたままさりと貴尚は言い放った。

「いいよ。それで僕の望みが叶うなら」

完璧に朔良は愕然とした。

(狂ってる……………)

改めてその言葉を痛感する。青さめて貴尚の行動を見つめた。すると、立ち上がり棚から薬品を何やら選んで新しい包帯と共に戻ってきた。

動けないのが、悔しかった…。

力の入らないこの身をこれほど呪ったことは無い。

「あんたの望みって…？」

もう敬語や丁寧語を使う気にもならない。それは怒りだけではなく、喋る度に痛みがそれを遮るのだ。

両手に手当ての道具をもったまま貴尚は返した。

「朔良ちゃんを独り占めにすること」

口調はいつものように寒い台詞だったがその顔に笑顔は無かった。そして貴尚はそのまま跪く。

「だったら他にも方法があったでしょう？やり方って言うか……」

自分で言うのもおかしい話だったが、言わずにはおれなかった。

「無理だよ。だって朔良ちゃん彼氏つくらないんでしょ。いつ死んでもいいように」

「！」

朔良は完全に言葉を失った。そしてそっと左手首の盗聴器をスウエットのの上から見る。

(ばれていく……)

志保と二人だけの秘密だったことが、次々と明るみになって行く。「だから憎んでいたよね、彼氏を作った志保ちゃんを」

「それは違う！」

即座に朔良は否定した。冗談でもそんな誤解は受けたくない。

「僕はね。朔良ちゃんのすべてを知りたくて、朔良ちゃんがよく行くお店に盗聴器を仕掛けたんだ」

お前もか、という突っ込みをする余裕は朔良には無かった。ただ呆然と貴尚の話を聞いていた。「v i s t aはもちろんM I Y O S

H Iや…河口くんのスナックにもね」

「……………」

貴尚は淡々と語っている。それに朔良は何も話す気力が無くなっていた。口を開くのが億劫になる。

「もつとも、森崎には勘づかれて何個か回収されたけど」

話の流れから森崎というのはv i s t aのマスターだろう。

「それで言ったよね、スナックで死ぬばいって。ようやく本音をぶつけたんだなって思った。だからあの日にしたんだ」

「違う……」

ポツリとそれだけ呟く。貴尚には聞こえなかったようだ。傷口の周りを綺麗に何かで拭きながら、更に続けている。

「それまでいろんな薬を試していた。例えば催眠術に掛かり易くする薬を作って自殺させるとかね。でもどれも失敗に終わったよ」

貴尚はそこで一旦言葉を切った。

「染みるけど我慢してね。ここには手術道具ないから」

そう言うと、カタンという薬品のピンを床に置く音がした。朔良はどこか諦めに似た気持ちでそれを聞いていた。どうせ逃げられないのだ。

そして薬品を染み込ませたガーゼが傷口に当てられた。

瞬間、朔良の瞳孔が開いた。

「……っやあああああーっ……！」

卒倒しそうな痛みが襲った。それは今までの非ではなかった。

焼けるような痺れるような痛み。鈍痛が全身を襲い行き渡っている。耐えきれず暴れた。した。

チエアから落ちないようにそれを貴尚が押さえつけている。必然的に薬品が密接して痛みが増した。

「あああ……っ……！」

首を大きく左右に振った。痛覚が刺激されて目尻に涙が溜まる。

「いやあっ……！」

思わず蹴り出したどちらかの足が貴尚に当たった。実際には右足だったのだが、朔良にはそれすら認識出来ない。貴尚は怯むことは無かったが、勢いに押されて朔良から離れた。自然と薬品も離される。

「……っはあ……はあ……はあ……」

朔良は左向きにくの字に曲がって残された痛みを耐えた。

「そんなに泣きたくないの？朔良ちゃん」

そんな朔良に貴尚が冷静に声を掛ける。それに睨み付ける余裕も朔良には残されていなかった。

「所詮、言葉の上での約束……口先だけの誓い、なんだろう？ 重いの嫌だと言いながら、結局君たちはお互いに重荷を与えている」
朔良は硬く目を閉じ思わず左手首を握り締めた。

「君に、彼女は泣かないことを約束したまま死んだ。そして君は、未だに彼女に執着している」

違うと否定したかった。しかし痛みが響いてそれをさせてくれない。

(本当に…それだけ……?)

だんだん分からなくなってきた。秘密だったはずなのに、一樹には目的を見抜かれた。崇史に仕方なくとは言え、自分の野望を話した。

そしてケイにも…。ケイは、今の志保の声を聴いている。

今の志保の気持ちは、以前のものとは変わってしまった。それだけは分かってしまったから。

「朔良ちゃん、手当てを続けるよ」

何も言わない朔良に貴尚はそう言った。しかしもう薬品は使わなかった。真新しいガーゼを傷口に当てて包帯を手にする。

「もう血は止まったよ」

朔良の向きはそのままにして包帯を巻きながら何度か体を浮かせた。

あれで止血出来るとは、一体何の薬品だったのだろうか。貴尚の開発した薬には間違いない。

「朔良ちゃん。僕は君を泣かせたい」

「え……?」

朔良はこれには反応した。ちらりと貴尚を見ると手当てはいつの間にか終わっていた。

「でもなかなか強情だよね。だから僕も強情になっていつちやっただもね本当に志保ちゃんは自分から死んでいったんだよ。僕は手を貸しただけ」

「そんなはず…」

無い、と言い切れないものが今はあった。

「だから志保ちゃんが死んだのは朔良ちゃんのせいだよ」

薬品や汚れた包帯などを片づけながら貴尚が言う。どこかぼんやりした頭のまま朔良は言葉をこぼした。

「志保に吞ませた薬って、結局なに？」

貴尚は机に薬品を直すと代わりに別の棚を引き出しを開ける。そして横を向いている朔良の目の前に、透明な小袋に三粒ほど入っている薬をちらつかせた。

「これだよ」

勿体ぶって一旦言葉を切る。

「これはね、一生の内の一番悲しかった時を、再び思い出させる薬なんだ」

「え？」

想像だにしなかった内容に、朔良は目を見開いた。

「最高傑作だよ。君に使った記憶をなくす薬の応用品だね。今がたとえどんなに幸せでも……哀しみが沸き起こる薬なんだ」

「非道い……」

何て卑劣な物だろうか。では志保はそれを呑んだと言うのか。

しかし朔良の反応はそこで終わった。それを見届けると貴尚は朔良を正面に向けさせた。両腕を掴み後ろに持つていきながら、チェアの上に貴尚の重みが乗ってくる。

「志保ちゃんが一番の悲しみって何だかわかる？」

貴尚の顔が近くにあった。右膝は立て、左手でひじ掛けを持ちバランスを取っている。

それでも朔良は抵抗をするどころか、遠くを見たままだった。

(志保のカナシミ……)

そんなもの……。

「分からないよね？」

汲み取るかのような貴尚の言葉が続いた。

「だって君たちは全然お互いのことを話してない。重いのが嫌だか

らって、上辺だけで会話して同志とか言ってるんだから」

上辺の会話。

果たして本当にそうだったのか否か、今の朔良には確認しようがなかった。

（私のできたことは…）

朔良は混乱したまま天井の蛍光灯を見つめていた。

殺意

理解が、出来ない。

そんなことが目の前に現れたとき、今までは自然と受け流してしまってきた。そういうものだと思っただけで割り切った。

(なんで…死にたい、なんて…)

しかし今回ばかりはどうしても納得がいかない。受け流してしまえるものならば、今すぐそうしてしまいたい。

……いつか死ぬ為に彼氏をつくらない。間違ってる、と一樹は拳を握り締めた。

今までDark Killierに来る客の中で、死にたいと自分に漏らす者は少なくなかった。実際にリストカットの痕を持つものや荒んで暴れる者もいた。

しかし彼女のように内に秘めていて、おくびにも出さない人には初めて会った。よりによって…何で彼女が、と思うのは鼻真目なのだろうか。

一樹の隣では崇史が怒りを露にしていた。

「こいつ絶対に許さない！ここから出るぞ！亮。殺しに行く！」

戸惑い顔で亮が無理だよ、と答えている。

(止めないと……)

一樹はどこか頭の隅でそう思っていた。自分は崇史には誰も殺させないと、朔良に約束したのだ。

(そんな必要あるのか?)

そのとき違う方向から別の声が聞こえた。ねとりと張り付いて、それは執拗に一樹にまとわりつく。

しかしそれも自分自身の声だった。

自分もこの男は許せない。どうなるかと構わない。だが朔良の願いを叶えたいと想うことは…いずれ彼女の最終的な目的さえも…自分は力を貸してしまうことになるのか…。

(嫌だ！)

そんなのは駄目だ、と強く思った。

今ではなく、例えそれがいつかだとしても、そんなことは問題ではない。失いたくないんだ。どのような形であれ。

(この気持ちも重いと、朔良は思うのか？)

途中でスピーカーカーからガサガサという不快な音が耳を障さわった。その隙間からしつかり聞こえた声だった。

(朔良が泣かないのは誓いのため？)

時折見せた哀しげな笑顔。それは見ている自分の方が切なくなる表情だった。

「崇史！」

亮の叫ぶ声が一樹をはつと我に返らせた。

崇史が拳銃を握り締め窓から身を乗り出すところだった。珍しく亮が慌てて、それを押さえていた。

一樹は苛立った。自分には、あんなに偉そうなことを言ったのに。
(お前は何だ？)

気づくと頭より体が先に動いていた。

大股に窓に近づくと一樹は崇史の肩を掴んで、力づくで引きずり降ろした。

「落ち着けよ！！」

一喝して崇史の頬を力任せに殴る。崇史は後ろによるけた。

亮が読んでいてしつかりと支えていたため、倒れることはなかった。力が逃げないから余計に痛かっただろう。

「朔良はお前が殺人犯にならないようにここまで来たんだ！いい加減にそんな感情に捕らわれるのはよせ！」

呆然と崇史は下を向いていた。やがて、くしゃくしゃに顔を歪めてその場に座り込む。両手で顔を覆ったから、その後の表情は分からない。でも肩が震えている。

(ちくしょう…)

殴っても全然すつきりしなかった。むしろ自分も痛かった。

手と…心が…。

それは八つ当たりになかったからだ。
張りつめた空気の中で、しばらく誰も口を開かなかった。

* * *

閑静な高級住宅街の一角。そこにこの場所には不釣り合いな車が
停まっていた。そのバンパーはこれ以上はない程にひしゃげている。
その中で二人はじつと時期を待っていた。

車内では暖房を効かす為にエンジンがかかっている。

「ああ、また一樹さんからだよ」

そのときバイブ音がして携帯を見ながら隼人が嘆いた。そして何
度も悪寒を感じたようで、落ち着かなくそわそわしている。

その隣でケイは応える余裕がなかった。まっすぐ一件の家を見つ
めている。

いや、厳密に言うとその周りを蠢く影にであった。

(ここには良くない気が満ちている)

影は形を成していなかったが、ケイはそこに六体いることを見抜
いた。

その中に挑むように彼女は立っていた。

影が発するのは、言葉にならない憎悪、軽蔑、驕慢、嫉妬、そし
て悲哀　そんな負のエネルギー。

すぐに感化されてしまう自分には、この場にいることがとても耐
えられない。だがその影は、自分よりも彼女を取り込もうとしてい
た。それは彼女だからというわけではなく、たまたま近くにいると
いう理由だけで。

だから、彼女は入れない。

彼女は最初から朔良の傍にいた。あの雪の日だ。

本当のことをいうと、ケイには立ち尽くす朔良より、彼女に心を
奪われていた。

罪悪感と戸惑い、そして劣るような気配がそうさせた。まだ言葉としては何も聞こえなかったが、想いだけが溢れていたのだ。

朔良のオーラから感じたのは、極度の悲しみと絶望感。危うさはこのときから存在していた。

しかしそのようなモノは街中至るところにあるのだ。

ケイは人混みが苦手だった。すべての声が波のようにつねってケイの耳に飛び込んでくるからだ。

普段ならばケイはそのすべてに無関心を決め込んでいた。そうでなければ気がおかしくなる。その他に、隼人が嫌がるからという理由も確かにあった。

自分を心配しているのは痛いほど感じるのだが、どうしても見えない振りには出来ないものが中にはある。

まさに彼女と朔良のそれは、無視できない念だった。多少距離があっても感じてしまう程の強さがあつたのだ。だから自分から近づいていった。

彼女は嘆いていた。

ツタワラナイ。

一番最初に聴こえた彼女からの言葉はそれだった。実際に離れていたが、微かに届いた。

ケイは思わず朔良を…いや、彼女を探し出した。

どうしたの？

そして見つけた彼女について声を掛けた。最初は頑なで何もケイには伝えて来てはくれなかった。

だから隼人と再び会いに行ったのだ。あのビルへ朔良が向かって行ってるのは判然していた。

(でも榊原さんが無茶ばかりするから)

彼女はとうとうケイに振り向いた。朔良と同じくらいに寂しそうに笑って、そして懇願した。

ツタエテ…。アタシノホントウノ想いヲ。

けれど、それに自分は失敗した。伝えきる前に拒絶されてしまっ

ただ。

(今度こそ、ちゃんと言うから)

ケイが硬く口を結んだとき耳をつんざくような絶叫が聴こえた。

(！)

耳を反射的に覆ったが、それは意味を成さないことは知っていた。聴覚ではなく心に直接響くから。

痛い！痛い痛い！……いやだ！！

朔良の思念だ。そう気づいた時には終わっていた。残されたのは静寂な闇。しかしそれは混沌としていた。

新たな波がくる……。嫌な予感が、する。

「……い、おいつ！」

はっとケイは呼び戻された。心配そうな隼人の顔がこちらをうかがっていた。

何度も呼んでくれていたようだった。気づかなかった。

「ああ……ごめん」

声を出して初めて血の気が引いているのに気づいた。

隼人は何か言いたげな顔をしていたがそれ以上は何も言わない。

自分が踏み込める領域ではないことを、隼人はちゃんと知っているのだ。

(助かるよ)

普段はなかなか素直に言えないことを、やはりケイは口には出さずに心だけで想った。

そしてケイは再び彼女に顔を向ける。

……今でも彼女は朔良を見守っていた。そこには今起きたことを目の当たりにして、悔やんでいる念がある。

アタシトノ約束ガ、サクラヲ、縛ってシマッタ。

(そんなことないよ、貴女のせいじゃない)

ケイは目を閉じて念じた。彼女はこちらを見ようとしなない。ケイの声は届いていないようだった。

(中で何が起こってるんだらう)

ケイが得るモノのひとつは、彼女から伝わってくるものだ。透視能力があるわけではないから。

彼女が中に入れないのと、こちらを意識する余裕がないから今は何も分らない。

そしてあとは思念だ。

だからケイは集中して何とか読み取ろうとする。

彼女の思念と中にいる朔良のオーラ…そしてもう一人の男の声。

人ならざる者も、そして生きている人も強い思念を持っていればケイには否応なしに届くのだ。

しばらくして、影に勢いが増した。家の中に次々と入り込んでいく。周りから負のエネルギーに誘われて、下級な霊が集まり出してくる。

彼女が振り向いた。

サクラガ……。

その声にぴくん、とケイが反応した。そして合わさって聴こえた男の声。

この女はもうすぐオレノモノになる！

恐ろしいまでの執着心。

吐き気が襲ってきて、ケイは右手の掌で口を覆った。自分のオーラを汚されたのがわかる。

しかし間髪入れずに次の声が聴こえてきた。

コロシテヤル！

ケイは顔を上げた。

(榊原さん！)

あまりの憎悪に触れ全身が震え出した。思わず自分で自分の体を覆う。

強すぎる思念は頭痛も引き起こした。しかしそれを押さえるには手が足りない。

「ケイ！」

隣で隼人が再び心配そうに声を掛けてくる。今度はしっかりケイ

も反応して隼人を見返す。

隼人はいつもそうだ。何の力もないはずなのに、自分の異変にはすぐに気づいてしまう。

大丈夫、と言おうとしたが声にはならなかった。しかしそれは体調のせいではなかった。

そのとき、聴こえてきたのだ。

強く荒々しい渦の中に、そつと紛れた弱々しくて小さな思念を。

だけど、待ち焦がれるほどに待った、朔良からのその言葉。

助けて…。

「隼人！中へ！」

変わりに目を見開いて叫んだ。それが合図になった。

その瞬間の隼人の反応は素晴らしかった。

何も発することなく、すぐさま車から降りて標的の家に向かって駆け出した。その左手に予め用意したバットを走る勢いに合わせて振っている。

周りで蠢いていた影は、隼人の輝くオーラに負けて道を開けるみたいに別れた。いつだって強いのは生きている人間の想いの方だ。

ケイはそれを見送りつつも、不本意ながら動けずにいた。強すぎる思念を受けたせいではらくその場に留まらなければならなかったのだ。

背もたれに体をすべて預けると、ずるずると重心が下がっていった。

そしてケイは長い息を吐いた。

(聴き漏らさなくて…良かった)

* * *

貴尚は朔良の頭を右手で撫でた。顔にかかっていた髪を後ろにやる。

そして顔をゆっくり近づけた。しかし唇が触れそうな瞬間になっ

ても朔良は何の反応しなかった。

だから口づけはやめて、その唇を朔良の左耳に持ってきた。

「つまらないよ朔良ちゃん。今なら簡単に君を犯すことが出来る」
心底つまらなそうに貴尚が呟いた。仕方なく貴尚は喋り続けた。

「それじゃあ今まで我慢した意味がない」

おそらく耳には届いているだろう。たとえ心までいなくなるとも。
ならば心を響かせることを言えばいい。

「君を送るとき、志保ちゃんの家まで行ったんだ。どうなったか気になって。あと、証拠隠滅を計るためにね。そして悲壮感たっぷりの彼女が出てきて面白かったよ。君は寝ていたけど」

強い薬物は容量を間違えると拒否反応を起こすことがある。朔良は一日に二錠呑んだために、そうして気を失った。そんな彼女を送っていく前に寄ったのだ。

「でもね。飛び降りる瞬間彼女は笑ったんだ。苦しみから解放されるっていう笑みだったのかな？」

そう言いながら貴尚も笑みを作る。

「本当に君たちは笑うことが好きだよ。僕もそれで笑顔でいたんだよ」

楽しくもないのに、と言いかけてやめた。楽しいことならあったく shouldn't ないこの世界でたったひとつ。

しかしそれは今、目の前でつまらないものに成り下がっている。

「朔良ちゃん。志保ちゃんは君を裏切った。だったら君ももういいんじゃない？」

そう言つと、ペろりと朔良の耳を舐めた。ぴくつと目の前の耳が小刻みに震える。

「おや?」と思つて貴尚は体を僅かに起こす。目に入った朔良はまだ虚ろな表情をしていた。死んだ瞳だ。

「腑抜けだろうとも、こういふこと」には反応するのか。それとも芝居か…。

貴尚の眼孔が光った。

(確かめる価値はあるよね)

そして貴尚が中央に体勢を立て直したときだった。静かに朔良の両腕が貴尚の背中にまわされた。

貴尚は腑に落ちない顔をした。朔良から抱きしめてくることはあり得ない状況だ。しかし朔良の表情に変化はない。

「どういう、つもり？」

怪訝に思いながら視線を移した。返答がないことは分かるため自分で探る。

(なにか変化は……………)

そのときパソコンのデスクの上に目線が止まった。

あった。

貴尚は気づくとすぐさま左腕を上げた。するとちょうど、朔良の右腕が貴尚に向かって降ろされたところだった。腕と腕がぶつかる。そのとき朔良の手から何かが落ちた。貴尚はそれが何か見ないでも分かった。手当てのときに使い、デスクに置いていたはずのナイフが、いつの間にか消え失せていたのだ。

失敗に終わると朔良は貴尚を押し退けた。今までにない力だった。愕然としながら貴尚は退く。

一連の動作のなか、やはり朔良は腑抜けのままだったからだ。

「朔良ちゃん？」

理解不能と脳のデータが打ち出した。

焦点の合わない眼で立ち上がると、落ちたナイフを拾う。痛みが生じているはずなのに、まったくそれを感じさせない滑らかな動きだった。

そして一言、久しぶりに口を開く。

「殺してやる」

貴尚はぞつと鳥肌がたった。完全に目がおかしい。

(イツてるってやつかな)

冷や汗をかきながらも貴尚は冷酷な含み笑いをみせた。

こうでなくては、面白くないだろう？

脳が指令を出すより速く身体が動く。

だが条件反射とは違った種類のものだ。それよりは遙かに永い時間だった。

先ほどまで雁字搦めに縛っていた痛みは、不思議と今は解放されていた。それを差し引いても、自分の能力よりはるかに強い力と動き。それが今は可能だった。

乗っ取られている。それが一番フィットする言葉だ。

感情についてはただの殺意。誰かの望みだとか自分の願いだとか…もつどうでも良かった。

彼女の想いはすでに自分の手の届かないところにある。自分の望みも意味を成さなくなってしまった。

ではおまえのほんとうの願いはなんだ？

どこからか声が聞こえた。女性のものとも男性のものとも…果たして若いのか年寄りの声なのかも判らない。

(本当の？)

面白い聞き方をする。だからそんなものは失くなったのだ。

では何故そこまで殺意に満ちている。

それなら分かりやすい。決まっている、憎いからだ。

目の前にいるこの男が現れなければ、今でもどんな形であれ志保と同志でいられた。それを壊したのは間違いないこの男。憎んで当然、怨んで何が悪い。

そうだな。当然の権利だ。

声が同調した。そのとき更にどくんと朔良の鼓動が鳴った。何かが入ってきた。そんな感触があった。

不思議と恐怖は感じなかった。むしろ体が軽くなる。

ではそれが今のおまえの願いだな。

声は遠くではなく、自分の中から聞こえてきた。

(願い…)

そうかもしれない。

余計な感情はすべて取り払ってしまえばいいのだ。そうすれば生まれてくる。 怨念。

自分の右腕が大きく振りかぶる。足が跳ねるように軽く、貴尚に向かつて駆け出した。

目指すところは貴尚の左胸。そこに狙いを定めナイフを突き刺すように腕が動いた。

「甘い」

貴尚は寸前で右向きにかわす。勢いが止まらず二、三步無駄に前に行く。

すぐに振り向き、貴尚の方へ斜めにナイフを降り下ろすもすべて空振りに終わった。

「動きに無駄が多いよ。朔良ちゃん」

貴尚は自分が殺されるかもしれないのに余裕があった。朔良の憎悪は貴尚の声を聞く度に増す。

(むかつくむかつくむかつく！)

休むことなくナイフが貴尚を狙う。貴尚は避けながら朔良の左腕を掴むと、自分に一旦近づかせ背中を壁に向かって押した。

今の朔良の体は強く、壁に激突されることは免れた。しかし一瞬隙が出来る。

その隙について貴尚はひとつの棚から何かの薬品を取ろうとした。

「サセルカ！」

カッと瞳孔を開いて迷いなくナイフを背中に突き刺す。

貴尚は舌打ちをして身体を反転させ、それもすれすれのところで避けた。

(え？)

数秒遅れて朔良に戸惑いが生まれた。それでも体は止まらない。

ナイフを左右上下に降りながら貴尚を追いつめていった。

(なに、今の声…)

とても自分から発せられたとは思えない低くしゃがれた声だった。途端、綻びが生じた。迷いと恐怖が憎悪に混じって溢れ出す。

なにを躊躇うことがある。おまえの願いが叶うならそれで言はずだろう。

中から再び声がした。それと共に、ある映像が脳裏に焼きついた。

この男がなにをしたか思い出せ。

そうだ。

こいつに情けは無用だ。

殺人犯なのだから。

四方八方からそれぞれ違う声が集まった。

(志保を奪い、人を弄んだ)

ぎりど朔良は歯ぎしりをして貴尚を睨んだ。これは自分の意志であつた。

そのとき浮かんだ映像は、朔良は見えていないはずのもの。

志保がベランダへ出てきたところだ。泣き腫らした瞳に、それでもまだ足らず涙が滴っている。

そして目を閉じて…笑った。安らかな笑み。やっと楽になれる、

そう志保の口が動いた。

そして……その身は優雅に飛び立った。

なぜこのようなものが見えるのか、そんなことは気にならない。

確かに自分には志保の哀しい過去のことは分からない。だが綻びは完全に修復された。

朔良の視界が戻ると貴尚が出入口から見て左の突き当たり、壁と壁とが接する角に追い込まれていた。遠慮なくナイフを振りかざす。そこにはすでに朔良の意思もシンクロされていた。

貴尚はやはり不敵に笑って、そして言った。

「君が僕を殺したら、完全に君は僕のものだね」

「……………」

このときは貴尚の言葉の意味が分からなかった。しかしそのままナイフを持った右手は、まっすぐ前に突き出された。

「ぐっ！」

一瞬の動きの鈍さが貴尚の致命傷を避ける。貴尚は下にいた。しかしその左肩には避けきれなかった傷がある。紅いものが白いシャツに鮮やかに染み渡っていった。

朔良の顔にも飛沫を浴びた感触があった。それを拭いもせず朔良は思った。

（まだだ…）

この男はまだ生きている。

朔良の左手が、逃げられないように貴尚の胸ぐらを掴んだ。位置を合わせて片膝をつく。

（やっと殺せる）

（本当に…？）

どれが自分の声なのか、朔良には分からなくなっていた。殺す。

これで終わりだ。

クロス。

でも……。

コロセ！

待って…。

シンデシマエ！

違う…。

シネ！

助けて…。

コイツガ死ネバ全テ終ワル！

「シネ…！」

朔良の口について出た言葉と共に、右腕は持ち上げられた。貴尚の眼が揺らいで硬く閉ざされたのが見えた。

ナイフが降り降り降ろされたそのとき。

ガシャンという破裂音が下の方から微かに聞こえた。それと同じくして自由になる身体。朔良は思わず反発した。

ガキツという鈍い音。

ナイフは貴尚の左側、その身に触れるすれすれの壁にめり込まれた。

どつと押し寄せる重みと痛み。今までの軽さが嘘のように。

朔良の息がかなり荒くなってきた。上下に激しく揺れる。

貴尚がどこか驚いた顔をしてこちらを見ていた。

「朔良！」

叫びと共に開けられたドア。重い頭をぎこちなく向かせた。

すると瞳に飛び込んできたのは隼人だった。右手にバットを持っている。あれでどこかの窓ガラスを割って入ったのだと、朔良の頭ではまだそこまで回転しなかった。

「なにやってんだよ！」

隼人は怒鳴ると固まったままのこの状態を睨み付けた。そして近づいてきた。朔良の硬くなってる手を持ち、左から指の一本一本を外していく。

貴尚の縛りが解けた。しかしそれでも動かずに突然やってきた侵入者を見つめた。

「なんだ？お前は」

不快感をあらわにしている。いつもの柔らかさは無かったがこれが本来の姿かもしれない。

それに隼人は一瞥だけくれると今度は朔良の右手も外しにかかった。まだナイフを握り締めたままだったのだ。

朔良は茫然自失となり眺めているだけだった。すべての白くなつた指を外すと隼人は貴尚から朔良を離れた。

そして貴尚を見る。「俺はあんたはゆるせない。いまツレが警察呼んでるからな。大人しくしてろよ」

貴尚は二人が前から離れたのを見計らったように立ち上がった。

パンパンとジーンズをはたいている。

「警察が来て困るのは君たちの方じゃない？ここは僕の家だし、殺されかけたのも僕だ」

殺されかけた、その言葉に朔良が震えた。やっと実感が湧き上がってくる。

それに気づいて隼人は朔良を気遣うように隅に座らせた。パソコンデスクの隣の壁だ。そして隼人は貴尚と対峙した。

「いいや、あんたの方がヤバいだろ。ここの薬とか見られたらさ」「貴尚は机に向かいながら言った。

「別に困らないよ。これは僕の仕事だ。薬物禁止法に定められているものはない」

そこで机を背にもたれた。まったく肩の傷は気にしてないようだった。

「誰かに、無理矢理吞ませたということをしてない限りね。でもそれも証拠がなければね」

朔良はぼんやりした頭で何気なく床に落ちてるはずのカプセルを探した。どこにも無かった。

(いつの間に……)
おそらく手当てしたときだ。あのときしかそんな暇はなかったはずだ。

「知らねえよ、んなこと。あんたは悪いやつだから何か出てくる」

隼人はさらりと言った。適当で自己中心的な物言いに朔良は笑いそうになった。はつきりしていて気持ちがいい。

こんなふうにも自分もなれば良かったのかもしれない。朔良は両膝を立てて顔を埋めた。すると朔良の耳に知っている声が左上から落とされた。

「榊原さんは榊原さんだよ。誰かになる必要はない」

ケイだ、と顔を上げなくても分かった。だからそのままにしていた。

「また侵入者が増えたか。出て行ってくれないか？僕は招待した覚えはないよ」

貴尚が不機嫌そうに言うのが聞こえた。自分には決して出さない

声色。

「うつせえよ」

一言だけ隼人が吐き捨てる、ガシャンという音がした。慌てて顔を上げる。するとバットを握り締めた隼人が、机の上にある薬品を割っていた。

「変なもん使うなよ」

また貴尚が何かしようとしたらしい、とこの台詞で分かった。青ざめて様子を見てみるとケイが肩を叩いた。

「ここは隼人に任せて俺たちは下に行こう」

朔良は戸惑った。心配そうにこの場を見つめる。

「でも……………」

「大丈夫。隼人も強いんだよ」

優しく笑う顔とは裏腹にかなり強引に朔良を立たせた。

「ま、待って…」

体が鉛を持ったように重い。それだけではなく、当事者である自分がさつさと退散していいのか躊躇われた。

「ゆっくりお話したいから」

ケイが澄んだ眼でそう言う。

（お話…）

何の話か朔良には痛いほど分かった。

伝わる想いは

部屋を出るとすぐ、ケイは朔良の隣に立って支えた。

バランスを保つことが困難だったからだ。まるで綱渡りをしているみたいに一步一步がふらつく。

そして時々後ろからガタンやバタンなどという、大きな音が聞こえてくる。その度に朔良はびくりと反応した。音のみの情報は怖い。いろいろなことを想像させるから。

「気をつけて」

しかし階段に差し掛かるところでそう言ったきり、あとはケイは何も言わなかった。朔良も何も言う気がしなくて黙っていた。

……いや本当は逆だ。朔良の喋りたくない気持ちにケイに届いてしまっている。

しかしそれが解っても今の朔良に気遣う余裕はなかった。ただ震えて上手く前に出ない脚を、意識して動かすことで精一杯だった。

ダイニングに戻ると、自分のバックがソファに置き去りにされていた。それと空のティカップが二つ。

ここに最初いたんだ、と当たり前なことを思った。遙か昔のことのように感じる。

ケイは朔良のバックを寄せて、自分を長いソファにゆっくり座らせた。途端にどっと疲労感が襲ってきて、背もたれに全体重を預ける。ここまで歩くだけで息が切れた。

ケイもその隣に腰を落ち着かせていた。貴尚のときはあんなに寒気を感じたのに、今は平気だった。

やっぱり人によるんだ、とぼんやりした頭でそんなことを考えた。

「榊原さん」

だが、ケイが口を開くと朔良はまたしてもびくりとなった。分かっている。先ほどまでとは違う種類の震えだということとは。

「車の中ではごめんなさい。驚かせてしまって」

やはりケイは謝罪から入った。何だか可笑しい。でも、笑えなかった。

なぜだろう。

先ほどから笑うことが出来ない。いつも、笑っていたのに。

だから何も言えなかった。笑うことで自信の代わりとなる壁を作り上げ、その中核を護っていたんだと想い知らされる。

朔良は左側のひじ掛けに半身を寄りかからせ、そして腕で顔を覆い隠した。傷口が刺激されて痛かったが、これが一番安心できた。

「榊原さん？」

心配そうなケイの声が耳に届く。すると隣で立ち上がったのが感触が伝わってきて分かった。そして足音が遠ざかった。

何も応えようとしない自分に嫌気が差したのかもしれない。でもそれが分かっても朔良は動けなかった。

今までで一番強く触れた、自分の醜い部分。あときは何もかもを棄てても一人の男を殺したいと本気で思った。

まだ感触が身体に残っている。ナイフで身を切り裂いたときのもと、浴びた返り血。致命傷には至らなかったとはいえ、間違いなく自分がやったことだ。

自分が……怖かった。隼人が現れなかったら今頃、確実に殺していた。ぶるつと朔良は震えた。更に力を込めて自分の額を腕に押しつける。

そのとき朔良の背に何かふわりと落とされた。

優しい、ぬくもり。

硬くなった体が僅かに柔らかくなるのを感じた。だから顔を少し上げることができた。

「あ……」

ケイが毛布を掛けてくれたのだ。

「勝手に持ってきてちゃった」

ソファの後ろにまわっていたケイは、いたずらっ子のように笑った。それでも朔良は笑い返せなくて視線を反らして頂垂れる。

戻ってきてくれた。本当はそれだけで嬉しかったのに、それを態度に表すことが出来ない。

「良いんです。無理に何かを言わなくても……。俺、なんとなく分かつちゃうから」

そうだった。ケイには隠しても無駄なのだ。善くも、悪くも。

ケイは再び朔良の隣に座りながら言った。

「本当は、それが一番榊原さんを苦しめているのかもしれないね。俺が現れなかったら……。あのビルにも行かなくて……」

ケイも苦しいのかもしれない、と朔良は感じた。否定をしなくて。そんなことはない、と……。

「もしかしたら今頃はまだ、貴女は自分を保てていたでしょう」
そうかもしれない。

「でもいずれすべてを思い出したとき、榊原さんはここに来た。それは確実です。だったらやっぱり俺が……隼人がいて良かったんですよ」

「うん」
やっと出せた言葉はこれっきりだった。分かっているんだ……本当は。

「だから榊原さん。もっと本音を言っても良いんです。泣いても、良いんですよ」

何がだからなのか全然解らない。だからのろのろと体も起こしてケイの方を見た。その不満を言うために口を開く。

「……………だった」
だけどもまったく違う言葉がついて出た。

「え？」
ケイが小首を傾げる。何で聞こえてないのだろう。分かっちゃうから、とか言ったくせに。悔しいから朔良はもう一度、今度ははっきりと言った。

「殺すところだった！」
言葉を出すと溜めていた恐怖が一気に押し寄せてきた。震える手

で顔を覆う。目を閉じてもあのときの自分の感情と、一瞬だけ見せた苦しい貴尚の顔が離れない。

「榊原さんはね、憑かれかけたんです」

しばらく沈黙が流れてから、静かな声でケイが切り出した。え、と朔良が顔を上げる。

「この磁場は…えーと、悪霊って言ったら分かりやすいかな？…悪霊が集まりやすいみたいで、通常より憎む気持ちが増幅してしまったのは確かなんです」

悪霊…。一気に遠い世界に飛ばされた気分だった。だけど不思議とケイが言つと嘘に聞こえない。ケイは自分の手元を見ていた。

「だからというわけではないけど、榊原さんはあまり気にしなくてもいいんです」

朔良はケイの横顔を見ながら小さい声で言った。

「私から生まれたのは確か……」

「うん。でも榊原さんの元々の想いは、別のところにあつたでしょう？ちゃんとしつかり自分を確立出来る人だから、本来ならあり得なかつたことだよ」

そこでケイがこちらを見た。優しい笑顔にどこか切なさが宿っている。

「そう、彼女が言ってる」

「！」

志保だ。すぐに気づいた。今もケイには聴こえ続けているのかも知れない。彼は時折朔良の後ろに視線を移すから。

「俺がここに来て榊原さんに投げ掛けている言葉は、ほとんど彼女の言っていることなんです」

ケイが言った言葉。朔良は考えることなく分かつていた…彼が、志保が一番言いたいことが何なのか。

(そんなの……)

今さらだ、と朔良は思う。

「彼女はいま後悔してます。……『あたしの約束が朔良を縛ってし

まった。あたしは朔良を苦しめるために誓いを交わしたんじゃない
って」

「え？」

朔良は目を瞠った。力なく毛布が肩から落ちる。一瞬ケイの微笑
みが、なぜか志保とダブって見えたのだ。

(全然：似てないはずなのに)

「朔良はいい加減なところあるけど、実はちゃんとあたしのことを考
えてくれるって分かった。なのに、あんなこと言ってごめんね」
話し方も重複して聴こえだした。

「ケイクン…？」

説明を求めようと心なしかケイに近づいた。しかしケイは、やは
り悲しそうに笑って続ける。

「だからね朔良。もう良いの。もう朔良の思う通りに生きて良いの
(志保！)

これは志保だ。なぜだか分からないが、朔良は直感的にそう思っ
た。頭が真っ白になっていく。

「もうあたしのことで苦しまないで」

少し志保が伏し目がちに呟いた。朔良は焦る想いで口を開く。

「わ、私！私のしたこと、重荷だった？」

ずっと…気になっていたことだ。貴尚に突きつけられるまでもな
い、自分だって頭の端にはあったのだ。それを見ないようにしてい
ただけで。

だからこの答えを聞くのはとても怖い。しかし志保の言葉は、訊
かざるを得ないものだった。だけど志保は静かに首を横に振る。

「そんなことない。あたし嬉しかった。心配する気持ちの中で、嬉
しさを感じたよ。不謹慎だよ。だって重荷を与えたのはあたしの
方なのに」

「違うっ！」

悲鳴のような声が出た。朔良は自分のそれに驚いたが、それどこ
ろではない。

「私も志保のため、なんて言い訳にしていた。本当は私のためだけに……、傲りだよね」

そのとき、ふふつと志保が笑った。

「じゃあお互い様だね。あの日の仲直りみたい」

あの日……。

初めて喧嘩をして、初めて仲直りをした日だ。あれが初めて最後の喧嘩になった。

だから朔良も笑おうとした。けどやはり笑えない。これが最後だと本能が訴えるのに、笑顔を志保に見せてあげられない。

「いいよ朔良」

志保がケイの手をこちらに伸ばしてきた。そつと朔良の頬を撫でる。

「無理して笑わないで。ちゃんと知ってるからあたし。朔良の笑顔。

……だからいまは泣いても良いんだよ」

そう言うつとケイの造りの瞳から涙が溢れた。志保が泣いているのだ。これが志保の一番伝えたいことなんだろう。

「自分が……志保が泣いてるじゃない……」

そこでやつと笑えた。笑えた気がする。

なのに目の前がぼやけて見え出した。眼から、透明な水。

朔良は焦って上を向いた。けどずっと堪えていたものが、堰^{せき}を切ったように次々と溢れる。

「あれ？止まらない」

一度流れ出したものは、いつもみたいに抑えることが出来なかった。

慌てて目を擦るために手を上げると志保の……手に当たった。

ずっと頬に触れていたのだと改めて気づく。

「駄目よ。こすったら瞼が腫れるから」

志保が泣いたまま注意した。そして朔良を優しく抱き締めた。

「バイバイ。ありがと朔良」

「！」

そつと囁く志保の言葉に朔良の目が見開く。

「い、イヤだ……」

朔良も志保を抱き締めて駄々をこねる。初めて　　嗚咽が漏れた。

「いやだっ…もっ…志保と…いろんな話……」

もつというんな話をすれば良かった。生と死についてだけではなくて、今までの楽しかったこと、志保が辛いと感じたことを。

貴尚の言う通りだった。自分達はお互いを気遣って深い話はしなかった。聞かれることも話すこともしなければ、悲しいことは無かったことになる。今さら湧き上がる後悔。

そしてこれからの喜怒哀楽もお互いに感じ合いたかった。

「話したいよっ…志保の、結婚…ちゃんと祝ってない。鍵も…返してない。もつと飲みっ飲みにも行きたい」

泣くとこんなにも喋れなくなるものだなんて、知らなかった。

伝えたいことがたくさんあるのに。志保はすべてにうん、うん、と頷いた。

「ごめんね朔良。崇史にも伝えて、ごめんなさいって。それからありがとうって」

そう言つと志保は腕を伸ばして朔良の顔を見た。志保の顔は涙でぐしゃぐしゃだった。きつと自分もそうなんだろっ。

「大丈夫。伝わってる」

ぐしゃぐしゃな顔のまま朔良は笑った。安心させるように。

「うん。……それからこの人にも……」

志保は手を自分の胸に当てて目を閉じた。

「え？」

反応がワテンポ遅れた。その瞬く間に志保の眼が開かれる。その目は、ケイだった。

戻ったんだ、と朔良は知った。

ケイは何度かまばたきをして、溜まった涙を落とした。

「ごめん、なさい」

それでも涙は途切れていなかった。ケイも泣いていたのだ。泣き

ながら謝罪を口にした。

ケイが謝ることはないのに。言葉の代わりに、勢いよく顔を横に振る。それからケイを抱き締めた。

「ありがとう」

初めて心から素直に言うことが出来て朔良もまた涙が流れた。

ケイが気に留めてくれなければ…途中で諦めて、見捨てたりしなかったからこそ起きた奇跡。感謝し尽くしても、それは足りない。ひとしきり泣く間、ケイは何も言わずに胸を貸してくれていた。それから朔良はそのあとのことが分からなくなった。

* * *

ケイはしばらくじっとしていたが、やがて朔良の体を支え起こした。朔良は意識を失っていた。

ここまで気を張りつめていたのだ、無理はない。それと貧血だ。ケイは朔良をそっとソファに寝かせた。その目には乾いた涙のあと。そして上から毛布を掛けるときに、その左手首を一瞥する。

この機器の向こうで、彼らはどのような想いでいるのだろう。少し気になったが今の自分に分かる術はない。距離が遠すぎる。そしてこの場にいる第三者に声をかけた。

「首尾は？」

ちらりと眼だけを動かす。隼人がバットを持ってダイニングのドアを開けた。数ヶ所殴られたようなケガが顔にあった。

「とつくに終わってる。あいつ見かけ倒した。薬持ってなかったらただのバカだ」

どこか不機嫌そうに口を尖らせて、私情まじりに言う。

「その顔で？……っていうかバカは関係なくない？」

「あつ、言つとくけどこれは使つてねえからな」

隼人はそこでバットをブンブン振った。

「なのにあいつ硫酸とかぶっかけようとするんだぜ？」

信じらんねえ！と隼人が怒鳴る。

それにケイは仕方ないなあ、と隼人にも聞こえないほど小さく呟いた。

そしてケイが隼人に近づこうと一歩踏み出したとき、その足がふらついた。するとすぐに隼人の支える腕が差し伸べられる。

「あ、あれ？」

「あれ？じゃねえだろ。やりすぎだ」

隼人の声が低く抑えたものになる。やはりそこで怒っているのか。ケイは再確認した。

「良いんだ。これで榊原さんも前に進める」

自分は納得のいくものだったからそれで良かった。降霊させることは酷く疲れる。しかしケイから伝えるよりも、朔良には効くと考えたのだ。

すべてではないが重要なことは伝えられた。もう志保の念は弱いものになっている。消えるわけではない。きっとそれは永遠に朔良や崇史を見守り続けることだろう。新しい命に生まれ変わっても。

「それより警察は？」

ふと思いついたように隼人が訊いた。遅くねえか、とまた眉が険しいものになる。

ケイはやつと自分の力で立って携帯を取り出した。

「これから呼ぶんだよ」

悪びれず数字を押している。隣で隼人がびくりとこめかみをひきつらせた。

「は？まじで？…俺あいつにハツタリかましたってことになんじゃん！」

ぶんつとバットが唸る。こういうところを悔しがるころは昔から変わらない。

ふつとケイは笑った。

「話の邪魔されなくなかったから……誰にも、ね」

ケイにとってはそれが第一の目的だ。後のことはどうでも良い。

確かに貴尚の存在を無視しているところが、それを如実に示している。

そう　あの影は貴尚の悪の部分の表れだった……。
貴尚が悪霊を引き寄せた。朔良に話したことも嘘ではない。貴尚は負けたのだ。しかしそれを被^ほう気はさらさらなようだ。

隼人はケイの言葉の奥を見抜いて、お前が一番こええよと吐き捨てた。

後ろで電話が繋がったようでも会話が聞こえてきた。

「あ。池田さんって人、そこにいますか？……いない？……えーと、立てこもりしてるビルを騒がせた一人なんですけど、池田さんから電話もらえますか？……いえ、番号どうせ表示されてるですよ？じゃ、そういうことで」

パタンと二つ折りの携帯を閉じた。ケイがため息をついている。

「お前さ、何であいつにこだわんの？」

ケイがあくまで池田に話したい、ということが分かって隼人は不思議に思った。

「まあ、なんとなく」

ケイの答えはこれだけだった。きつとまた、隼人には計り知れない情報がケイには集まっているのだらう。それかただの気まぐれか。

隼人はふと上を見て言った。

「ケイ。今日も外泊になるな」

ダイニングに掲げてあった時計がそこにはあった。

「……………うん。でも良いんだ」

ケイはぼそりと答えた。

最終話

目を覚ますとそこは病院だった。

しかし朔良がそう認識する前に両親の顔が眼に入った。母親が泣いていた。いつも怒ってばかりの母親だったが、初めて泣くところを見た気がする。

「バカだよ、あんたは」

弱々しく叱られた。無口な父親も辛そうな顔でそれを見ていた。

「ごめん」

床に伏したままで朔良は咳いた。腕には点滴がの針が刺さっている。

そして、あれから丸一日経ったと聞いた。本当に出血多量で、朔良が思ったより大変だったらしい。だから起きたのは二日後の朝。今回関わっていた皆も来てくれていたらしいが、両親が付き添っているということ帰ったらしい。母親が教えてくれた。

「友達増えたね」

そう言い残して昼を過ぎる頃には二人で帰っていった。

そのあと入れ換わるように沙織里や三吉、結花と賢二が来てくれた。皆にもやつぱり叱られた。

沙織里は泣きじゃくっていた。

「松野さんの番号教えなきゃよかった」

沙織里が悔やんでいたから、遅かれ早かれ自分が行っていたから気にしなくて大丈夫、と伝えたらまた叱られた。そういうことではないらしい。

「それで松野さんはどうなったの？冬馬さんたちは？」

そこでやっと気になっていたことを訊いた。両親には何となく聞けなかった話題だった。

両親からも事件のことは何も話してこなかったから。放任主義なのだ。朔良も充分血を受け継いでいそうである。

四人は一瞬、顔を見合わせてから代表して三吉が口を開いた。

「崇史は俺たちを解放して出頭したよ。お前のおかげだな朔良」

「え？」

意外な言葉に朔良は眼を丸くした。自分は途中で目的を変え崇史から去つたのに。でも最悪な状況だけは免れて良かった。

結局、崇史に大きな口を言えた義理は無いのだ。自分も、自分を見失ってしまったから。

「朔良とあの男の子の言葉が効いたみたいだ。志保なんだって？あんなときの彼は」

「そう……」

肯定とも頷きともとれるように朔良はポツリと呟く。

誰から訊いたのか、と一瞬疑問に思ったが、盗聴器があったことを思い出した。ケイは盗聴器がある中で力のことを説明したのだった。

「それから松野は一応取り調べ中。決定的な証拠は無いみたいだが……盗聴器の情報では証拠として弱いし、朔良もこれから事情聴取が待ってると思う」

三吉達はすでに事情を聴かれたのだと教えてくれた。

「他の人たちは？私に協力してくれた……」

「バイクに乗つてた連中も勾留されたみたいだな。今は分かんが。多分一番責任をとわれるのは、指示を出した一樹かもしれない。彼も今は警察にいる」

一樹という名にどきりとした。無意識にシーツを握る。

自分の責任で一樹が捕まるなんて耐えられなかった。

「そんな顔しなくても大丈夫。きつとすぐ帰ってくるでしょ」

朔良の様子を見て気遣つたのは結花だった。意外さに僅かに眼を見開く。照れたように結花ははにかんだ。

「あんたも素直になんなよ」

朔良には結花の言葉がよく分からない。怪訝そうな顔を向けると、なぜだか結花と沙織里は顔を合わせてクスクス笑っていた。

「なんなの？」

「聞いたよ！結花から。良かったね朔良」

はっ？と声に出ず息だけが漏れた。何となく、これ以上この話題には触れたくない。朔良はそつと嘆息した。

もついいか？、と言いたげな表情を見せてから三吉は続けた。

「そんで、あの二人は今は行方不明」

「行方不明？」

「そう、隼人とケイ…だったか？警察と救急車を呼ぶだけ呼んで、現場からいなくなってたんだと」

まあすぐに素性はわれると思うけど、と三吉は付け足した。確かにDark Killerにいた誰かに聞けば分かるだろう。

きつと二人には二人の事情があるような気がした。不思議とすんなりそう思えた。

「そんなところか」

三吉が頭を掻きながら話を締め括った。

それに賢二が割って入る。重要な情報を言うように声をひそめた。

「あの亮ってやつ。あいつは逃走してるぜ」

「……………」

途方に暮れたような顔をして朔良は少し黙る。いや、その場には誰も沈黙していた。

その上結花は賢二を流し目で見た。沙織里だけは顔にクエスチョンマークをつけていたが、空気を呼んで口を閉じている。

やがて空気に耐えられなくなった賢二は、苦しみ出してとうとう叫んだ。

「なんなんだよ！」

「いやあ…あの人はなんかもう……好きにして、というか…」

ぼそりと朔良は力なく言った。何となく、逮捕されている姿がイメージできない…何となく。

「だな」

三吉も頷くと爽やかに笑って白い歯を見せる。その笑顔に一気に

空気が和んだ。こういうところは流石だと思う。

それから他愛ない会話をして、三吉が腕時計を見ながら言った。

「あ、俺そろそろ店に戻らないとやばいわ」

その言葉をきっかけに皆は揃って帰ることになった。

「みんなありがとう」

まだ動けない朔良はベッドの上から見送る。

四人は揃って扉に向かったが、しかし結花だけが一人戻ってきた。

「ちょっと朔良に話あるから」

結花がそう言うとは皆は病室から出て行った。二人きりになる。

僅かに、MIYOSHIでのトイレの中を思い出させた。あとき以来、ちゃんと対面するのは初めてだった。

朔良は緊張した面持ちで結花を見る。病室にしばし気まずさが流れた。結花は言いにくそうに顔を歪めた。そして長い息をひとつ吐く。

「あんたがいまここで、こうしてるのは間違いなく、あんたが不用意に動いたせいよ」

「う、うん」

怯みながらも朔良は頷く。結花は更に眉間にしわを寄せた。

「でもあんたが撃たれたきっかけになった、あの場所を作ったのは私なのよ」

「結花…」

「朔良はバカでアホでマヌケでいい加減だけど」

「結花？」

僅かに朔良の眉間にも縦じわが刻み込まれる。

「ちゃんと、謝りたかったの」

「え？」

「そりゃあ、あそこであんたが素直になっていれば、すべて丸く収まっていたことよ。私が悲鳴を上げること怖い想いをするこもなかった…」

「もう分かったよ!」

朔良は堪らず結花を止めた。本当に不器用だな、と内心で思う。でも悪くない気分だった。結花の言いたいことは分かるから。

朔良はふふつと笑った。笑うと少し脇腹が痛んだが構わなかった。「なによ？ 気持ち悪いわね」

「素直にごめんなさい、悪かったですって言えないの？」

「なっ！」

「ごめん。私こそごめん。間違えてた」

「……」

きっぱり言い切る朔良に少しだけ結花は黙った。そしてばつが悪
い顔をする。

「とにかく、早く治さないとお酒飲めないわよ！」

「え？ 飲んじゃダメ？」

「当たり前でしょ！ なに言ってるの！ バカねバカ！」

結花は本気で憤慨していた。そして仏頂面になる。

「なんか疲れた。もう帰る」

そう吐き捨てるとさっさと踵を返した。

「結花ありがとう」

朔良が素直に言うのと結花は一度だけ振り返った。

「一樹さんとかいう人、ちゃんと考えてあげなきゃダメだからね。」

あんた、すぐ適当に対応するんだから」

そんな言葉を残してボタンと少し乱暴にドアが閉められた。朔良は独りきりになると、床に伏せ布団を頭まで被せる。結花の言葉が心に刺さって痛かった。

言いたいことは分かる。けれど自信がない。今頃どんな気持ちでいるのか、まったく想像がつかなかった。恨んでるのかもしれない。嫌われたかもしれない。自分のせいで一樹の経歴にキズをつけた。

凌駕する畏怖の念。

こんなときケイならば大丈夫と言ってくれるだろう。朔良が何も言わなくても……。だがケイはここにはいない。もうその必要がなくなっただけだ。

そしてきつとその都合に合わせて隼人もいないのだろう。

貴尚のことも結局中途半端なままだ。いつ保釈されるか分からない。
い。

(私がしたことってなんだったの?)

すべてが空回りに終わった気がした。

それから医師や看護師が顔を出す以外、この病室に訪れる者は
いなかった。

そして夕方になって刑事が現れた。池田と知らない男の二人。男
は青木だと名乗った。主に池田が話をし、青木は一步下がって見
守っていた。

「酷い顔だな。ちゃんと治療してるか？」

池田は開口一番、不躑なことを言った。今日もよれよれなコート
とスーツ。

朔良は布団で顔を覆い、池田に背を向けた。今は警察という名の
つくものには、複雑な反応しか示せない。すると後ろから勝手にパ
イプ椅子に座る音がした。

「おいおい、話してくれるって約束だろ」

確かに車の中で朔良はそう言った。池田とは志保のことで二、三
度話してる。そのとき悪い印象は持つてなかったから、話すなら池
田にと思っていた。

「いいか？君の証言次第でこれからが決まるといっても過言じゃな
いんだ」

「え？」

この発言には完璧に朔良の心が傾いた。合わせて体も少し池田に
向く。

「いまは盗聴器を通しての話だけだ。だが君は直に聞いている。裁
判に持ち込めば変わってくるだろう。松野貴尚をきっちり処罰した
いと思うなら、君の証言が効いてくる」

それにと池田は続けた。

「君に協力した者の情状酌量もそれにかかってくる。…だがそれに

は君も無罪放免となるかどうかは分からないが」

朔良は布団ごと飛び起きた。急激に動いたせいで脇腹に激痛が走る。でも構わず池田の目を捉えて言った。

「私はどうなっても構いません！なんでも話します。全部私が望んで彼らに動いてもらったことなんです！」

池田は無精髭を撫でながら僅かに笑みを見せた。いやらしいものではなく、本当によく言ったとその顔が言っていた。

「じゃあまずその辺を聞こうか？ではあのとときの運転手は？」

いきなり朔良は言葉につまった。あの二人についてはどこまで話せば良いか分からない。

しかしすべてを話すならそれは不可欠だった。二人がいなければ事態はまったく別のものになっていた。三吉達はどこまで話しただろうか。

「彼らも協力してくれただけなんです。私がビルに入りたいて言っただから」

朔良は目を伏せた。

「冬馬さんに人を殺させないために」

「なぜそこまでして？」

池田が食いつく。朔良は志保とのこと、そして貴尚についてをすべて話した。

もう志保とのあの話をするのに躊躇いはなかった。お互い間違っていたのだ。それについてはまだ心が痛んだのだが、護るものはない。

「ではその本城隼人が来て、君は殺さずにすんだと？」

池田は時々無精髭を撫でながら聞いていたが、ここでその目が鋭いものになっていた。手には手帳を持っていてペンを動かした。

「はい。だから私はあのととき殺意がありました。それで罪にとわれるなら、ちゃんと受け止めます」

朔良はまっすぐ池田を見据えた。その背筋は伸ばされ、凜としていた。それを眩しそうに池田は見返す。

「なるほどな、まあそこは追々聞いていくとしよう」

そしてなぜか話をかわす。朔良は肩透かしを食らった気分になった。

「松野貴尚という男、かなり才能があるようだな。君の傷口に染み込ませた薬品、あれは医学界が驚くようなものだったらしいぞ」

「あんなに痛かったのに？」

釈然としないで咳く。

「あれは熱で血液の凝固作用をさせるものだが、周りの皮膚には一切火傷を起こさないようになってるらしい」

オレもよく分からんが、と素直に池田は頭を掻いた。その説明は手帳を見ながら話された。カンペか、と朔良は口に出さずに突っ込む。

そして池田はちらりと朔良を見た。

「……あと、その後にしたケイという少年との会話のことは？」

「それは……」

思わず朔良は黙る。これは言いたくなかった。

ここからはケイの力の話になってくる。あまり好きなものとして捉えて欲しくない。もっと神聖なものだと朔良は思うから。

「あの二人のことは私にもよく分かりません。連絡先も知らないんです」

これは半分本当だった。いつもケイが見つ付けてくれたから、連絡先は知らなかったのだ。それから何度か二人について聞かれたが、すべて知らない分からないで通した。

「分かった。また話を聞きにくる」

池田の方が諦めてその日は帰っていった。見た目とは違い池田は鋭くて、何か見抜いていそうに感じた。

* * *

病院というのは本当に退屈だ。沙織里が持ってきてくれた本は二

冊。それを1日で読みきってしまったってあとはやることがない。

あれから二日が経っていた。皆仕事や普段の日常があるからなかなか来れないようだ。確かに無理してまで来てもらおうとは思わないが。

朔良は怪我自体はたいしたこと無かったため、ここでの仕事は安静と検査だ。しかし検査はすべて終わっていて安静のみになっていた。

時間があるといろいろなことが頭をよぎり、しんどくなってくる。朔良は枕に顔を埋めた。

もう痛みもない　　これは痛み止のおかげだ　　し、血の気も充分だ。

(一樹さんどうしてるかな?)

ぼんやりそう思って朔良は慌てて首を振った。

沙織里や結花が変なことを言ったせいで、変な意識をしてしまう。自分はそれどころではないのだ、気持ち的に。

志保には間違っていたなんて言ったが、実際に感じていたことは志保に会う前から思っていたことだ。

(いまさら考え方を変えるなんて、できるの…?)

じんわりと目尻に水分が溜まった。焦ってそれを拭う。あれから…涙腺が甘くなってしまったようで、困る。

両親の甘さから、未だに個室にいることは幸なことか否か…。少なくとも人がいればまだ気が紛れたかもしれない。

「甘いな、私も」

ただどやはり一人の方が居心地が好い、と思ってしまう自分がいた。

「何が甘いんだ?」

いるはずのない他人の声を聞いた。

あれ、と思つて朔良は枕から顔を上げた。そして目を丸くする。

「ええ?なんでいるんですか?つてか、いつ入ったんですか?」

声の主は苦笑した。

「ノックしたんだけど、聞こえなかった？」

「えっ？聞こえなかったですけど…じゃなくて、刑務所とか拘置所とか…に行ったんじゃない？…あれ？鑑別所？」

知識のない朔良の言葉に、一樹は呆れた顔を見せた。

「どれにも行っていない。警察には……ちよつと事情を聞かれたただだ」

留置場にはいたけど、とは一樹は言わなかった。わざわざ面白おかしく話すこともないし、朔良は気にするだろう。

「ええ？でもみんなが…池田さんも…」

何て言っていただろうか。朔良は深く考えた。

「そつだ勾留！あと情状酌量がどうとか…私てつきり逮捕されたのかと」

朔良の顔が、徐々に自信のないものにならっていく。

池田は朔良を話をするように持っていたのだろう。一樹も池田と話したが、なかなか理解ある刑事のようだ。悪いようにはしないと取調室でこつそり、ぼそりと言っていた。

朔良には伝えなくていい。こういう裏側は……まだ、今は。傷を治すのが最優先だと思った。

一樹は鮮やかに笑って左手に持っているものを僅かに上げた。

「これ飾っていいかな？」

それはアレンジメントされた花だった。バスケットに黄色い花を中心にあしらわれている。

「う、うん」

戸惑いながら朔良は頷き、上半身をやっと起こした。なんてお洒落なんだろう。しかし愛でている場合ではない。

「それでどうなったんですか？他のみんなは？」

「全員家に帰ってる。心配ないよ」

こだわりを持って窓際で花の向きを変えながら一樹が答える。意外な一面を見た気がした。

「隼人くんたちは？」

「隼人は……警察に行く前に一度電話があった。しばらく姿を消すって」

朔良は唇を噛んだ。きつとケイのためだ。あの力が公にならないように。

「しばらく経って騒ぎが収まれば、会いにくるだろう」

俺もまだ殴ってないし……と心の内で一樹は付け足した。そうとは知らない朔良は、ほっと胸を撫で下ろす。

「そうですね」

どこまで隠せるものなのか、今のところ朔良には分からないけれど。

「あとは冬馬さんか……」

崇史はどうしてるだろうか。とても辛そうにしていた顔だけが浮かんでくる。

一樹が朔良の呟きに振り返った。

「怪我が治ったら、一瞬に面会に行こうか」

「はい」

特に深い意味もなく朔良は頷いて続けた。

「松野さんの面会は出来ないかな」

「なぜ？」

一樹の表情が強張った。しかしそれは一瞬だけだったため、朔良は気づかない。

「肩の怪我、どうなったかなと……」

朔良は自分の手を見つめる。また震えていた。かなり深く刺した感触が残っている。

「あのことはもう気にするな。あれは自業自得だろう」

「でも……」

「朔良」

制止するように一樹は呼んだ。思わず顔を上げると、一樹の顔が近くにあった。ベッドに腰掛け、体重をこちらに寄せていたのだ。

朔良の鼓動が速くなった。

「もう終わったんだ。あとは警察の仕事だ。朔良は治療のことだけに専念すればいい」

「それは、分かってます」

「いや、分かってない」

「ええっ？信用ゼロですか？」

「ずいぶんハラハラさせられたからな」

そこで一樹は真面目な顔になった。

これだ。この表情をされると、朔良は何も言えなくなってしまった。だから視線を逸らして言った。

「それは……すみません」

「駄目だ。許さない」

「え……っと……」

「約束してくれ。もう独りで危ないことはしないと……じゃないと俺がもたない」

そこで一樹は項垂れる。綺麗なうなじが朔良の瞳に映った。

触りないな、とぼんやり思う。しかし一樹は顔を上げた。しまった。真剣な話しをしている最中だった。

「だいじょー……」

大丈夫ですよと最後まで言えなかった。一樹が低い姿勢のまま抱き締めてきたから。

今回は予感があった。なんとなく。なのに体が石のように硬くなり動かせない。うなじが近くにあった。

「朔良は俺とは約束してくれないよな」

「あの……そんなことないです」

見惚れていて即答出来ませんでした、とは朔良にはもはや言えない。

「だったらお願いがあるんだ。もっと朔良のことを聞きたい。朔良がなぜ死について考えるようになったのか、死にたいと思っているのか知りたいんだ」

この話はまだ胸が騒いだ。でもそれは、明らかに以前までのとは

違うものだった。

「それとも、それも重荷に感じるか？それなら無理にとは言わない
……でも……」

一樹にも迷いが見えた。迷わせているのは自分だと気づく。

「あれは……もういいんです。間違っていたって分かったから」

勘違いという名の羞恥心。本当は分かっていたのかもしれない。

歳を重ねることに変わり始めていた心。いつまでも死を抛り所には
できないのだ。

（もうやめよう）

もう意地を張った思い込みは必要ない。朔良は意識を切り替えた。

「それより私は一樹さんが心配です」

「心配？」

一樹が離れて顔を上げた。思いもよらなかった言葉を聞いたよう
な顔をしていた。

「私のせいで前科がついたんじゃないですか？」

心配そうに言う朔良に一樹はため息をついた。

「あんな。卑屈に考えすぎだ。別に今更これくらいの罪が増えたと
ころで……」

ふいに一樹が黙った。失言とその顔が言っている。

「いまさら？」

はつきり朔良はしかめっ面になった。

「いや、たいした罪にはならないということだ。今回もおそらく書
類送検か、悪くても罰金ぐらいで終わり……」

「今回も？」

「……………」

完全に一樹は言葉を失っていた。それに朔良はふふつと笑う。

心のタガが外れたように軽くなった。慣れているから良いという
問題ではないことは分かっている。しかしあまりにも軽く一樹が考
えているから、可笑しくなったのだ。

「今日はいろんな一樹さんが見れて楽しい」

クスクス笑いながら素直な感想を述べた。

「うるさい」

僅かに顔を赤らめて一樹は言った。また、新しい顔。

「一樹さん、約束します。もう無茶なことはしません。もう、その必要も無くなりましたから」

約束は稀に鎖で交わしたものを締め付ける。しかしこれは、そうはならない。確信があった。

(だって満たされていくから)

隙間が埋まる。それは憎悪に支配されたときと似て非なるものだった。確実に今の方が好い。心が健康的だ。

「重荷なんて…感じません。いえ、感じてもいいんです。嬉しいから」

「朔良……」

「だからお願いは聞きませんよ。あ、後半部分だけですけど」

もう思想を分かち合う人は必要ないのだ。

「分かった」

やっとそこで一樹も微笑んだ。そして真顔になると、朔良の耳に左手が伸びてきた。

「朔良。俺も約束する。ずっとそばにいる……俺が朔良を護るから」
親指が渴いた目の下を撫でる。彼が触れている部分が火照るように熱くなった。

しばらく動けず見つめたまましていると、一樹の顔が近づいてきた。鼓動が最高潮に高鳴る。しかし嫌な気はまったくしなかった。

だから……目を閉じた。

そして一樹の唇が朔良の唇に重なる。

朔良には幸せになって欲しい。

志保はそう言っていた。自ら耳をふせていたが、これも確かに志保の望みだったのだ。

朔良の瞳から涙が溢れた。だけど……そのまま身を任せていた。

頬を伝う水分に気づいて一樹が顔を離す。そして何も言わずに指

で拭った。

「ごめんなさい。私あれから泣き虫になったみたい」

ダメだな、と朔良は目を押さえながら呟いた。

「全然駄目じゃない。いままで無駄に我慢してきたんだ。泣きたいときは泣けばいい」

「ムダ……」

少々朔良の頬が膨らむ。だけどすぐに笑みが戻った。

それを見ると一樹は包み込むように抱き締めた。朔良も背中に腕を回す。

すると一樹はそつと耳元で囁いた。

「良かった。ほんの少しだけ罪悪感があったんだ」

「え？どういうことですか？」

首を出来るだけ一樹に向けて訊く。しかし、それからしきりに朔良が問いたとしても、一樹は口を割らなかつた。

あのととき、朔良の寝込みを襲ったようになってしまったことは、これで闇に葬り去られたのだ。

窓際にある黄色いチューリップが僅かに揺れた。

エピソード

遠くからじつと隼人はひとつの建物を見つめていた。そう、朔良がいる大きな総合病院。

「良かったな」

口元に自然と笑みが溢れた。

朔良の感情の変化が分かる幼なじみはここにはいない。だからこの言葉は、朔良の心身のことというよりはもっと漠然としたものだった。

「俺も頑張るか」

そうひとりごちると、サングラスを掛けた。

あれから新聞や週刊誌にあのときの車内の写真が載ったが、幸い誰にもまだばれていない。

自分だけならいくらでも警察に行つてやる。嫌いだけど。

しかしケイは駄目だ。

ケイは二日続けて外泊してことになってしまい、母親に軟禁されている。

それを向かいに行くのだ。本人の実家に向かいに行くなんて変な話だ、と隼人は思うが仕方ない。

ケイの両親はいつも怯えている。もはやそれは力だけではなく、ケイそのものに。

それが周りにばれないように異常なまでに隠すのだ。それは大学に進学すると決めただけで、大騒ぎしたほどだった。

両親から見れば、隼人はケイを連れ出す悪となっている。ずいぶん昔から酷いことを言われた。

しかしいくら苦手な人種でも、引き下がるわけにはいかない。

(朔良があんなに勇気あんだ、俺だって出来る)

初めて起こす反乱。ケイを自由にする、なんて今までは頭によぎっても出来ずにいた。

いくら自分が嫌悪感しか持てない存在でも、ケイにとっては実の親だ。しかしケイも変わろうとしているのが今回分かった。

「待ってるよ。ケイ」

天高く腕を伸ばすと、隼人は駆け出した。

空が蒼かった。冬ももうすぐ終わる。いつまでも同じ処ところにはいられないのだ。

季節も、人の想いも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3471n/>

wish

2010年10月8日13時49分発行